

宮城県文化財調査報告書第 123 集

## 宮城町西館跡、利府町郷楽・天神台遺跡

愛子・仙塩バイパス関連遺跡発掘調査報告書

昭和 62 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

東北地方建設局仙台工事事務所

## 序

私達のふるさとには、祖先の人々が大切に残してくれた豊かな自然環境と数多くの文化財に恵まれております。しかし、豊かな自然環境も文化財も近年の開発の波にもまれ、私達が本気になって保護の手を差し延べなければ、消滅してしまう状況にあります。今や、私達の生活や心持ちに潤いを与えてくれる自然や文化財を将来の人々のために伝えていくことは現代の私達の大きな責務です。

今回報告するのは、建設省による宮城町の愛子バイパスと利府町の仙塩バイパスに係わる遺跡で発掘調査を行ったものです。このバイパスの建設にあたり、宮城県教育委員会と建設省東北地方建設局は文化財の保護のための協議を重ね、分布調査等をおこなって遺跡の確認に努めました。その結果、宮城町の西館跡のように、初め道路が遺跡の中央部を通過する予定でしたが、関係機関の努力により遺跡の裾部をかすめるように設計変更されたものもあります。

最後になりましたが、文化財の保護のために協議や調整に御理解をいただき、発掘調査にも多大な御協力を寄せられました建設省東北地方建設局仙台工事事務所はじめ宮城町教育委員会・利府町教育委員会など関係機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月

宮城県教育委員会

教育長 関本朝吉

# 目 次

A . 西館跡	1
1 . 調査に至る経過	1
2 . 西館跡の位置と歴史的環境	1
3 . 西館跡の概要	2
4 . 調査の内容	4
5 . 考察とまとめ	12
B . 郷楽遺跡・天神台遺跡	16
. 遺跡の位置と歴史的環境	16
. 郷楽遺跡の調査	17
(1) 調査の経過	17
(2) 調査の方法・地区設定	17
(3) 調査の内容	17
1 . 調査区の大別	17
2 . 基本層位	20
3 . 遺構と遺物	23
a . 竪穴住居跡	23
b . 掘立柱建物跡	37
c . 埋設土器遺構	55
d . 土 壙	58
e . 焼土遺構	60
f . 竪穴遺構	62
g . 溝・その他	67
4 . 遺物包含層とその出土遺物	69
5 . 郷楽遺跡のまとめ	74
. 天神台遺跡の調査	86

## 例 言

1. 本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が計画した愛子バイパス、仙塩バイパス工事に伴う遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は建設省東北地方建設局仙台工事事務所から依頼されて、宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 工事に係る埋蔵文化財の保護のために、協議や発掘調査にあたって建設省東北地方建設局仙台工事事務所、宮城町教育委員会、利府町教育委員会等の関係機関をはじめ多数の方々から多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書の土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973年）を利用した。
5. 本書は文化財保護課の下記の調査員と佐藤宏一課長が協議しながら執筆・編集したものであるが、内容の検討については佐藤則之技師をはじめ職員諸氏の指導を受けている。なお、執筆にあたって具体的な指導を受けたものについては文中に明記した。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

## 調査要項

1. 工事名・遺跡名（遺跡記号・宮城県遺跡地名表）・所在地  
愛子バイパス - 西館跡（IR・21029）宮城町下愛子字栗生  
仙塩バイパス - 郷楽遺跡（IT・22066）利府町森郷字後楽東  
- 天神台遺跡（IS・22067）利府町加瀬字天神台
2. 現地調査期間（整理期間）・発掘調査面積  
西館跡 - 昭和61年9月（昭和62年1～3月） - 1,300 m<sup>2</sup>  
後楽遺跡 - 昭和61年6～8月、11～12月（昭和62年1～3月） - 6,800 m<sup>2</sup>  
天神台遺跡 - 昭和61年11月（昭和62年1～3月） - 2,700 m<sup>2</sup>
3. 発掘調査主体者 宮城県教育委員会、建設省東北地方建設局仙台工事事務所
4. 発掘調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課（調査員 - 藤沼邦彦・斎藤吉弘・小川出・佐藤裕志・菅原弘樹・庶務 - 大泉雄治・鈴木千枝子・曾根章）
5. 指導・協力者 - 西館跡...佐藤巧（東北工業大学）、入間田宣夫（東北大学）、原河英二・工藤信一郎（宮城町教育委員会）、嘉藤美代子・田中則和・佐藤憲一・長島栄一（仙台市）、伊達泰宗（瑞鳳殿）、沢口富雄、庄子半蔵、庄子はつよ（地元資料提供者）、斎藤鋭雄（宮城県農業短期大学）、郷楽遺跡・天神台遺跡...進藤秋輝・白鳥良一・高野芳弘・後藤秀一・丹羽茂（宮城県多賀城跡調査研究所）、桑原滋郎・吉沢幹夫・小井川和夫・岡村道雄（東北歴史資料館）、千葉孝弥（多賀城市教育委員会）・庄子敦・坂本秀悦（利府町教育委員会）

# A . 西 館 跡

## 1 . 調査に至る経過

仙台市と山形市を結ぶ国道 48 号線は、宮城町上愛子と仙台市街地との間で交通渋滞が著しくなり、建設省はこの間の交通安全の確保・渋滞の解消・地域住民の利便などを目的として、仙台市茂庭字滝沢（起点）から宮城町上愛子まで（終点）の道路を建設することになった。

埋蔵文化財の関わりについては建設省東北地方建設局仙台工事事務所・宮城県教育委員会・宮城町教育委員会の三者間で協議がなされ、最終的には観音堂遺跡・新宮前遺跡・蛇台原遺跡・西館跡などが路線に係ることになった。建設省東北地方建設局仙台工事事務所はこれらの遺跡の発掘調査を宮城県教育委員会に委託し、昨年度は観音堂遺跡・新宮前遺跡などが調査された。

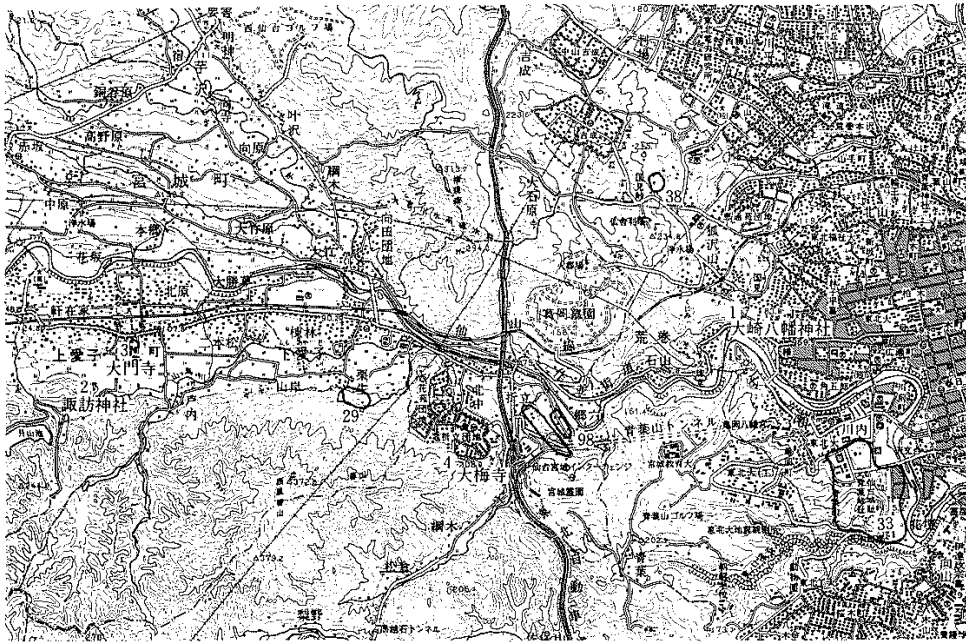
今年度調査したのは西館跡である。この遺跡は初め路線が館跡の中央部を通過する計画であった。しかし、この館跡は伊達政宗の娘、五郎八姫が居住したところと伝えられ、宮城町の人々の故郷意識を支える重要な文化財とみなされる場所であった。そのため、宮城町教育委員会の要望で関係機関の間で協議を重ね、館跡の北側裾部を通過する路線に変更することになった。これは関係機関の文化財に対する深い御理解のあらわれである。昭和 50 年 12 月に、西館跡は宮城町の重要文化財（史跡）に指定された。

## 2 . 西館跡の位置と歴史的環境

西館跡は宮城郡宮城町下愛子字栗生館囲に所在する。下愛子は宮城町の東端に位置し、広瀬川南岸の広い河岸段丘上に広がる地域である。仙台城下に近接するため、山形と仙台を結ぶ羽州街道沿いの重要な地点でもあった。

西館跡の地は標高 372 メートルの蕃山の北麓にあたり、急角度でおりてきた斜面がゆるやかにのびる台地状の部分を利用しており、周囲一帯を広く見渡することができる所である。ここから仙台城までの距離は 6.0 キロメートルで、比較的近い距離である。西館跡に関連する周囲の史跡として、仙台城のほか諏訪神社（宮城町上愛子字宮下）・大梅寺（仙台市茂庭字綱木裏）・大門寺（宮城町上愛子字上原）がある。諏訪神社は元国分荘三十三箇所村の総鎮守国分一宮として名高く、山岸修理・茂庭庵や伊達政宗などが造営に関した棟札や了庵が奉納した鰐口などがあり、西館の居住者との強い結びつきをしめしている。大門寺は五郎八姫が西館に住居した時にお守り札を差し上げたので菅貫文の寺領を下賜されたとかお屋形様等のため祈禱を進めたので寺領御下賜の墨付を拝領したとか伝えられている。大梅寺は慶安四年に雲居禅師が開山したもので、五郎八姫は雲居禅師のもとで落飾して天麟院瑞雲全祥禅尼と号したと伝えられる。そ

の他、伊達家に関連するものとして四代藩主綱村が別荘として造営した郷六御殿（宮城町郷六）  
 五代藩主吉村が仙台北下の角五郎丁から移し、歴代藩公の位牌が安置されていた臨濟院跡（宮  
 城町吉成）などがある。こうしてみると下愛子付近は比較的仙台北下に近く、広瀬川の流れる風  
 光明媚なところであったので、仙台北下の人々に親しまれていたのであろう。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
29	西館跡	近世	1	大崎八幡神社	江戸
33	仙台北下	江戸	2	諏訪神社	江戸
38	臨濟院寺跡	近世	3	大門寺跡	江戸
98	郷六御殿跡	近世	4	大梅寺	江戸

国土地理院発行 1/50000「仙台」を複製

第1図 西館跡と周辺の遺跡

### 3. 西館跡の概要

館跡の標高は約110～115mで平地との比高約5mである。館の範囲は東西150m、南北130mで、  
 北は高さ約6mの段差（段丘崖）で、東西は沢によって、南は蕃山の急斜面に変わる部分で区切  
 られる。館の周囲及び内部に土塁・空堀・石垣・通路・井戸・池・平坦部などを観察できる。  
 遺構については第2図を利用して説明する。

外郭の土塁は西側と南側によく残っているが、もとは周囲にぐるりと回っていた可能性があ  
 る。この土塁には石が多用されており、部分的には石塁状を呈するところもある。北側の中央  
 部に今回検出された石垣があり、ここが館の正面出入口口と思われる。石垣の上面は通路とな  
 る。ここから通路（現在も利用されている）を登ると西側に平坦部、東側に平坦部がある。



第2図 西館跡の概要

平坦部①は現在ブランコや鉄棒があり児童公園となっている。平坦部②はやや傾斜を持つ平坦面で、鍵の手になって北側の池の部分まで続き、大きな面積をもつ。現在、畑地として利用されている。平坦部③との境にある石垣の近くに井戸跡が残る。平坦部④の南側で平坦部⑤の西側にある平坦部⑥は最も面積の広い平坦部で、建物が立っていたと伝承されているという。平坦部⑦はやより約3m高く、中央部のやや北寄りに井戸跡が、南側に池状の窪地がみられる。また、北東隅は内側に鍵形にわずかに屈曲しており、この部分に石垣が残っている。平坦部①と土塁にはさまれた部分に小さな平坦部⑧とがある。平坦部⑨は南西隅にあたり、

館の中でもっとも高い場所である。ここは稲荷杜が祀られている。なお、平坦部の南側すなわち館の南東隅の土塁に接する部分にある池跡は周囲約40mの小規模のものであるが、周囲に立石などがみられ、築山状のものもある。この池は当時の庭園の一部を構成したものとみられる。なお、平坦部の西側の部分に一段低く南北に細長い平坦面がある。その北端の近くに東西方向の幅1mの石の多い土塁がある。また、館の北側前面にも平坦面があるが、今回の調査部分に含まれたが、遺構の発見はなかった。

以上のように、西館跡は全体的にきわめて保存がよく、とくに池跡付近は発掘調査をして整備を行えば、江戸時代初期（時代については考察の項を参照）の庭園の一部を復元できそうである。

## 4. 調査の内容

### 1. 調査の経過

発掘調査は昭和62年9月に行われた。路線はすでに述べたように、館跡の中央部を横断するものから館跡の北側裾部をかすめるものに変更されていたが、外郭施設が発見される可能性があったための調査であった。調査区は1,600㎡と狭い範囲であったが、東寄りの部分に石垣遺構が発見され、館の出入り口に相当することがわかった。

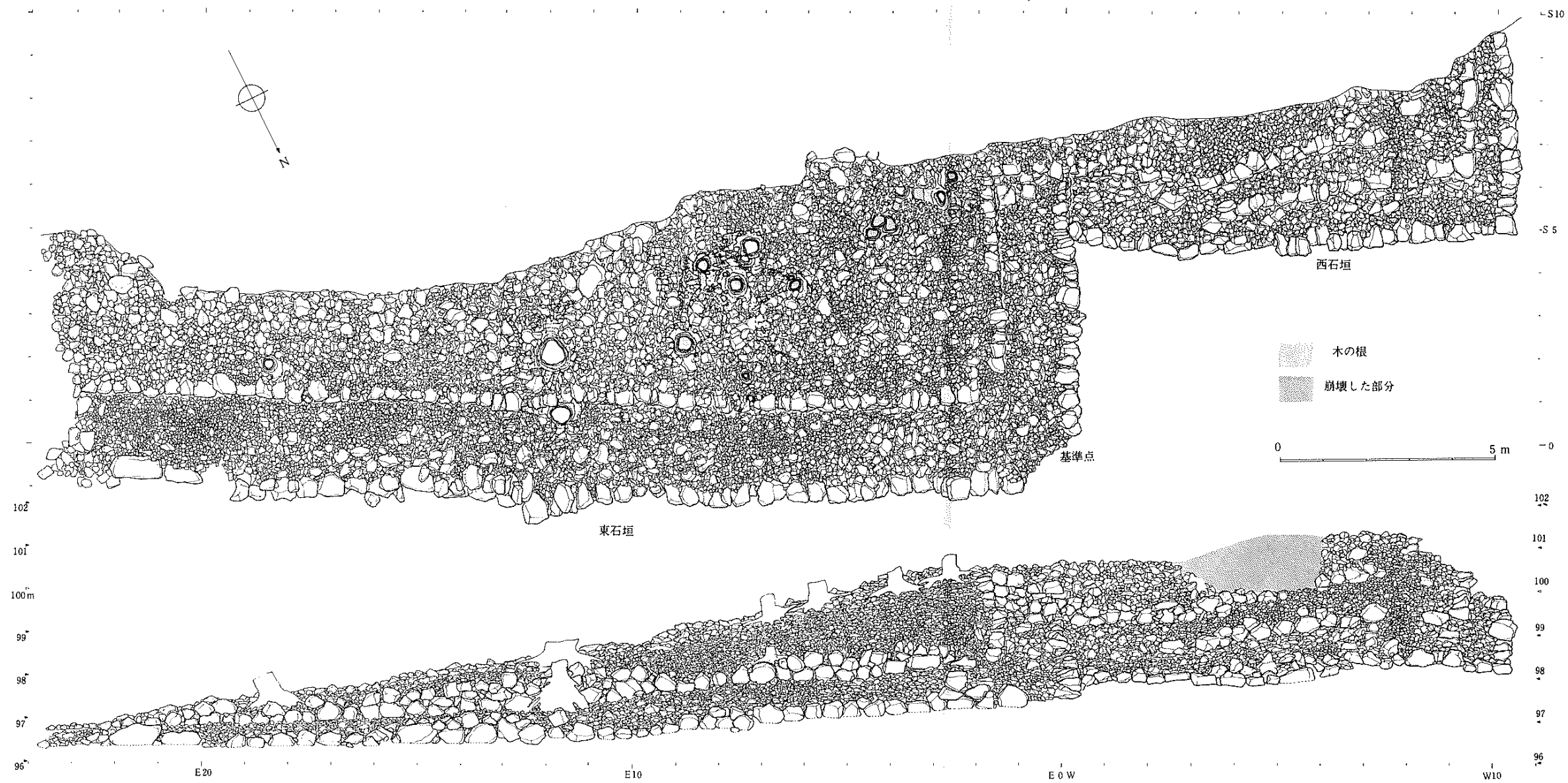
### 2. 発見遺構と遺物

調査区のうち、西側は段丘崖の比高5~6mの段差とその傾斜を利用してそのまま館跡の外郭線としている部分である。層位は第1層は表土の黒色土、第2層は地山の崩壊土、第3層は地山の礫層である。斜面などに特に施設は認められなかったが、志野織部の皿の破片1点と宋銭2枚が採集されている。また、斜面の下の平坦部も一部調査したがここでも遺構は発見されなかった。

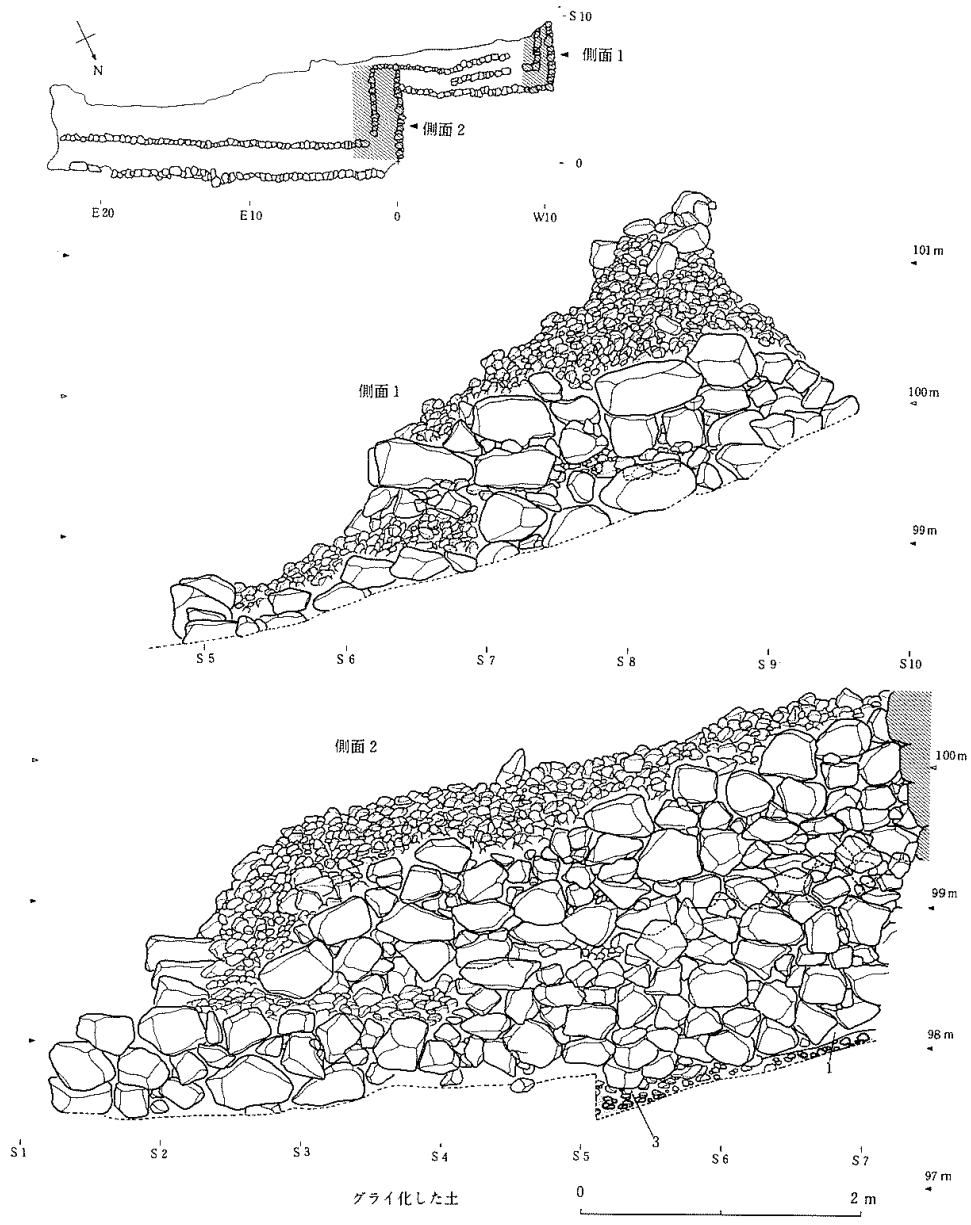
調査区の東側は発掘前は藪地となっており、ゴミなどが捨てられていた。そのため表面に大きな石が多数露出していたものの、石垣が存在しているのか、もしあったとしても殆ど崩壊しているのではないかと思われた。しかし、調査の結果、動いている石を取り除きながら遺構を検出した結果、意外と石垣の保存が良好であることがわかった。石垣は外郭部分ではここだけにしかなく、内部に出入りする通路を構築し保護するとともに、出入り口を荘厳に見せ掛ける役目も果たしたものとみられる。

【石垣】 石垣は段丘崖の下端部に沿って長さ34mにわたり構築され、平面的にみると西側部で奥に向かって三ヶ所で曲折し、いわゆる鍵の手状になっている。すなわち、東端から西に24mのところまで奥（南）に直角に曲がり、6mほど奥に進むと再び西の方向に曲がる（東端か

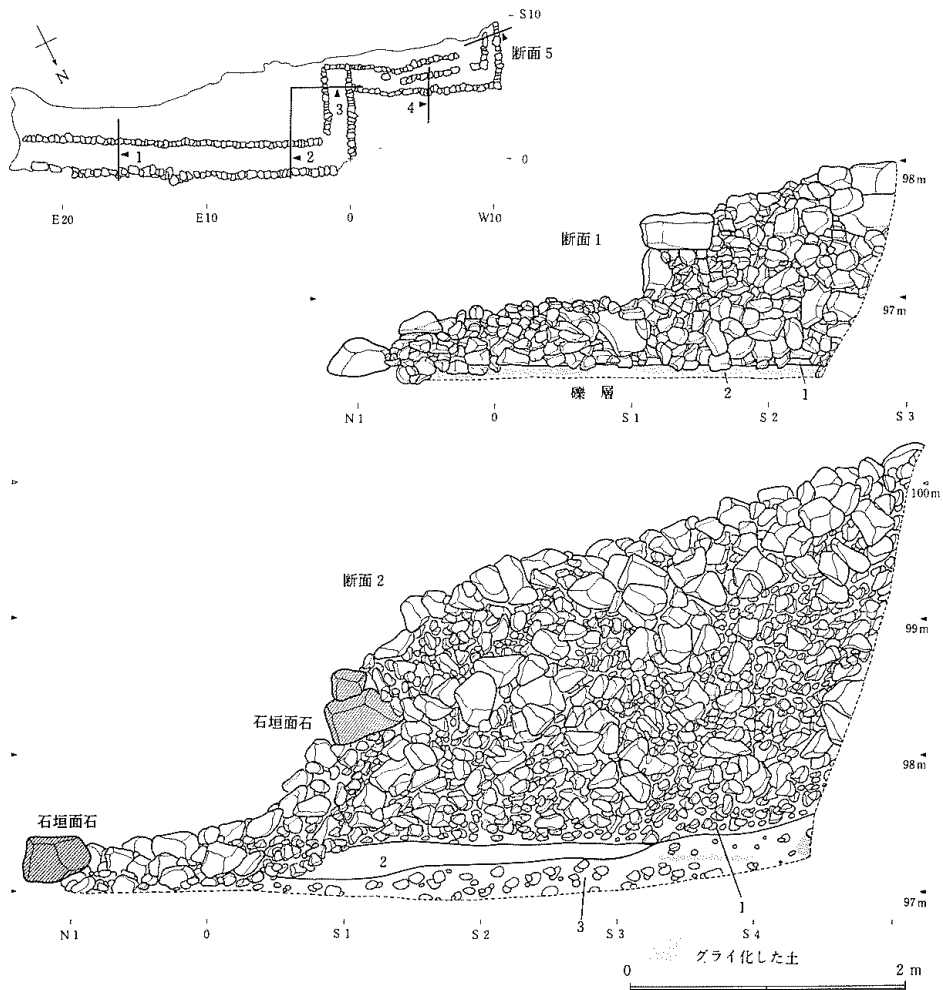




第3図 石垣平面・正面図

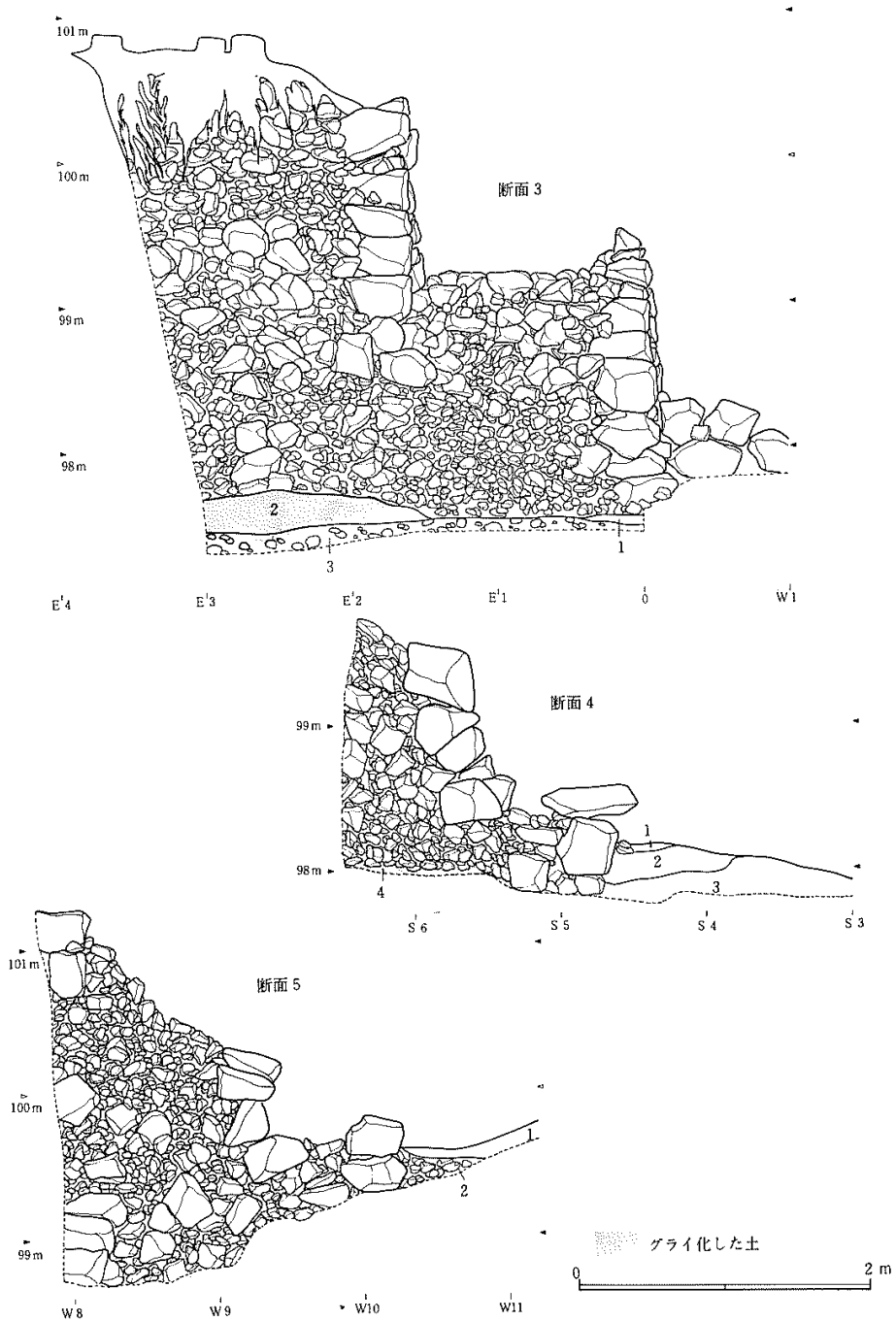


第4図 石垣側面図



位置	No.	土色	土性	特徴
断面1	1	5YR4/4 赤褐色	砂	
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	上下がうすく明赤褐色になる。
断面2、3	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭・鏡土を多く含み、遺物も出土する。
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	炭・鏡土・遺物を多く含む。
	3	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭・練を含む。
断面4、5	1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	現表土
	2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	掘り方埋土
	3	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	旧表土?
	4	5YR4/3 暗オリーブ色		

第5図 石垣断面図(1)



第6図 石垣断面図(2)

ら2回目の曲がり角までを東石垣とよぶことにする)。2回目の曲がり角から西に10.3mのところまで再び奥に曲がり、そこから4.8m奥に進むと石垣はなくなる(2回目の曲がり角から西端までを西石垣とよぶことにする)。

【東石垣】 東石垣は長さ24m、西側面まで含めると延長30mある。正面からみて2段に構築されている。上段石垣は外面に大きな石を積み上げ、その背後に小さな石を詰めている。外面積石は崩落のため2段ほどしか残っていない。上段石垣の上面は通路として利用されており、東から西にむかって次第に高くなるように構築されているが、高くなるにつれ通路面の石垣外面に近い部分が外面積石とともに崩落して欠損している。通路面は小さい石が中心となるが、平たい大きな石も敷かれている。平面図で通路面の大きな石は奥(南側)に多く、石垣外面に近い側に少ないのは、路肩が石垣積石とともに崩壊したためであろう。なお、上段石垣の外面も道路面と同じく東から西にいくにつれ高くなるはずで、東端ではその積石が1~2段であっても西にいくにつれ数が多くなり、曲がり角の近くでは5~6段、高さも3mはあったであろう。

下段石垣も外面にあたる部分に比較的大きな石が積まれるが、大部分は積石が1段(基部)しか残っていない。もと2~3段あり、高さも1.5mあったと推定される。外面積石の背後には多数の小さい石が裏込めとして多数詰めこまれ、その上面は平坦面を構成している。平坦面の幅は3mあり、西に行くにつれ若干高くなる傾向があるようであるが顕著でない。

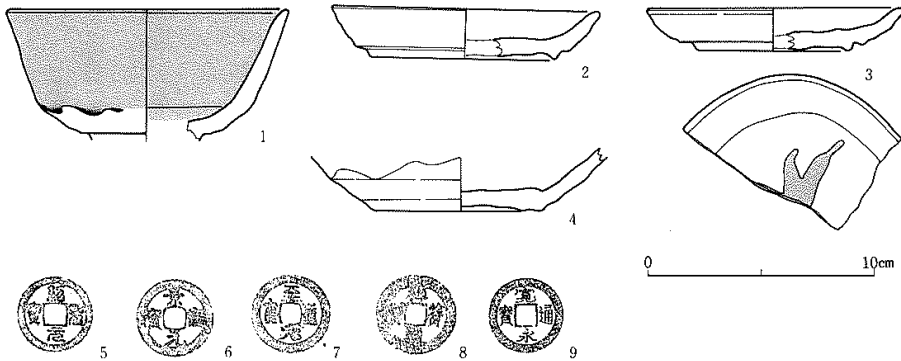
【西石垣】 西石垣は正面からみると3段あるようにみえるが、それぞれの石垣外面の石列を辿ると途中で曲がったり、消えたりしてはっきりしない。正面図をみると石垣上段の積石基部の高さは東の部分では揃うが、西側ではあまり揃わない。中段石垣の外面積石は東側になく西側寄りにみられるが、積石の基部の高さは揃っていない。基部の積石が揃っているのは下段石垣のみである。以上のことから西石垣は初め東石垣同様上下二段に構築されていたが、上段石垣に崩落が起こり、積み直しをした時に3段にみえる部分ができあがったものと推定される。当初の上段石垣は外面積石が5段ほど、高さが3mはあったと推定される。上段石垣の上面は調査区外で状況は不明である。

下段石垣の外面積石は1段ほどしか残っていないが当初は2~3段はあったとみられる。上面は東石垣の場合と同じく平坦面を形成し、幅は3mあったと推定される。

石垣の構築は下段石垣からなされ、まず外面の基部の石を並べ、外面の石積みをしながらか後に小さめの石を詰めていった。その後、同様の方法で上段石垣を構築したと思われる。最後に通路として使用する部分の舗装をおこなった。

【石垣の積み方】 石垣の積み方を調べるため石垣の一部を取り除き、地山まで掘り下げた。その時の観察(第6図の断面図を参照)によると、手順として旧表土の上に下段石垣の外

面積石部に大きな石を積み、同時に背後一帯に小さな石を裏込めしながら詰め敷く、次いで、上段石垣の外面石積みを大きな石で行いながら同時に背後に裏込めとして小さな石を詰め込んでいった、東石垣では上段石垣の上面を、通路面として利用するため大きな平らな石などを敷き並べた、と思われる。上段石垣の背後の裏込めの石は調査区外までのびるため詰めた範囲は知ることが出来なかったが調査区だけでも膨大な量であった。なお、石垣に利用した石は地山の礫層に含まれる石と同じであり、礫層の石を利用したものとみられる。



No	出土地点	遺物
1	旧表土	総織部碗
2	西石垣二段目中	美濃丸皿
3	平担部④斜面	志野織部皿(草文)
4	東石垣中	土師質土器
5	旧表土	紹聖元宝
6	西石垣二段目中	景德元宝
7	平担部④斜面	至道元宝
8	平担部④斜面	禅符通宝
9	東石垣中	寛永通宝

第7図 出土遺物

【遺構出土の遺物】 遺構に伴う遺物はごく僅かで、陶器片3点、土師質土器片1点、古銭4点である(第7図)。

石垣の積み方を調べるため石垣の一部を取り除き、地山まで掘り下げた際に、石垣下の旧表土から総織部の碗(1)の破片と宋銭(紹聖元宝)1枚が出土した。総織部の碗は口縁部から腰部にかけての破片で、高台部はわずかに残るのみである。銅緑釉がかけられているが、腰部以下が露胎となる。この遺物は石垣構築前のものである可能性がある。また、石垣の崩れた石の中から美濃の丸皿(2)の破片と宋銭(景德元宝)1枚、東石垣の上段石垣上面の通路面から土師質土器の底部破片と寛永通宝1枚が出土している。志野の丸皿は高台部が削り出しで、畳付部は丸みをおびる。釉薬は灰緑色で貫入がみられる。この遺物は石垣構築遺構のものと考えられる。また、先に述べたように西側の斜面では志野織部の皿(3)と宋銭(至道元宝・禅符通宝)2枚が採集されている。志野織部皿は高台部が削り出しで、断面は三角形に近い。見込みに鉄

釉による草花文が描かれている。

陶片の年代は、志野皿が大窯期の終末に近い16世紀末頃、志野織部皿と総織部碗は登り窯の始まった17世紀前半のより古い頃であろう。これらの年代は文献からわかる西館跡の使用期間すなわち慶長期（山岸修理が居住した時期）～万治期（仮御殿とした五郎八姫は寛文元年死亡）にほぼおさまるものである。

なお、総織部碗は県内ではここと仙台城三ノ丸跡でしか知られていないので、西館跡出土の陶器は数は少ないが、この地方では他の皿類をふくめやはり高級なやきものであったと思われる。

## 5. 考察とまとめ

調査の内容はすでに述べたのでここでは文献のほうから西館跡の居住者・性格・年代などを考えてみたい。

西館跡に関して一般的に利用される資料は安永三年の「下愛子村風土記書出」（文献1）で、「栗生 一、御西館 先年八山岸修理之助様御屋敷之由寛永拾三年之頃迄茂庭了庵様御屋敷二御座候処、了庵様栗原郡文字村え御取移、右御屋敷八御普請被仰付、天麟院様御仮御殿被相立御西館と申唱候、御卒去被遊御廟所於松嶋天麟院被相立候事」とある。これを要約すれば、西館跡は 初め山岸修理之助の屋敷であった。寛永13年まで茂庭了庵の屋敷であった。その後、屋敷は普請され、天麟院の仮御殿となり、西館とよばれた、となる。以上の内容は宮城町の人々にはなんの疑問もなく受け止められており、伊達政宗の娘五郎八姫（天麟院）が居住した館跡として非常に親しまれている。町教育委員会で立てた遺跡標柱の説明も「下愛子村風土記書出」の内容とほぼ同一であるといつてよい。

この通説について若干の吟味をしてみよう。

西館跡は延宝年間の「仙台領古城書上」に記載されていない。このことは、この遺跡が城館跡として認識されるものでなかったことを示している可能性が大きい。実際、西館跡の占地・形状・規模などは、これまで知られている防御的施設としての「館跡」と考えるより、大きな屋敷地としてとらえたほうがよさそうである。

山岸修理之助は山岸定康で、仙台人名辞典によると「名取郡富沢邑主山岸三河守宗成の子、亡父の冥福祈願の為、慶長十年仙台土樋に京都智積院の末寺として西光院を開基す」とある。山岸修理がこの地に住んだことを明確に記した資料は「下愛子村風土記書」以外に見出していないが、宮城町諏訪神社で所蔵する慶長三年十二月の造営棟札に大旦那の一人として名を連ねている（文献1・2）。したがって、慶長年間前後に山岸定康が西館に居住していた可能性は大きい。

茂庭了庵が西館跡にいたことを示す資料に「封内風土記」や『綱元君記録』がある。「封内風土記」の内容は「下愛子村風土記書出」と同じである。『綱元君記録』（宮城県図書館蔵）は公開されていないので、蔵館に関連する部分を抜粋すると「是（注、夢想之連歌が興行された寛永八年）ヨリ先仙臺御下屋敷指上ラレ愛子村ニ於テ御屋敷御拝領御住居アリ御用有之ノ時八仙臺へ出玉フト云々、年月不知。日下氏記録ニモ愛子村ニ御知行二十貫文アリ是志田郡中目村へ取替地ニナシ玉フ乎御加増ニ賜ハル乎不詳ト云々。或時御屋敷ノ内ニ猪來ル御臺所御役人土屋孫右衛門某御廣間ニ掛タル御並鎗ヲ以テ突留タリ御褒美トシテ即其御鎗ヲ賜フ其家ニ傳テ玄孫助左衛門信真所持ス。御屋敷ハ下愛子ノ内栗生ト云所ニアリ萬山ノ麓ナリ後 天麟院殿御所望ニヨッテ御屋敷並萬山共ニ指上ラルト云々、年月不知」（寛永八年の条）、「貞山公 去ノ訃ヲ聞セラレ則門地ニ退玉フト云々、然レハ愛子村御屋敷ハ 天麟院へ差上ラレ兼テ門地ニ於テ御屋敷等構置カレ今度御退去ト見エタリ、何時御取移アリシヤ委事不知」（寛永十三年条）となる。これによって、綱元が寛永八年より前に愛子村に屋敷を拝領して居住していたこと、それは下愛子の栗生で萬山（蕃山）の麓にあったこと、愛子村に知行地が20貫文余あったこと、屋敷の中に猪が入ってきて家来が槍で仕留めたことがあったこと、綱元は寛永十三年に貞山公（伊達政宗）の訃報に接し、栗原郡文字村（現、栗駒町文字）に引き籠もったこと、などがわかる。綱元が現在西館跡とよばれる所に屋敷を構え、寛永8年以前から寛永13年まで居住していたことは間違いのないことであろう。綱元は、伊達政宗が寛永12年に諏訪神社を造営した時、代官として造営にあたり、翌年には諏訪神社に鰐口を奉納しているが、この時の棟札（県指定有形文化財）や鰐口は同神社に現在も所蔵されている（文献2）。なお、「伊達治家記録」によると、伊達政宗が綱元宅を訪問したという記事は寛永年間にかぎっても、寛永6年4月6日から同13年4月19日まで5回ある。「綱元君記録」によるかぎり、政宗が訪ねたのは下愛子の栗生にある屋敷、すなわち西館跡の地になるであろう。最後の訪問日は政宗が江戸に出掛ける前日にあたり、政宗は「御顔色衰へさせられ、御膳も進みたまわず」という状況であった。その後、政宗の病状は急速に悪化し翌月24日に品川の江戸屋敷で70才で死亡する。政宗の訃報をきいた綱元もすでに88才という老境にあり、悲痛のあまり栗原郡文字村（現、栗駒町文字）に引き籠もったというのは「綱元君記録」にあるとおりである。

五郎八姫（天麟院）が居住したことは事実であろうか。彼女が西館様とよばれたについては、貞山公治家記録が元和6年9月「廿一日、乙未、越後少将忠輝朝臣ノ北御方江戸ヨリ御下着、御城山西ノ麓ニ居宅を営マレ住シ玉フ、因テ西館と稱ス、後天麟院夫人と號ス」と説明している。問題は御城山の麓にあった居宅の位置であろう。このことについて鈴木節夫氏は「天麟院夫人の屋敷の所在について」（文献3）で、正保初年作成の「奥州仙台繪圖」（斎藤報恩会所蔵）にみられる仙台城二ノ丸に接する西屋敷をもっとも蓋然性の高い所と考証し、下愛子栗



生の西館説を否定している。鈴木説のうち、「御城山西ノ麓二居宅」が仙台城二ノ丸に接する西屋敷であることは肯定できる意見である。しかし、下愛子栗生の西館跡が天麟院と全く関係なしとすることについては疑問がある。「綱元君記録」には綱元が天麟院に屋敷を差し上げたとあり、地元にも五郎八姫が西館に居住していたとの伝承が濃厚にのこっている。おそらく、綱元が去ったのち、「下愛子村風土記書出」にあるように、新たに普請が加えられ、仮御殿として利用されたのであろう。しかし、五郎八姫が日常的にここに居住していたとは思われない。伊達治家記録の寛文元年5月12日に「天麟院殿去ル八日仙臺城西館二於テ卒去セラル」とあるように、天麟院が死亡したのは仙台城内の西館（鈴木説の西屋敷）であることは明白であり、おそらく栗生の西館はあくまでも仮御殿として、別荘的な性格をもつものであったと見たい。この地が西館とよばれるにいたったのは、すでに西館様とよばれていた天麟院がこの屋敷と関係をもつようになってからのことであろう。

以上の文献学的結論とこれまで述べてきた考古学的な調査結果を整理すると、次のようにまとめることができる。

西館跡はいわゆる中世の城館跡ではなく、近世初頭の上級武士の屋敷地であった。

文献によると、慶長以降に山岸修理が、寛永8年以前から寛永13年まで茂庭綱元が居住し、寛永13年以降に伊達政宗の娘、五郎八姫の仮御殿となった。その後は不明である。茂庭綱元居住していた時には政治家も訪ねることがあったようである。

調査区で検出された石垣は館の出入り口部の通路を構築するとともに出入り口を荘厳に見せ掛ける役割も果たしたと思われる。数は少ないが、出土した陶器はこの地方としては高級品であった。

石垣下の旧表土から総織部の破片が出土したことにより、石垣は当初からあったものでなく、その後のある時期、おそらく茂庭綱元が居住していた時か五郎八姫の仮御殿として普請があった時に構築されたものであろう。石垣が2段の構成をとり、出入り口を立派にみせる役割も果たしていたとすれば、後者の仮御殿の普請の時が有力であろう。

なお、追加として次のことについて触れておきたい。

**【西館跡の背後にある東西にのびる土塁と空堀】** 現在、西館跡の南側（蕃山側）に沿って、長大な土塁と溝状のものが延々と続くのが観察される。開発などによって破壊されている部分もあって正確に辿ることは難しそうである。土塁に沿って空堀らしきものが見えるが、土塁を築くために土をとった部分であろう。これについては、西館から仙台城まで続く間道であるなどの伝説もあるようである。しかし、猪をさける土手であるとの話しも聞いた（西館跡の傍らに住む沢口伝吉氏より）。しかし、「綱元君記録」にもあるように江戸時代の初めは猪が出没するような環境であったようである。こうした事情は江戸時代を通じて余り変わりが無かったと

思われる。問題の土塁と溝状の遺構は、恐らく西館に居住する人々がいなくなった後に、里の畑を猪などから守るために築かれたものではなかるうか。

【瓦】 調査区の石垣遺構のあった付近に、明治以降のガラス破片や陶磁器の破片とともに棧瓦の破片が多数捨てられていた。この瓦は出土状況からは西館跡の遺構に伴うとは思われないが、雰囲気として利府町大沢遺跡で発掘された瑞巖寺の本瓦葺きの瓦とよく似たものがあり、捨てられた時期は明治以降であっても製作されたのは江戸時代に入る可能性があると思われた。軒瓦や熨斗瓦・鬼瓦など文様をもつものもあったが、図は省略した。

### 参 考 文 献

1. 『下愛子村風土記御用書出』安永三年（館跡 - 御西館の条）「宮城町誌史料編」1972
2. 『上愛子村風土記御用書出』安永三年（神社 - 諏訪神社の条）「宮城町誌史料編」1972
3. 『天鹿隣院夫人の屋敷の所在について』鈴木節夫「仙台郷土研究」6 - (13) 1935
4. 『貞山公治家記録三十九上』（寛永十三年三月十八日、四月十九日）「伊達治家記録四」1974

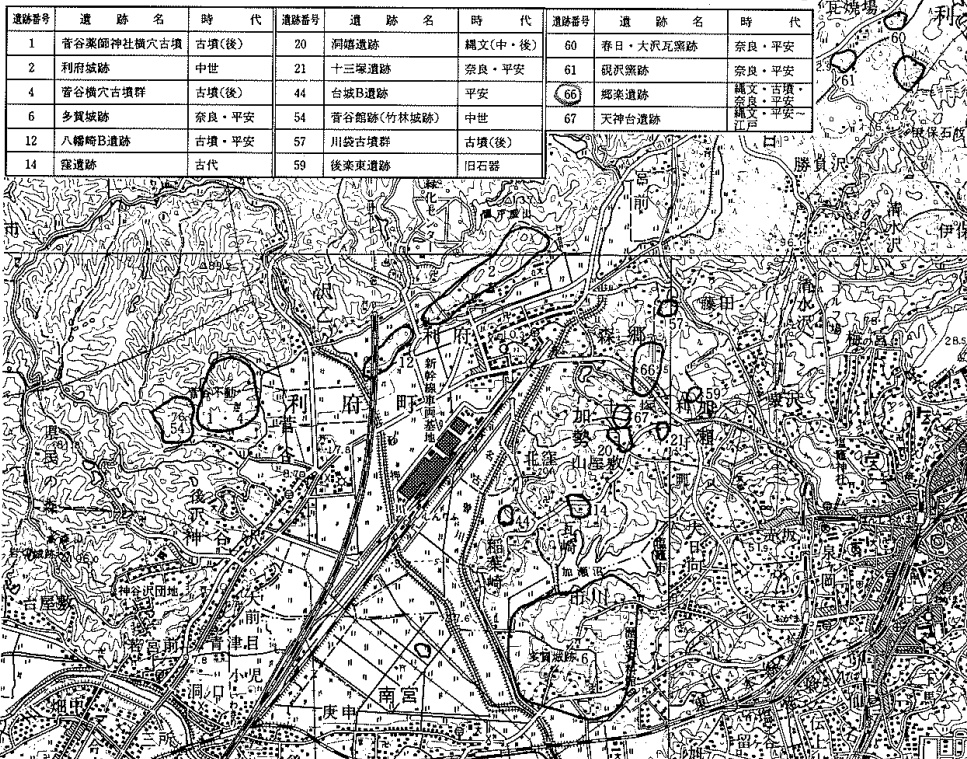
## B . 郷楽遺跡・天神台遺跡

### 遺跡の位置と歴史的環境

仙塩バイパスは利府町東部から多賀城市の中央部を経て仙台中野に至る計画路線で、仙台・松島道路と東バイパスを結ぶものである。この道路計画と関わる遺跡は郷楽遺跡・天神台遺跡・台城B遺跡（以上、利府町分）・市川遺跡・山王遺跡・八幡遺跡（以上、多賀城市分）などがあり、特別史跡多賀城跡に近接する遺跡として注目されている。

今年度の調査は利府町内にある郷楽遺跡と天神台遺跡である。

利府町の中心部周辺の地形をみると松島丘陵が分岐して西・北・東の三方にのびており、町の中心部とその前面に沖積地が発達している。沖積地には東の丘陵沿いに南流する名古曾川と沖積地中央を南流する砂押川があり、多賀城市の五万崎付近で合流している。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院発行 1/50000 「仙台」「吉岡」「松島」「塩釜」を複製

郷楽遺跡・天神台遺跡は東の丘陵のうち樹枝状に分岐した加瀬字十三塚付近から森郷字川袋付近に向って北にのびる標高60～70mの起伏のある小丘陵の西部に立地する。

微地形をみると、遺跡は丘陵の尾根から西斜面にかけてあるが、西から入り込む沢（県道吉岡塩釜線が通じている部分）によって北の郷楽遺跡と南の天神台遺跡に分けることができる。

なお、利府町内には旧石器時代～中世までの遺跡が70ヶ所知られている。これらの遺跡は西側丘陵の南東斜面と東側丘陵の南側斜面に多く見られる。この中で調査された遺跡としては後楽東遺跡（旧石器）、六田遺跡（縄文前期の集落跡）、川袋古墳（横穴式石室のある古墳）、硯沢・大沢窯跡（奈良時代の須恵器窯跡、平安時代の瓦窯跡）、八幡崎B遺跡（奈良・平安時代の集落跡）などがある。また、南約2kmに多賀城跡があり、郷楽遺跡・天神台遺跡は年代的にみて多賀城をめぐる周辺の遺跡群の中に位置づけられるものであろう。

## 郷楽遺跡の調査

### （1）調査の経過

調査は用地の関係から用地買収済みの地点を選び、6月～8月の1次調査で、中央北区・中央南区・北区の遺構確認および精査、南区の遺構確認を実施し、11月～12月の2次調査では主として南区の遺構の精査を行った。しかし、用地の問題の解決していない土地やその間に挟まれた土地については調査を実施することが出来なかったため、調査は用地問題の解決後に再調査が必要である。なお、この未調査地区にはトレンチの一部に古墳の周溝がかかり、埴輪の破片が出土していることから古墳が埋没していることが明らかになっている。

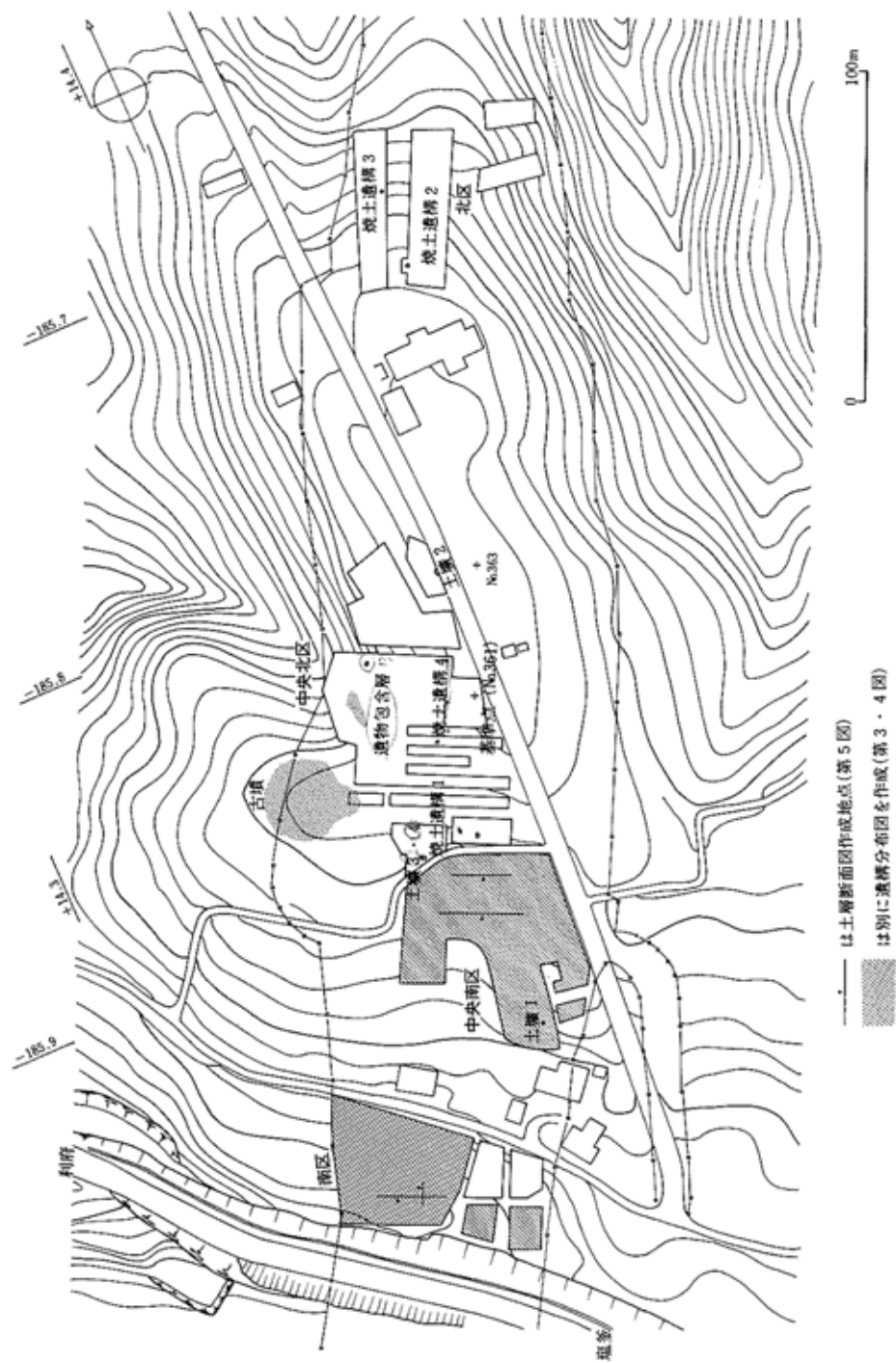
### （2）調査の方法

地区設定は、道路敷の中心杭No.361とNo.363を結ぶ線をX軸、No.361に直交する線をY軸とし、さらにX・Y軸を3m単位に区分し、遺跡に3m単位のグリッドを設定した。Y軸は60mを単位としてA・Bに大区分し、その中を3m単位にアルファベット(AA～AT・BA～BT)で、X軸は算用数字で示した。No.361の南側は70ライン、西側はATラインとなる。調査は前面の表土除去を基本としたが、遺物の少ない尾根付近は3mおきに幅3mのトレンチを設定し、必要に応じて拡張を行なった。遺構の実測図は地区設定に則って遣り方測量に拠ったが、遺構の少ない地区では平板測量を行ったところもある。遺構実測図（原図）の縮尺は1/20である。

### （3）調査の内容

#### 1. 調査区の大別

調査は用地の問題が片づいている土地に限定されたため、調査区は飛地状になった部分があるが、地形や出土遺構の性格などによって大きく4区に分けて説明することができる。



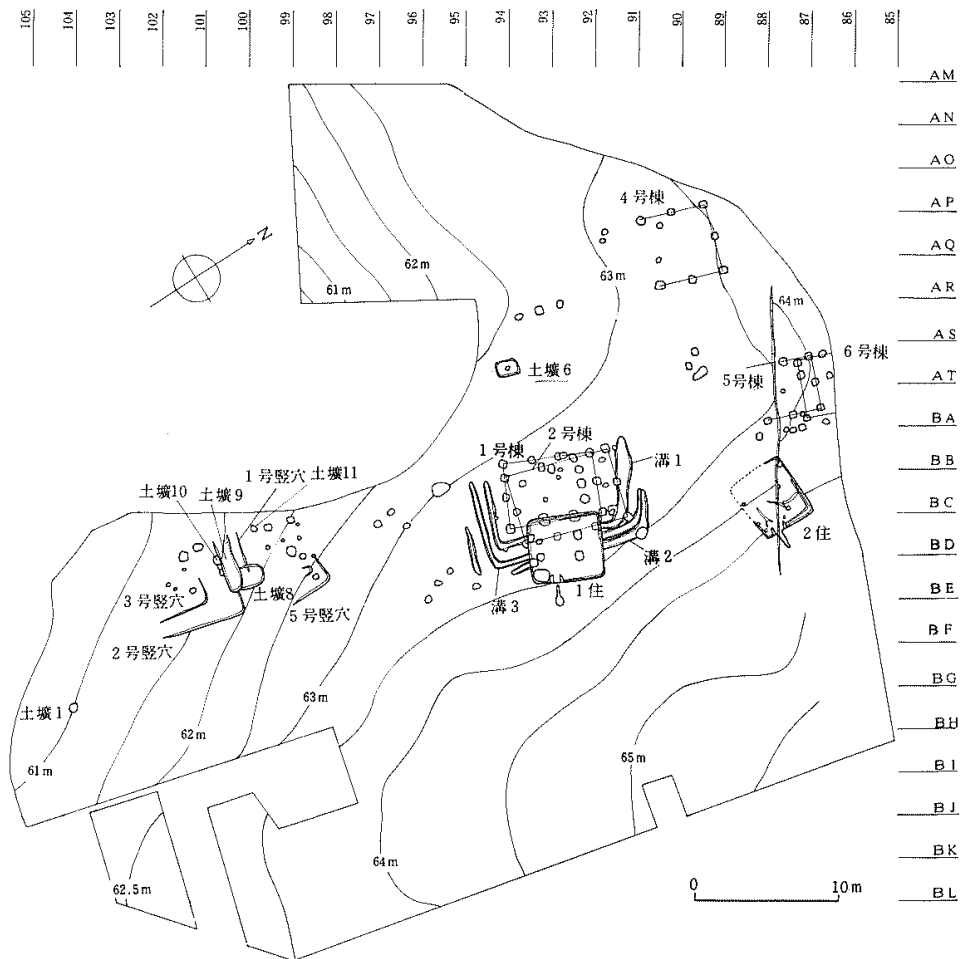
第2図 発掘区と遺構の分布

北区 31 ラインの北側で農免道路の東側の調査区である。焼土遺構 2 基が検出された。

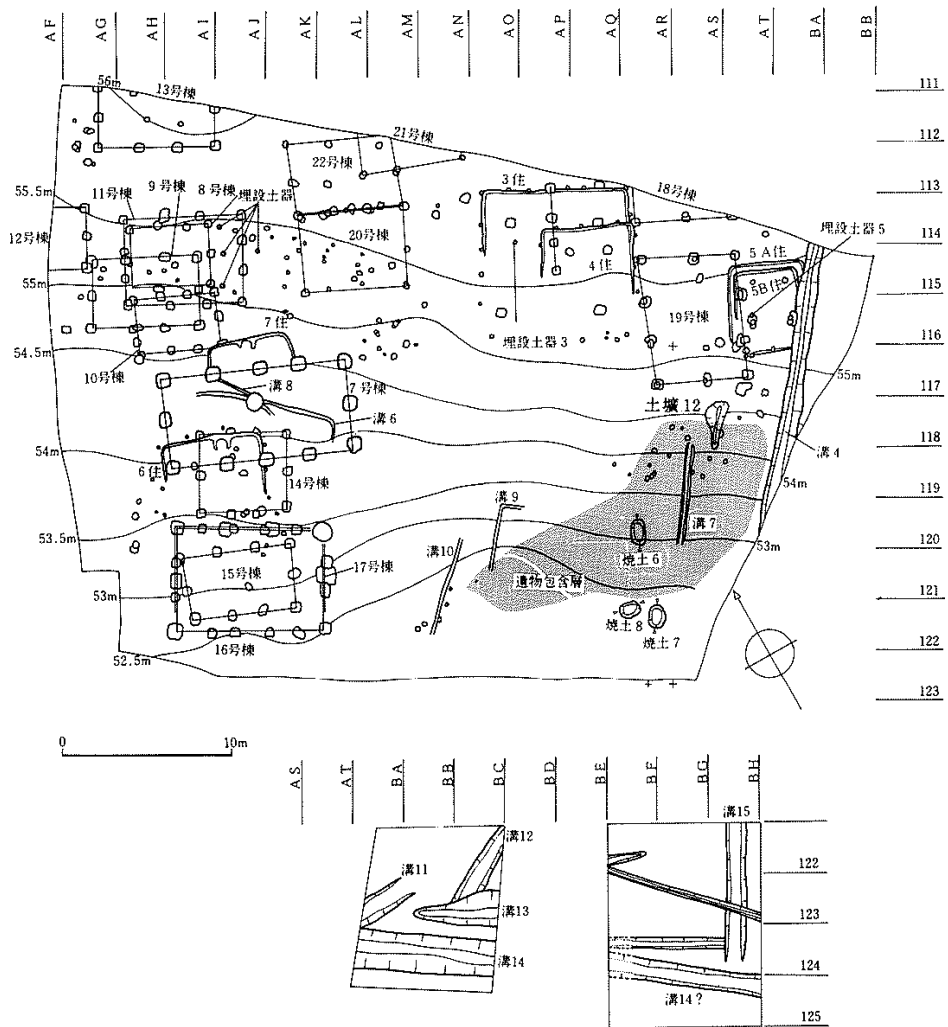
中央北区 80~53 ラインの調査区で、遺構は縄文時代早期末の遺物包含層、土壌 2 基、平安時代の焼土遺構 1 基等で、主として A T ラインの西側の緩斜面にある。

中央南区 104~81 ライン間に位置し、遺構は縄文時代早期末の土壌 3 基(1 基は落し穴)、遺物集中地点、奈良時代の土壌 1 基、平安時代の竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 5 棟、竪穴遺構 4 基、土壌 4 基、炭窯跡 1 基である。

南区は 123~113 ライン間の調査区で、遺構が最も集中して発見された。遺構は平安時代



第3図 発掘区(中央南区)の遺構

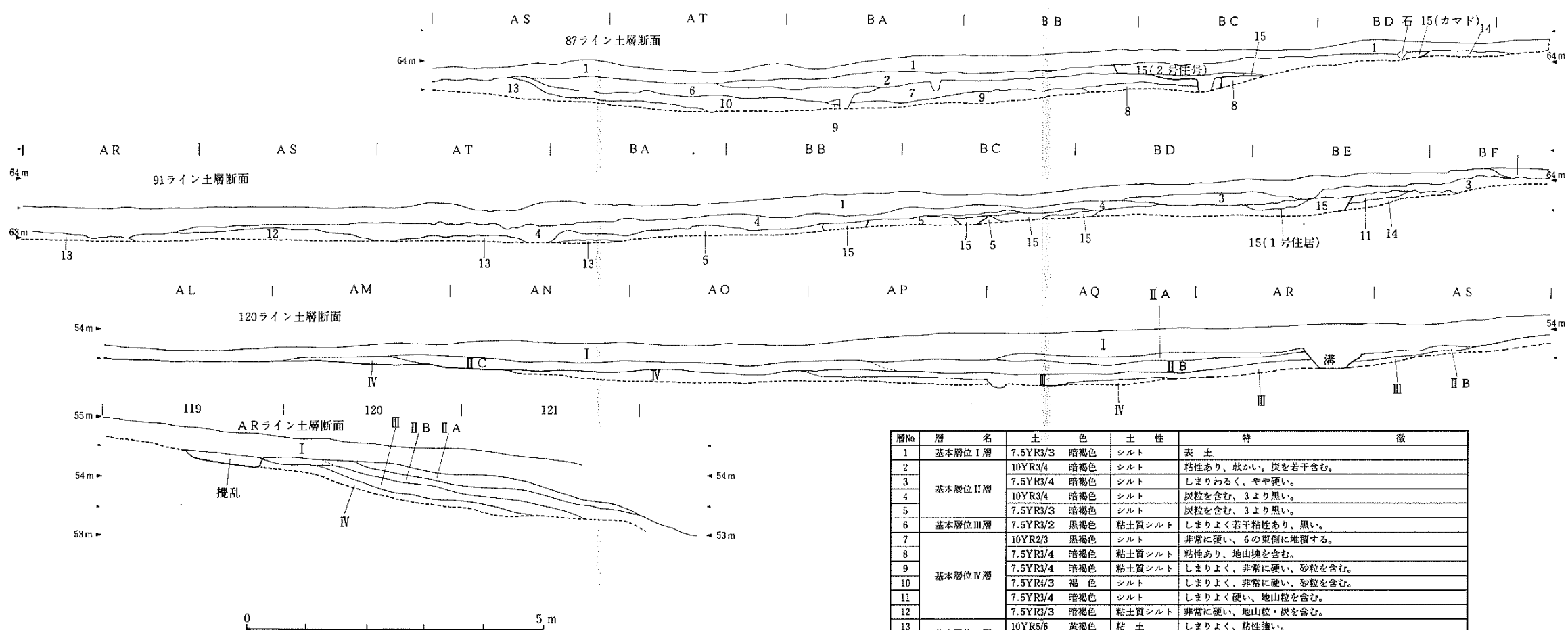


第4図 発掘区(南区)の遺構

の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡15棟、埋設土器遺構6基、焼土遺構3基、土壌2基、遺物包含層などがある。また、時代不明の溝跡もあった。

## 2. 基本層位

郷楽遺跡の地形は第2図でみるように起伏に富んでおり、土層の堆積状況は尾根部と沢側では全く異なる。すなわち、調査区の大部分(北区、中央北区、中央南区の南半分、南区の北半分)は尾根部とそれに続く斜面にあたり、浸食あるいは人為的な削平が著しく進んでいて、表土下がすぐに火山灰起源の粘土あるいは岩盤となっている。一方、地山上に堆積層がみられる



層No	層名	土色	土性	特徴
1	基本層位 I 層	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	表土
2	基本層位 II 層	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性あり、軟かい。炭を若干含む。
3		7.5YR3/4 暗褐色	シルト	しまりわるく、やや硬い。
4		10YR3/4 暗褐色	シルト	炭粒を含む、3より黒い。
5		7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭粒を含む、3より黒い。
6	基本層位 III 層	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	しまりよく若干粘性あり、黒い。
7	基本層位 IV 層	10YR2/3 黒褐色	シルト	非常に硬い、6の裏側に堆積する。
8		7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性あり、地山塊を含む。
9		7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	しまりよく、非常に硬い、砂粒を含む。
10		7.5YR4/3 褐色	シルト	しまりよく、非常に硬い、砂粒を含む。
11		7.5YR3/4 暗褐色	シルト	しまりよく硬い、地山粒を含む。
12	基本層位 V 層	7.5YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	非常に硬い、地山粒・炭を含む。
13		10YR5/6 黄褐色	粘土	しまりよく、粘性強い。
14		7.5YR4/4 褐色	粘土	径2、3cmの礫を多く含む。
15	遺構埋土	記述省略		

層名	土色	土性	特徴
基本層位 I 層	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	
基本層位 II A 層	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	土器片(大)・木炭粒を多く含む。AQ-AR, 120-121区に分布。
基本層位 II B 層	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	土器片・木炭粒・褐色粒を含む。AP-AS, 119-121区に分布。
基本層位 II C 層	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	斜面南側にあり土器片を含む。
基本層位 III 層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	土器片(?)木炭粒・褐色粒を含む。AQ-AP, 120-121区の沢部に堆積。
基本層位 IV 層	7.5YR4/4 褐色	シルト	遺構確認

第5図 基本層位



のは2ヶ所（中央南区の北半分と南区の南半分）のみで、ここには南西側に下る浅い沢状の谷地形が発達していて、自然流入土のやや厚い堆積が認められる。しかし、2地点間に共通する層はないので基本層位も分けて説明する必要がある。

中央南区の北半分の基本層位（以下、北基本層位とする）は5層からなる。第層は表土である。第層は地点によって若干土色、土性が異なるが、おおむね柔らかい暗褐色土である。第層は谷地形の深い部分に分布する、固くしまりのよい黒褐色土であり、断面では最も黒くみえる。第層は層起原の黄褐色粘土を含む暗褐色砂質土であり、第層は火山灰起原の黄褐色粘土あるいは岩盤である。～層は自然堆積層で各層から遺物が出土するが、遺物そのものは二次的な堆積物である。遺構は第層あるいは第層上面から掘り込まれているようだが、各層の分布域が限られていることから、遺構の新旧をとらえることは難しい。

南区の南半分の基本層位（以下、南基本層位とする）は4層からなる。層は表土である。層は極暗褐色土の遺物包含層である。この層は沢の落ち際に土器と木炭粒を多く含む部分がありA、B層に細分される。層は暗褐色土、南側の沢に堆積する層で上面に遺物を含む。層は褐色土であり上面で遺構が確認されている。

### 3. 遺構と遺物

調査区にはすでに述べたように、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・竪穴遺構・埋設土器遺構・焼土遺構・土壌・遺物包含層があり、各種の遺物が出土している。以下に説明する。

#### a 竪穴住居跡

竪穴住居跡は中央南区で2軒、南区で5軒、計7軒検出された。以下、番号をつけたものは第号住居跡とよぶ。また出土遺物の図示可能なもののみ実測図として示した。

##### 第1号住居跡（第6図）

【遺構の確認】 中央南区のBD・BEの91～93区に位置する。確認面は基本層位層上面だが、掘り込み面は層より上になるものと思われる。

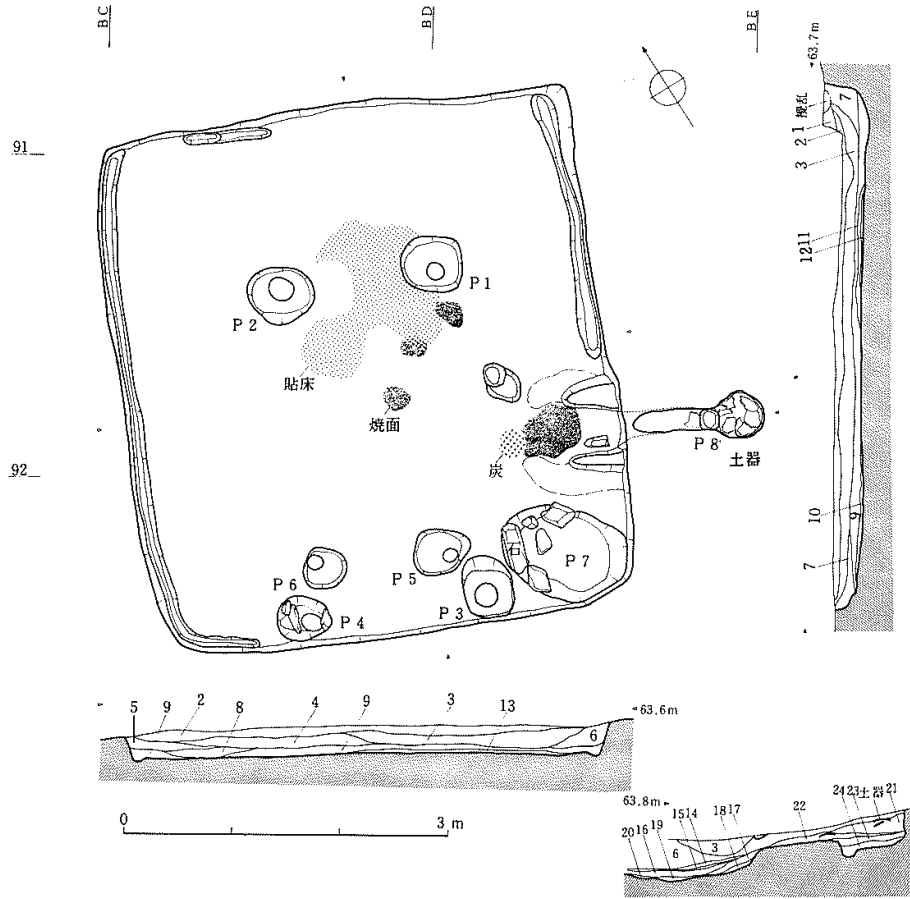
【重複】 第1、2掘立柱建物跡と重複し、これを切っている（第6図では煩雑になるため、掘立柱建物の柱穴を省略）。

【平面形・規模】 東西軸4.6m、南北軸5mのほぼ正方形である。

【堆積土】 12枚（1～12層）からなる。1～9層は自然流入土で、1層は灰白火山灰を含む。10層は生活時の堆積層、11層は貼床である。12層は炭化物混じりの粘性のある褐色土層である。

【壁】 壁の検出は容易で、立ち上がりは急である。壁は地山中にまで掘り込まれている。壁高は遺存状態のよい北壁で見ると、その東端で52cm、西端で20cmである。

【床】 大部分は地出をもって床面としている。住居中央やや北には地山土（黄褐色粘土）を

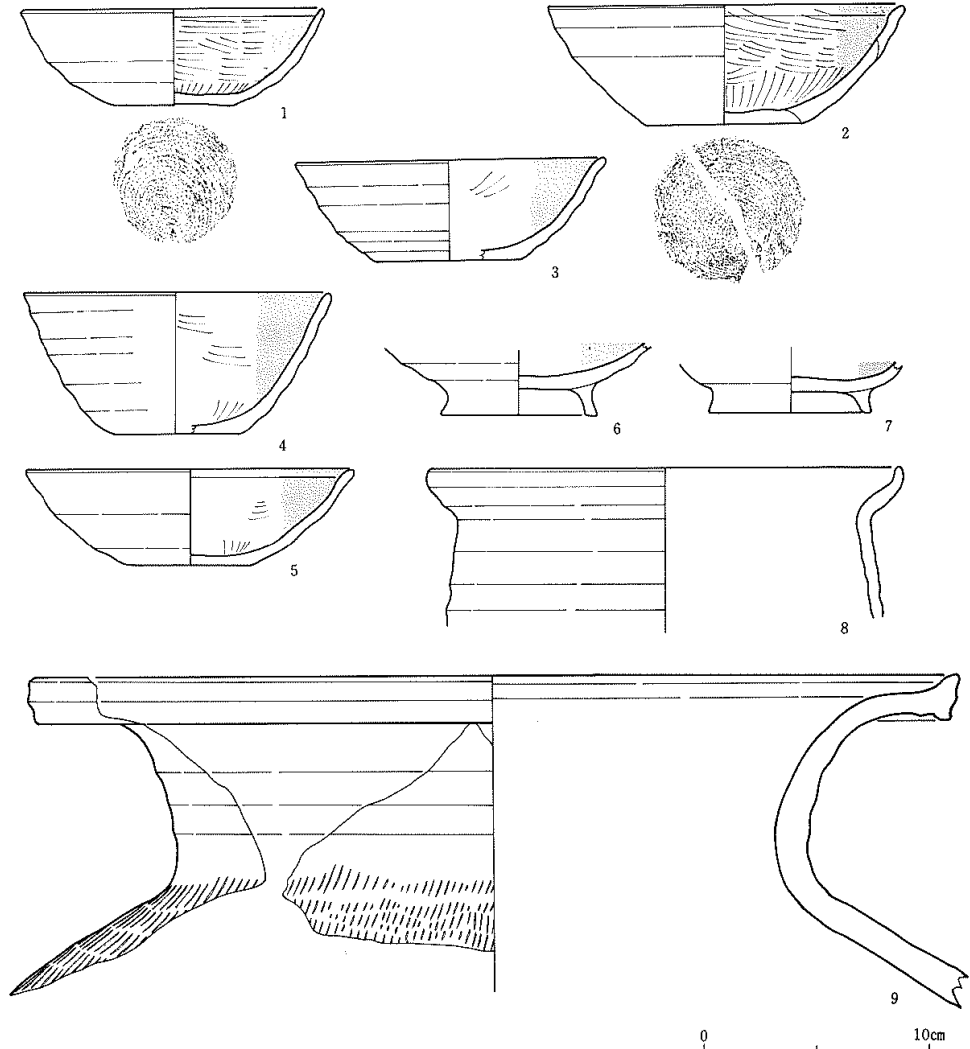


層No.	層名	土色	土性	特徴	層No.	層名	土色	土性	特徴
1	住居跡内堆積土	7.5YR4/4 褐色	シルト	非常に硬い、灰白火山灰?を含む。	13	住居跡内堆積土	7.5YR5/6 明褐色	粘土	9に類似、しまりよし。
2	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	非常に硬い。	14	カマド崩落土	2.5YR5/6 明赤褐色	粘土(礫土)	軟かく粘性あり。
3	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	地山塊が多い、灰を含む。	15	カマド内堆積土	10YR1.7/1 赤黒色	炭	炭が砂層を保って平面的に分布。
4	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	風っぽい。地山塊・炭を含む。	16	カマド内堆積土	5YR3/3 暗赤褐色	粘土質シルト	しまり悪く軟かい、炭を含む。
5	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	しまり悪く軟かい、地山塊・炭を含む。	17	カマド内堆積土	5YR4/3 にぶい赤褐色		しまり悪く軟かい、礫土ブロックを含む。
6	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	層間の混入土、地山塊・炭を含む。	18	カマド内堆積土	5YR3/3 暗赤褐色	粘土	軟かい、炭を含む。
7	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	しまり悪く軟かい、地山塊を含む。	19	カマド内堆積土	2.5YR5/8 明赤褐色	粘土	カマド最下部の焼け面
8	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	シルト	礫・黄褐色粘土ブロックを含む。	20	カマド内堆積土			炭層
9	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	粘土質シルト	炭・黄褐色粘土ブロックを含む。	21	煙道内堆積土	10YR3/4 暗褐色	シルト	礫・地山塊を含む。
10	住居跡内堆積土	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭が集中して面的に分布。	22	煙道内堆積土	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山塊・炭土塊・炭を含む。
11	住居跡内堆積土	10YR5/6 黄褐色	粘土	地山土による粘層	23	煙道内堆積土	10YR4/4 褐色	シルト	しまり悪し、地山塊・炭を含む。
12	住居跡内堆積土	7.5YR4/3 褐色	粘土質シルト	粘性あり、軟かい。炭を多く含む。	24	煙道内堆積土	7.5YR4/3 褐色	粘土	上部に炭・礫土を多く含む。

第6図 第1号住居跡 堆積土

用いた貼床があり、貼床部とその周辺は壁際よりも若干高くつくられている。また、床面中央に微弱な焼面が3ヶ所ある。

【周溝】 北側の一部、東側のカマドより地の部分、西側から南側にかけての部分に周溝が  
つられている。規模は幅10~20cmで、深さ3~5cmである。



No	出土層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外面・内面・底部)
1	煙道堆積土中	土師器・杯	BIIa	13.8	5.4	4.3	39	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
2	堆積土中	土師器・杯	BIIIa	15.8	6.8	5.4	43	外面：ロクロズリ+ナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
3	床 面	土師器・杯	(BIIIa)	14.0	6.4	4.5	46	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 胎土に石英数多
4	堆積土中	土師器・杯	BIIa	13.8	5.4	6.4	39	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
5	床面直上	土師器・杯	BIIIa	14.8	5.4	4.4	36	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
6	堆積土中	土師器・高台付杯			7.0			外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 付け高台
7	床 面	土師器・高台付杯			7.3			外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ+黒色処理 付け高台 摩滅著しい
8	1号住居堆積土	土師器・甕	BI	21.6				内外面：ロクロナデ
9	煙道堆積土中	須恵器・甕	A	41.5				外面：ロクロナデ・平行叩き目

※遺物の法量を示す数値の単位はcmである。これは以下の各表においても同じである。

第7図 第1号住居跡出土遺物

【カマド】 カマドは東辺南寄りにある。カマドはあらかじめ想定したプラン上に地山土を掘り残し、その上に暗褐色土を積み上げて構築している。煙道は地下式のトンネルで、煙出しは円筒状に上から掘り下げている。また、煙道途中に深さ約 12cm のピット 8 がある。カマドの燃焼部には 7 枚の堆積土 (14~20 層) があり、14 層は最終使用時の堆積層であるが、その下に焼土塊を含む崩落土の堆積が認められる (16~18 層)。さらにカマド内最下部には明瞭な焼面と炭層 (19・20 層) があり、燃焼部底面に作り替えがあったことがわかる。

【柱穴など】 床面で検出された 6 個のピット (P1~5) は円形で径約 16cm あり、全て柱痕跡が確認されている。このうちピット 1~4 は線で結ぶと長方形になり、住居内の南側に偏在するが支柱穴と考えられる。また、ピット 5・6 の間隔はピット 1・2 の間隔より狭いが、ある時期にこの 4 個 (1・2・5・6) のピットが支柱穴であった可能性もある。

【貯蔵穴】 カマドの南脇に楕円形の浅い皿状のピット 7 があり、貯蔵穴と推定された。規模は径 1.2×0.8m で、深さは 20cm ある。壁は緩やかに傾斜する。なお、堆積土上部に焼けた石などが入っていた。

【出土遺物】 床・カマドから土師器 (坏・高台付坏・甕)、須恵器 (甕) が出土した。また、煙道中から須恵器大甕などの一括出土があったが、これは堆積土で住居に直接伴うものではない。

## 第 2 号住居跡 (第 8 図)

【遺構の確認】 中央南区の B C・B D - 87・88 区に位置し、地山と基本層位 層の上面で確認された。

【重複】 遺構の重複はない。

【平面形・規模】 住居跡の南西部が 1/4 ほど削平されているが、残存する壁などからほぼ正方形とみられ、規模は東西軸・南北軸とも約 3.8m である。

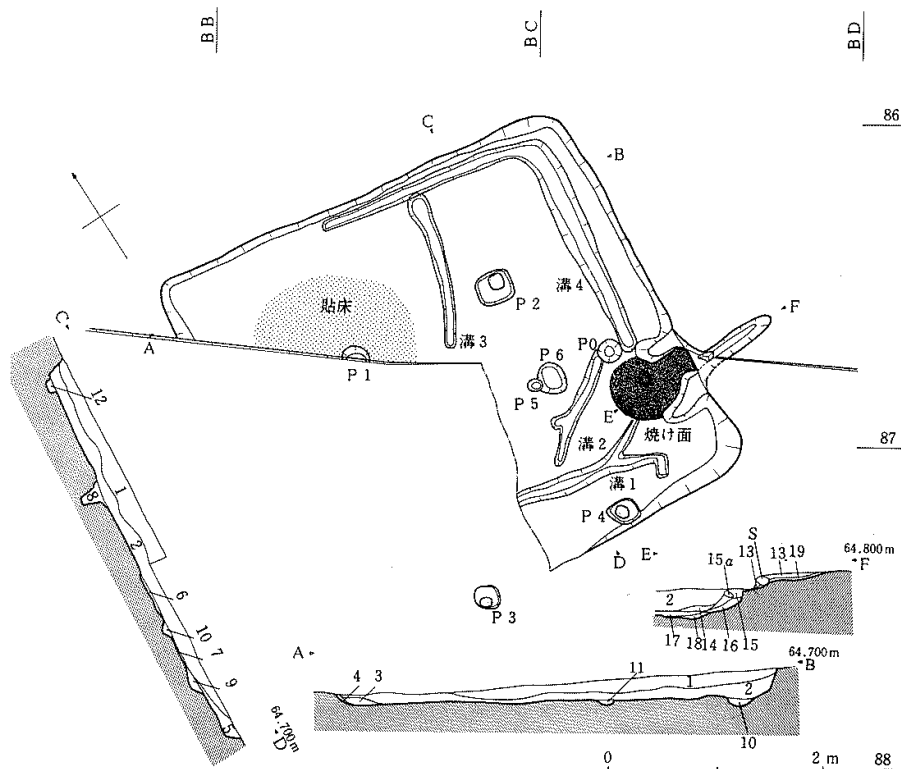
【堆積土】 堆積土は 5 枚あり、すべて自然堆積のものである。

【壁】 住居の西半は地山を、東半は基本層位 層を壁としている。壁高は保存のよい東壁で約 30cm である。壁の立ち上がりは東壁でほぼ垂直であるが、他の壁は比較的緩やかである。

【床】 床面は東から西に緩やかに傾斜している。東半は地山を床面としているが、西半は基本層位 層を床面としている。また、北西部を中心に一部に貼床がある。

【柱穴】 床面に 6 個のピット (P1~6) がある。ピット 1~4 は結ぶと長方形になる位置にあること、ピット 2~4 で柱痕跡が認められることなどから支柱穴と考えられる。ピット 5・6 には焼土・炭化物が堆積していた。

【溝】 溝は 4 条ある。溝 1・2 はカマドの西側に延びており、焼土・炭化物を含むことから

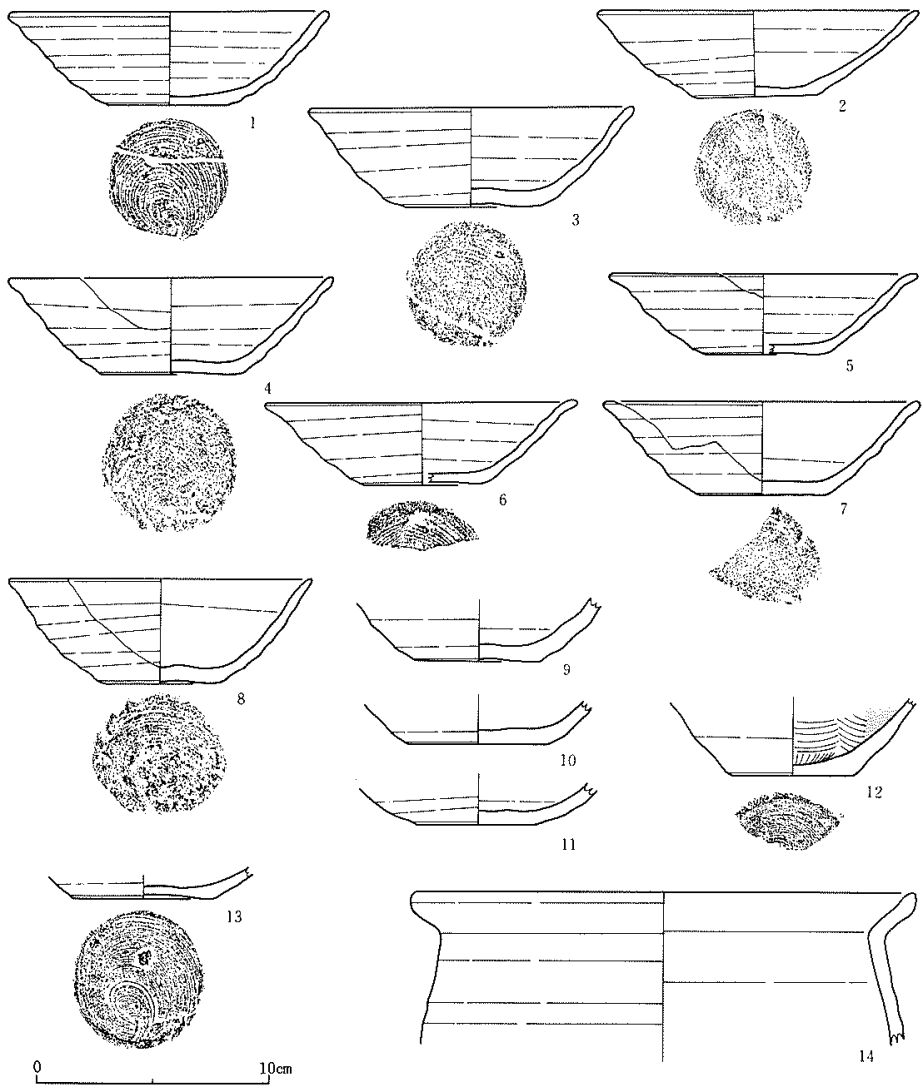


層No	層名	土色	土性	特 徴	層No	層名	土色	土性	特 徴
1	第1層	明褐色 7.5YR7/6	シルト	炭化物粒・地山粒を含む。しまりあり。	11	溝3埋土	褐色 10YR4/4	シルト	地山ブロックを含む。
2	第2層	褐色 7.5YR4/6	シルト	炭化物粒・地山粒を含む。しまりあり。	12	溝4埋土	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	炭化物粒を含む。
3	第3層	にぶい黄褐色 10YR6/4	シルト	炭化物粒・地山粒を少量含む。	13	カマド1層	褐色 7.5YR4/6	シルト	炭土粒・炭化物を含む。
4	第4層	暗褐色 10YR5/4	シルト		14	カマド2層	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭化物を含む。
5	第5層	褐色 7.5YR4/4	シルト	焼土ブロック・炭化物粒を含む。しまりなし。	15	カマド3層	暗赤褐色 5YR3/4	シルト	焼土・炭化物ブロックを含む。
6	第6層	赤褐色 5YR4/8	シルト	焼けている。	15a	カマド3a層	暗赤褐色 5YR3/6	シルト	焼けている。
7	第7層	褐色 7.5YR4/6	シルト	焼けている。	16	カマド4層	褐色 7.5YR4/4	シルト	焼土ブロックを含む。しまりなし。
8	ピット2	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭土粒・炭化物粒を含む。	17	カマド5層	褐色 7.5YR4/3	シルト	焼土粒・炭化物を含む。
9	溝1埋土	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭土粒・炭化物粒を含む。	18	カマド6層	暗赤褐色 5YR5/8	シルト	焼けている。
10	溝2埋土	褐色 7.5YR4/4	シルト	炭土粒・炭化物粒を含む。	19	カマド7層	暗赤褐色 5YR3/3	シルト	焼けている。

第8図 第2号住居跡

カマドに付随した施設の可能性がある。溝3は北側の周溝の途中から南に延びており、間仕切の可能性はある。溝4は周溝で北側で2.2m、東側で2.1m認められ、その幅は北側が14cm、東側が20cmで、断面はU字状である。

【カマド】 東壁の中央南寄りに設置されている。燃烧部側壁は褐色や橙色のやや粘性のある土を積んで構築している。なお、北側の壁は床面を溝状に掘り込んでその上に構築されていた。燃烧底面は皿状に窪み固く締まっていた。また、燃烧部内部は壁面・底面とも火熱のため赤変

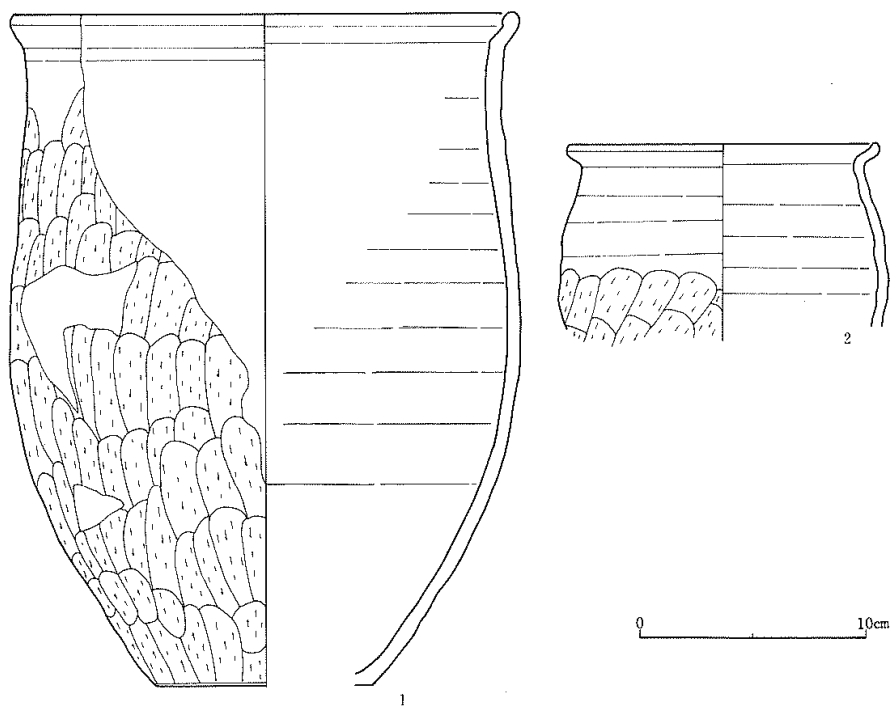


No	出土層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外面・内面・底部)
1	床 面	赤焼土器・坏	A	14.0	5.2	4.1	37	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
2	床 面	赤焼土器・坏	A	13.9	5.0	3.9	36	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
3	床 面	赤焼土器・坏	A	14.0	5.7	4.3	41	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
4	床 面	赤焼土器・坏	A	14.0	6.0	4.1	43	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
5	床 面	赤焼土器・坏	A	14.0	5.0	3.8	36	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
6	床 面	赤焼土器・坏	A	13.5	4.6	3.6	34	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
7	床 面	赤焼土器・坏	A	13.8	5.4	4.1	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
8	床 面	赤焼土器・坏	A	13.0	4.6	4.5	35	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
9	床 面	赤焼土器・坏			5.2			内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
10	床 面	赤焼土器・坏			6.0			内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
11	床 面	赤焼土器・坏			5.2			内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
12	カマド	土師器・坏			5.2			外 面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
13	床 面	須恵器・坏			5.4			内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
14	カマド	土師器・甕	B1	21.8				外 面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ

第9図 第2号住居跡出土遺物 (1)

していた。奥壁は垂直に近い角度で立ち上がり煙道につらなる。煙道底面は東側に向かってやや上がっており、煙道部は約0.7mが残存している。

【出土遺物】 カマドや床面から土師器（坏・甕）、赤焼土器（坏）・須恵器（坏）が出土している。



No	出土層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外面・内面)
1	床 面	土師器・甕	B I	22.6	9.5	30.1		外面：ロクロナガ・ヘラケズリ 内面：ロクロナガ
2	床 面	土師器・甕	B II	13.8				外面：ロクロナガ・ヘラケズリ 内面：ロクロナガ

第10図 第2号住居跡出土遺物 (2)

### 第3号住居跡 (第11図)

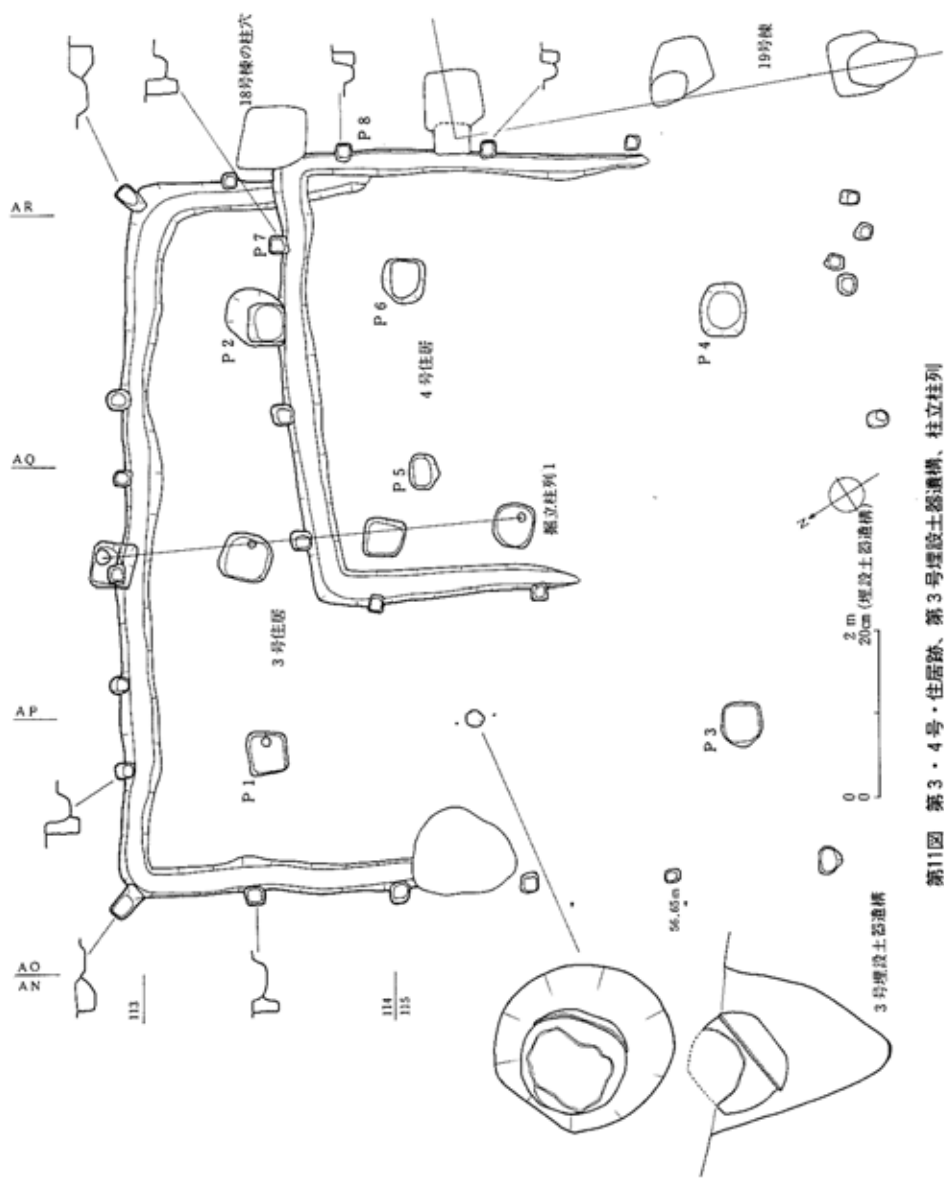
【遺構の確認】 南区のAO～AR - 113～117 区に位置する。削平が著しく、地山の岩盤上で残存する周溝によって確認された。

【重 複】 第4号住居跡に切られている。

【平面形・規模】 東西軸が8.5mある。南北軸も同程度で、平面形は方形であろう。

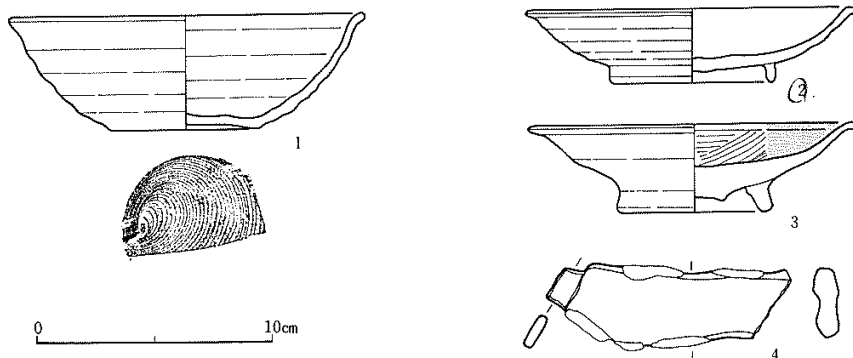
【床面・壁・カマド】 床面・壁は残存せず、カマドの有無は不明である。

【周 溝】 住居の北東側でのみ確認されており、幅60～80cm、深さ約15cmである。



第11図 第3・4号・住居跡、第3号埋設土器遺構、孤立柱列





No.	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	3号住居柱穴中	須恵器・杯	Vb④	15.0	6.2	4.8	41	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
2	4号住居壁柱2	灰釉陶器・高台付皿		14.0	6.8	3.2		内外面：ロクロナデ 底軸心ハケ塗り
3	4号住居壁柱1	土師器・高台付皿		14.0	6.6	3.7		外面：ロクロナデ 内面：ガキ黒色処理 底部：回転糸切り+ナデ
4	4号住居東側周溝	鉄製品・刀子						(18.8)×30×10

第12図 第3・4号住居跡出土遺物

【柱 穴】 住居に伴うピットは、住居内のピット1~4と壁に外接するピット群がある。住居内のピットは隅丸方形で、深さ35~60cmあり、その配置から主柱穴と考えられる。壁際のピット群は深さ18~38cmあり、0.9~1.8m間隔で連続する配置から壁柱穴と考えられる。またピット2には柱の抜き取り痕らしいものが認められた。また住居南隅のピット群のなかにも第3号住居跡の壁柱穴が含まれているようである。

【出土遺物】 主柱穴から須恵器や土師器の坏が出土している。また、他のピット・床面からも土師器や須恵器の甕の小破片が出土している。

#### 第4号住居跡 (第11図)

【遺構の確認】 南区AO~AP-114~116区に位置する。削平が著しく、地山の岩盤上で残存する周溝によって確認された。

【重 複】 第3号住居跡を切っている。

【平面形・規模】 東南側が削平されていて全体形は不明であるが、方形であろう。東西軸が5.4mある。

【床面・壁・カマド】 床面・壁は残存せず、カマドの有無も不明であるが、住居の構成は第3号住居跡とよく似ている。

【周 溝】 北東側でのみ確認されており、保存の良い部分で幅約30cm、深さ約20cmある。断面は形で、特に外側の壁は殆ど垂直である。

【柱 穴】 住居に伴うピットは、住居内のピット5・6と周溝に外接するピット群がある。

ピット5・6はそれぞれ深さ35cm、25cmあり、その配置から主柱穴と考えられる。ただし、住居の南側では残りの主柱穴が確認されていない。周溝に伴うピット群は方形で、深さ19~37cmあり、壁は殆ど垂直である。このピット群は1.5~2.0m間隔で配置されることから壁柱穴と考えられる。またピット7・8の埋土から土師器・灰釉陶器が出土した。

【**出土遺物**】 壁柱穴や周溝から灰釉陶器(高台付皿)、土師器(高台付皿・甕)・須恵器(坏)が出土した。

#### 第5A号住居跡(第13図)

【**遺構の確認**】 南区のAT・BA-115・116区の地山面で確認された。

【**重複**】 第19号掘立柱建物跡と第4号溝に切られている。また床面下から第5B号住居跡が検出されている。なお、本住居は第5B号住居跡を拡張したものである(第5B号住居跡の項を参照)。

【**平面形・規模**】 東南部が第4号溝で破壊されているが、残存する周溝からほぼ正方形と考えられる。規模は東西軸約4.6m、南北軸約4.4mである。

【**堆積土**】 北側部分に褐色土が一枚ある。

【**壁**】 東壁の南半分は第4号溝に破壊されている。地山の岩盤を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は保存のよい北壁で周溝底面から約23cmである。

【**床**】 北側は地山の岩盤を床面とし、南側は住居の掘り方埋土の上面を床面としている。ほぼ平坦で、中央部に30×20cmの焼面がある。

【**周溝**】 第4号溝で破壊された東南部分と第19号掘立柱建物跡の柱穴で切られた西南を除き確認できる(周溝1)。北西側の周溝は住居の壁に食い込んでいるため、断面の底部が外側に鋭角に突き出る。他の部分は一部平坦で壁は斜めである。幅は約20cm、深さ約11cmである。

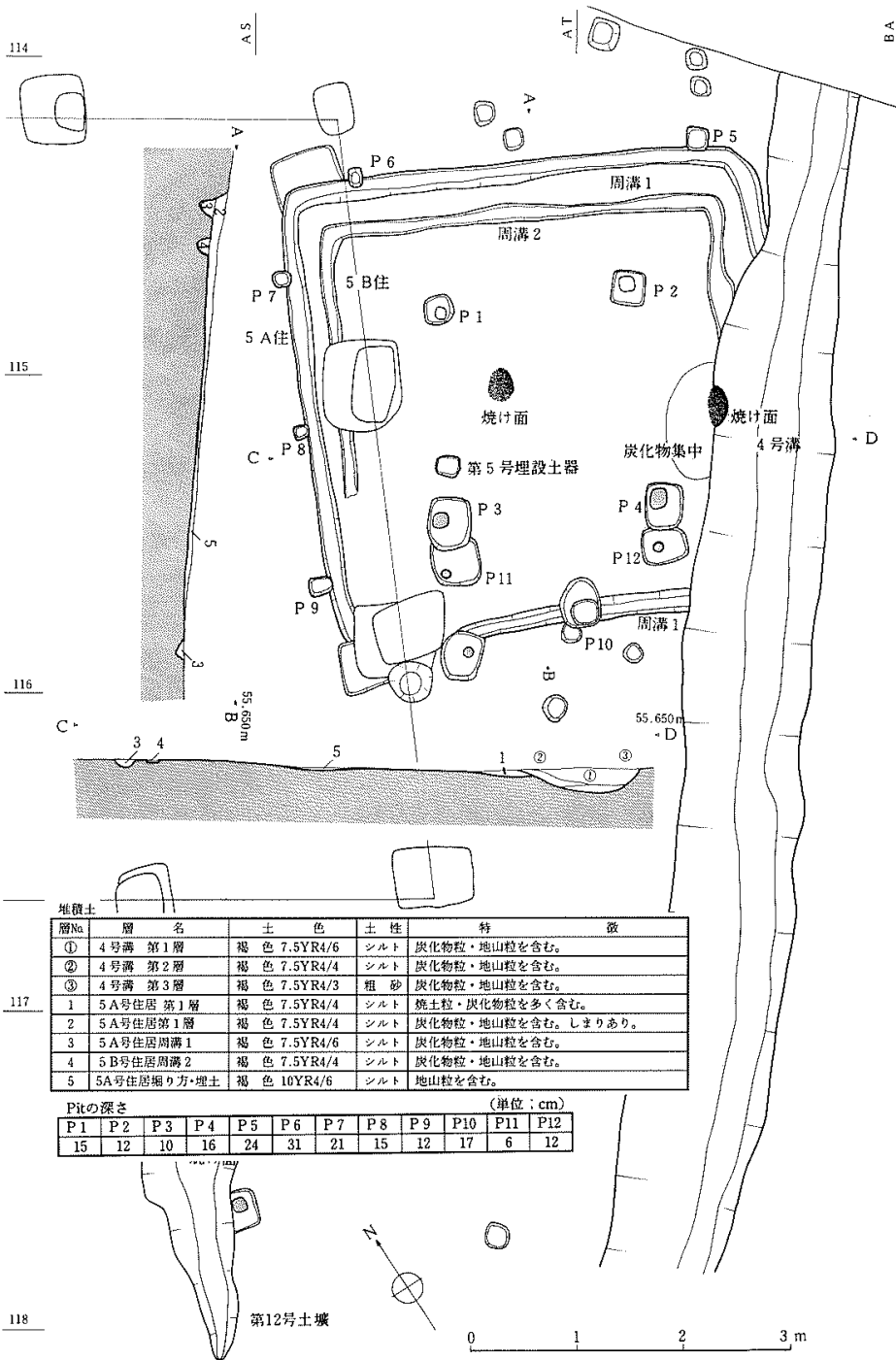
【**柱穴**】 床面にある4個のピット(P1~4)は、住居の対角線上にあり、柱痕跡を持つことから主柱穴と推定される。また東壁を除く各壁に約1.4m間隔で方形の小ピット(P5~10)が確認されており、壁柱穴と考えられる。

【**カマド**】 東辺の中央付近に火熱を受けた石と焼面があり、それを囲むように炭化物を含む層が1.0×0.4mの範囲に分布するので、この位置にカマドがあった可能性がある。

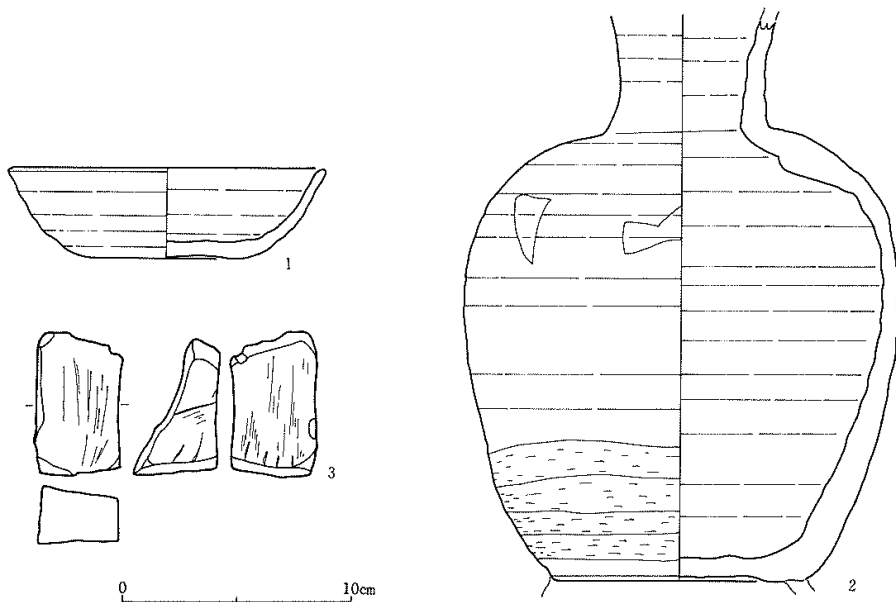
【**出土遺物**】 床面から須恵器(坏・長頸壺)、土師器(甕)、柱穴や周溝から土師器(甕)、須恵器(坏)が出土している。

【**埋設土器遺構**】 床面の下で第5埋設土器遺構が発見された。出土土器は赤焼土器の坏と甕である。第5A号住居跡に伴うか第5B号住居跡に伴うかは不明である(埋設土器遺構の項を参照)。

#### 第5B号住居跡



第13図 第5A・5B号住居跡



No.	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	5 B号住居周溝 2	須恵器・杯	▽bD	13.8	6.0	3.9	43	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
2	5 B号住居床面	須恵器・高台付壺						内外面：ロクロナデ 外面：体部下端：回転ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ
3	5 B号住居周溝 2	砥石						5.8×3.3×2.5 cm

第14図 第5A・5B号住居跡出土遺物

【遺構の確認・重複】 第5A号住居跡の床面下で検出されたもので、第5A号住居をつくる際に浅く削平しているため、周溝と柱穴によって確認された。なお、以下で述べるように南側周溝とピット1・2は第5A号住居跡と共通して使用されていると考えられるので、第5A号住居跡は本住居跡を拡張したものとみられる。

【平面形・規模】 残存する周溝からみて、平面形は方形である。規模は東西軸約3.9m、南北軸3.9mである。

【床・壁】 拡張して第5A号住居をつくる際に削平され、床・壁は確認できなかった。

【柱 穴】 第5A号住居跡のピット3・4は柱痕跡があり、位置からみて主柱穴と考えられる。しかし、北側には柱穴と推定されるものはないので、第5A号住居跡のピット1・2が第5B号住居跡の柱穴であったものを利用したのではないかと考えられる。そうするとピット1・2・11・12は住居のほぼ対角線上に位置し、これらは主柱穴と考えられる。

【周 溝】 北西側の半分が確認されている（周溝2）。南側の周溝は2本発見されなかったため、第5A号住居跡の南側周溝は第5B号住居跡の周溝をその位置で再び利用したのであろう。

なお、北側の周溝でみると、幅は約 15cm、深さ約 10cm である。

【出土遺物】 周溝 2 から須恵器（坏）、土師器（坏・甕）が出土した。

#### 第 6 号住居跡（第 15 図）

【遺構の確認】 南区の A H ~ A J - 118 ~ 119 区にあり、地山面で確認された。住居の南側は削平されている。北東斜面の溝（溝 6）は第 6 号住居跡に伴う住居外周溝の可能性はある。

【重複】 A I ~ A K - 116 ~ 119 区には第 6 号住居跡のほか第 7 号住居跡・第 7 号掘立柱建物跡・第 14 号掘立柱建物跡そして北側に第 10 号掘立柱建物跡がある。重複しているが、遺構相互の切り合いから、第 14 号掘立柱建物跡 第 6 号住居跡 第 7 号掘立柱建物跡、第 10 号掘立柱建物跡 第 7 号住居跡 第 7 号掘立柱建物跡という新旧関係が明らかである。

【平面形・規模】 南側半分以上が削平されているが、平面形は方形と推定される。大きさも不明であるが、北辺は 5.9m ある。

【堆積土】 3 枚ある。

【壁】 壁は地山で、高さは北側で約 20cm ある。

【周溝】 壁の残存する部分に限り、カマド部を除いて周溝があるが、全体は不明である。規模は幅 20 ~ 40cm、床面からの深さ 10cm 前後ある。

【床面】 住居の掘り方底面は、西側が岩盤で高くなっているのに対し、住居中央はやや掘り窪められ、そこに炭・焼土混じりの暗褐色土が埋められて床面が形成されている。床面上において柱穴、貯蔵穴等は検出されていない。

【柱穴】 住居内にあるピット 1、2 は柱痕跡が確認されているが、床面下の住居の掘り方底面での検出であり住居には関係しないものと考えている。壁に近接して住居を取り巻くように、方形の小ピット（P3~9）が 1.4~2.3m 間隔で並び、深さは 16~40cm あり、壁柱穴と考えられる。

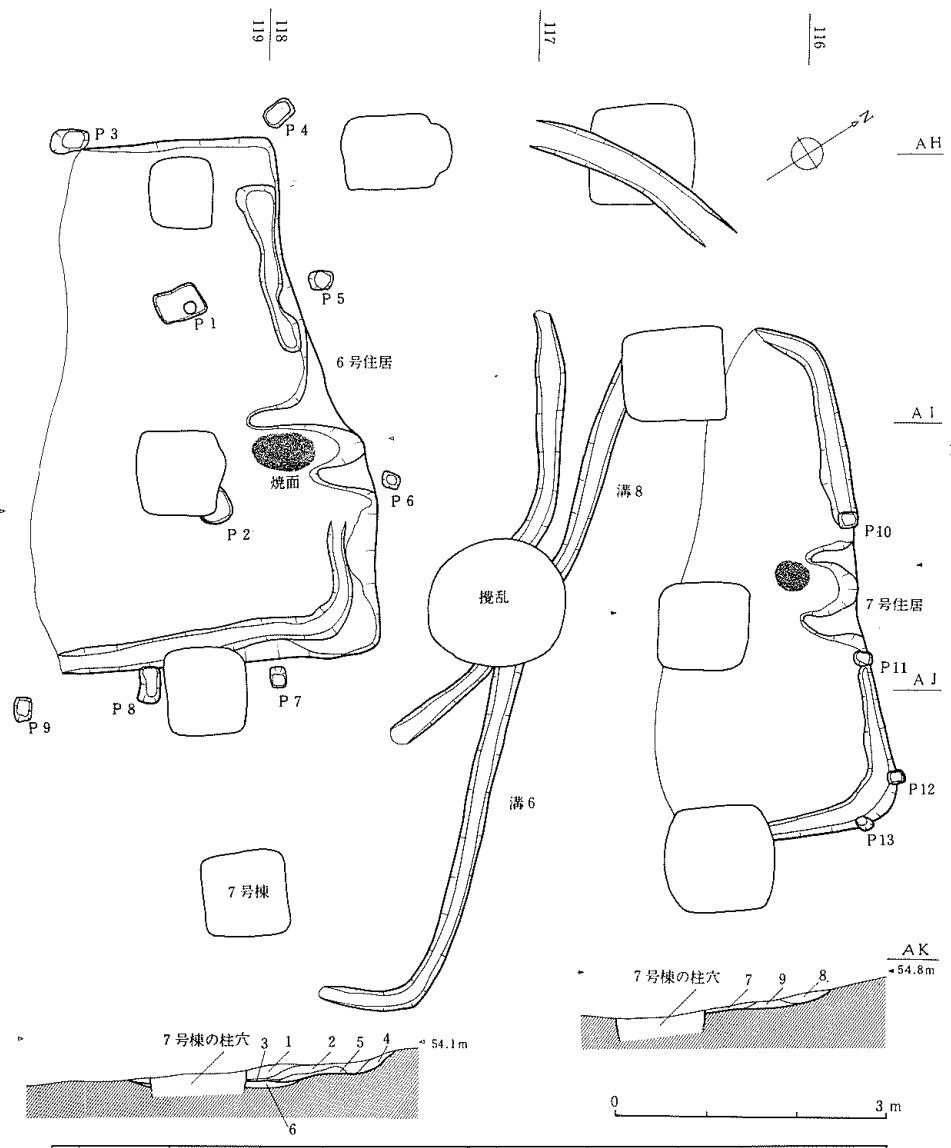
【カマド】 北壁の中央東寄りにあり、暗褐色土を積み上げて構築している。燃烧部の底面に焼面があるが側壁や奥壁は焼けていない。削平によるのか煙道は検出されていない。

【住居外周溝】 住居外東側に溝 6 がある。削平されているが本来はさらに西側に延びていたようであり、北側斜面上をめぐる住居跡外周溝であった可能性がある。幅 20~30cm で、残存部の深さ 10 数 cm である。

【出土遺物】 堆積土から土師器や須恵器の坏、壁柱穴や周溝から土師器（甕）が出土した。

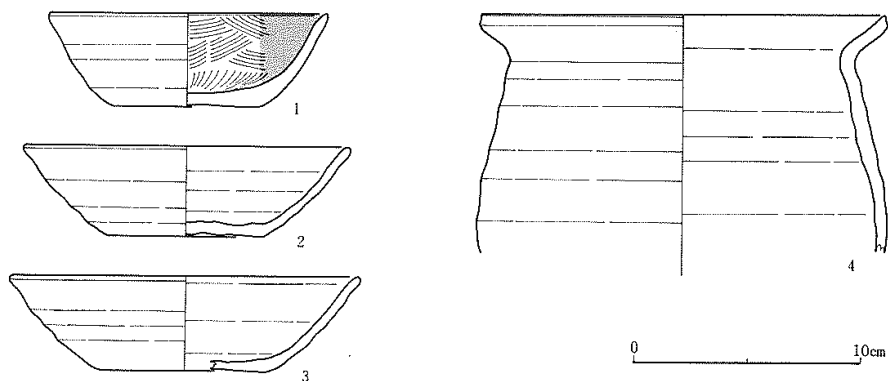
#### 第 7 号住居跡（第 15 図）

【遺構の確認】 南西側に下る緩斜面上にあり、地山面で確認された。住居の南側半分以上が削平されている。



層No	層名	土色	土性	特徴	層No	層名	土色	土性	特徴
1	6号住居跡堆積土	7.5YR4/4	褐色シルト	炭を若干含む。	6	6号住居跡掘り方	5YR6/8	赤褐色粘土質シルト	軟かい、多量の炭土・炭を含む。
2	6号住居跡堆積土	10YR3/4	暗褐色シルト	炭・地山粒を含む。	7	7号住居跡堆積土	7.5YR4/6	褐色砂質シルト	硬い、地山粒を含む。
3	6号住居跡堆積土	7.5YR2/3	暗褐色シルト	軟かい、炭・地山粒を含む。	8	7号住居n+1内埋藏土	7.5YR4/3	暗褐色シルト	炭土を若干と炭を含む。
4	6号住居n+1内埋藏土	7.5YR3/4	暗褐色シルト	炭・炭土粒を含む。	9	7号住居n+1内埋藏土	7.5YR3/4	暗褐色シルト	炭土を多く含む。
5	6号住居n+1内埋藏土	7.5YR4/4	褐色粘土質シルト	軟かい、多量の炭土・炭を含む。					

第15図 第6・7号住居跡 堆積土



No	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外面・内面・底部)
1	6号住居堆積土	土師器・坏	BII C	12.2	6.2	4.1	51	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処埋 底部：摩滅して不明
2	6号住居堆積土	須恵器・坏	VIa④	14.4	6.8	3.9	47	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り
3	6号住居堆積土	須恵器・坏	VIa④	15.4	7.2	4.1	47	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り
4	7号住居周溝	土師器・甕	BI	18.0				内外面：ロクロナデ

第16図 第6・7号住居跡 出土遺物

【重複】 第10号掘立柱建物跡を切り、第7号掘立柱建物跡に切られている。

【平面形・規模】 南側半分以上が削平されているが、平面形は方形と推定される。規模も不明であるが北辺は5.5mある。

【堆積土】 2枚ある。

【壁】 壁は地山で、高さは北側で約20cmある。

【周溝・柱穴】 周溝は南側では不明である。北側ではカマドの両側に深さ約30cmの方形のピット10、11があり、これを起点として周溝がめぐる。周溝は幅20~40cm、深さ10cmある。住居東隅には深さ約30cmの方形のピット12、13があり、壁柱穴の可能性はあるが西側では検出されない。また床面では支柱穴などは検出されなかった。

【床面】 床面を示すような生活層はなく、堆積層下は地山（岩盤）となる。

【カマド】 北壁中央にあり、礫混じりの暗褐色土を積み上げて構築している。燃烧部の側壁や奥壁には明瞭な焼面はなく、焚き口部に相当する床面の一部に焼面があるのみである。煙道は検出されていない。

【出土遺物】 堆積土から土師器（坏）、須恵器（坏・蓋・甕）が、周溝から土師器（甕）が出土している。

## b 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は尾根に近い中央南区で5棟（第1・2・4~6号棟）、南区で16棟（第7~22号棟）、計21棟検出された。とくに南区では掘立柱建物跡が重複しており、他の竪穴住居跡など

の遺構との切り合いも著しい。なお、建物跡の柱間を示す時、柱痕跡の発見されない柱穴の柱位置はその中央または他の方法で推定される地点を利用した。また、番号を付けたものは第1号棟とよぶことにする。建物の規模・方向などについては一覧表(表1)にまとめた。

**第1号棟(桁行3間×梁間2間の南北棟・第17図)**

【位置・確認面】 中央南区のBB～BE-91～94区で検出された。確認面は第1層上面である。

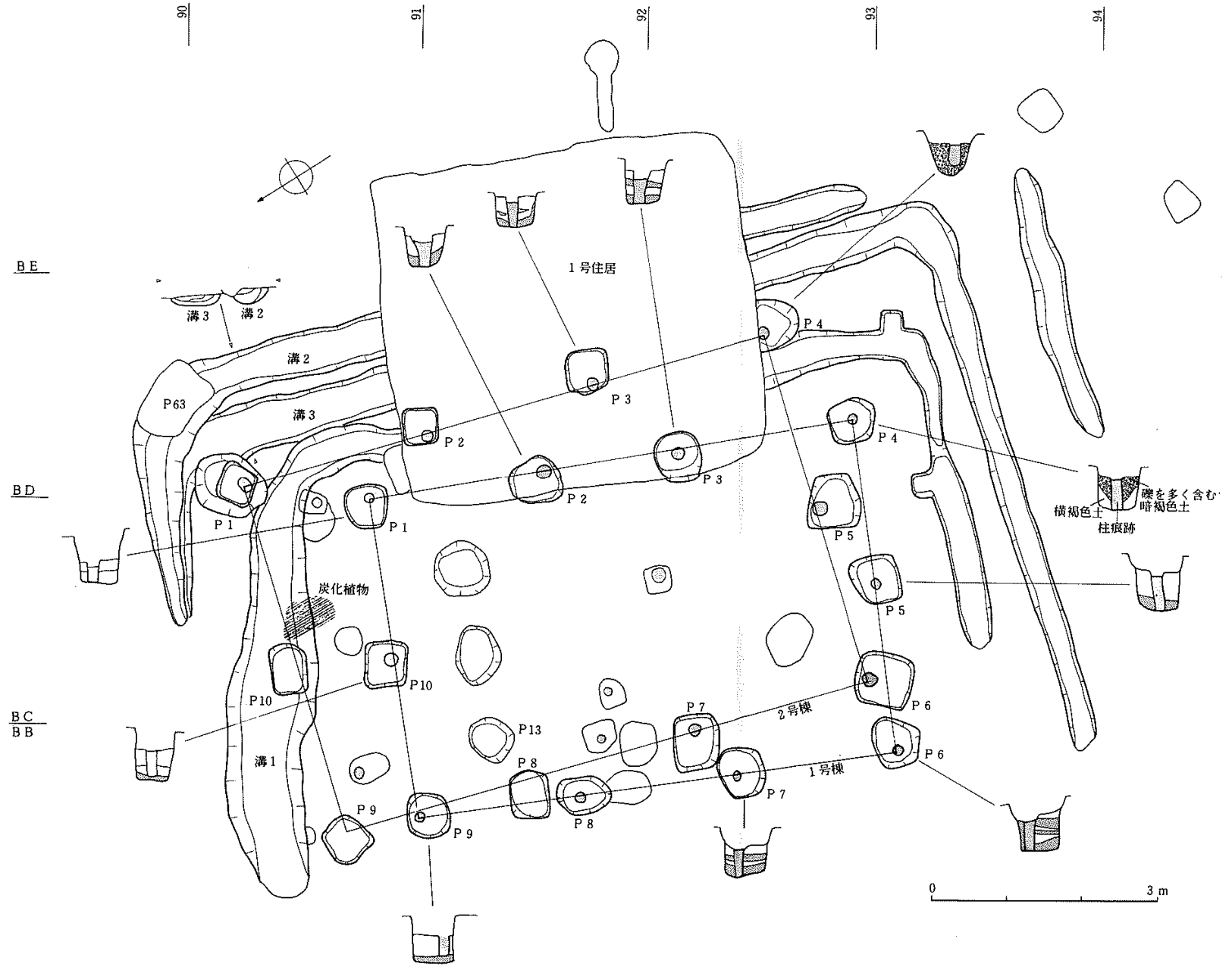
【重複】 BB～BE-90～94区には第1号住居(竪穴住居跡)・土壇・第1号棟・第2号棟・溝1、2、3がある。溝1は第1号棟に、溝2は第2号棟に伴うと考えられる。溝3も掘立柱建物跡に伴うと考えられるが不明である。これらの遺構群は切り合い関係から、溝3第1号棟・溝1第2号棟・溝2第1号住居(竪穴住居跡)の順に変遷していることが明らかである。

【柱穴】 柱穴は一边が50cmほどの方形ないし、50×70cmほどの楕円形である。柱痕跡は全てにあり、円形で、径14～16cmである。確認面からの深さは北列で51～76cmである。

表1 掘立柱建物跡の規模・方向

番号	桁行×梁間	桁 行 (m)				梁 間 (m)				棟 方 向
		柱 列	総 長	柱 間		柱 列	総 長	柱 間		
1号	3間×2間 (南北棟)	西側	6.4	2.2・2.1・2.1		北側	4.3	2.2・2.1		N-24°E
		東側	6.5	2.3・1.8・2.4		南側	4.4	2.2・2.2		
2号	3間×2間 (南北棟)	西側	7.2	2.4・2.4		北側	4.8	2.4・2.4		N-17°E
		東側	7.2	2.5・2.3・2.4		南側	4.8	2.4・2.4		
4号	2間以上×2間 (南北棟)	西側	4.6<	2.3・2.3・<		北側	4.7	2.3・2.4		N-28°E
		東側	4.6<	2.3・2.3・<		南側	不明			
5号	2間以上×2間 (南北棟)	西側	1.9<	1.9・<		北側	3.8	1.8・2.0		N-23°E
		東側	3.7<	1.9・1.8・<		南側	不明			
6号	2間以上×2間 (?)	西側	1.9<	1.9・<		北側				N-25°E
		東側	不明	<		南側	4.0	(2.0)・(2.0)		
7号	4間×2間 (東西棟)	北側	11.1	2.8・2.8・2.8・2.7		西側	5.4	2.7・2.7		N-68°W
		南側	10.9	3.0・2.6・2.6・2.7		東側	5.9	2.9・3.0		
8号	3間×2間 (東西棟)	北側	4.7	1.6・1.6・1.5		西側	不明			N-58°W
		南側	3.1<	(3.1)		東側	3.5	1.7・1.8		
9号	3間×2間 (東西棟)	北側	6.1	2.0・2.1・2.0		西側	3.9	2.0・1.9		N-58°W
		南側	6.0	2.1・1.9・2.0		東側	3.8	1.9・1.9		
10号	3間×2間 (東西棟)	北側	4.6	1.5・1.6・1.5		西側	3.1	1.4・1.7		N-59°W
		南側	4.6	1.8・1.4・1.4		東側	3.0	1.5・1.5		
11号	3間×2間 (東西棟)	北側	6.8	2.3・2.2・2.3		西側	5.0	1.7・1.5・1.8		N-57°W
		南側	6.8	2.3・2.2・2.3		東側	4.9	1.5・1.7・1.7		
12号	不明×3間 (東西棟)	北側	不明			西側	不明			N-57°W
		南側	不明			東側	3.7	1.7・2.0		
13号	3間×2間以上 (東西棟)	北側				西側	3.4	1.7・1.7		N-57°W
		南側	6.7	2.2・2.5・2.0		東側	1.7<	1.7・		
14号	3間×2間 (東西棟)	北側	5.2	1.8・1.5・1.9		西側	4.7	2.3・2.4		N-56°W
		南側	5.3	2.1・1.6・1.6		東側	4.7	2.3・2.4		
15号	3間×2間 (東西棟)	北側	6.4	2.0・2.1・2.3		西側	3.9	2.1・1.8		N-63°W
		南側	6.2	1.9・1.9・2.4		東側	3.8	1.9・1.9		
16号	5間×2間 (東西棟)	北側	9.0	1.7・1.7・2.0・1.9・1.7		西側	6.1	2.1・2.0・2.0		N-57°W
		南側	8.9	1.8・1.8・1.8・1.8・1.7		東側	5.8	1.9・1.9・2.0		
17号	3間×2間以上 (東西棟)	北側	9.0	3.0・3.0・3.0		西側	2.9<	2.9・		N-59°W
		南側				東側	2.9<	2.9		
18号	不明×2間 (南北棟)	西側	不明			北側	不明			N-24°E
		東側	不明			南側	5.6	2.8・2.8		
19号	3間×2間 (南北棟)	西側	7.3	2.6・2.1・2.6		北側	5.7	3.2・2.5		N-27°E
		東側	7.5	2.6・2.3・2.6		南側	5.5	2.7・2.8		
20号	4間×2間 (東西棟)	北側	6.0	1.65・1.65・1.65		西側	4.5			N-63°W
		南側	5.9			東側	4.6	2.4・2.2		
21号	3間×不明 (東西棟)	北側	不明	2.2・		西側	不明			N-69°W
		南側	5.8	1.9・2.0・1.9		東側	不明			
22号	3間×2間 (東西棟)	北側	不明	2.2・		西側	3.9	2.2・1.7		N-63°W
		南側	6.0	2.0・2.0・2.0		東側	不明	1.8		





第17図 第1・2号棟と第3号溝

【**建物外周溝**】 建物に平行してコの字状に残る周溝（溝 1）が認められた。この周溝は東側で第 1 号住居跡によって切られているが、東側桁行から約 0.4～0.6m、梁間から南北ともそれぞれ約 0.8～1m の距離にある。幅は東側で約 0.5m、南側で約 0.4m、北側で約 1.0m、深さは約 12cm 前後であり、壁は比較的急に立ち上がる。この周溝は第 1 号棟に伴う可能性が高い。なお、溝 3 は南北方向の溝で両端で西に直角に曲がり、コの字形にめぐり、西側は削平のため不明である。溝 1・2 と構造が似ており、掘立柱建物の周囲をめぐる溝と推定されるが、相当する建物跡は不明である。

【**1 号溝検出の炭化植物**】 1 号溝の北側部分から炭化した藁あるいは萱のようにみえる植物遺体が出土した。40×70cm の範囲に限られるが、溝の底面に敷かれたように方向を揃えている。性格は不明であるが、昭和 61 年に宮城県多賀城跡研究所で調査した宮城県宮崎町東山遺跡に類似例があり、ここでは屋根材の萱と考えられている。

【**出土遺物**】 ピット 2、3、5、6、8 の柱痕跡から土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・甕・鉢）が出土した。ピット 2 と 3 の遺物は接合するものが多い。また、ピット 3・5 から小破片であるが丸底で体部に稜のある土師器（坏）が出土している。なお、第 1・2 号棟の周辺の基本層位第 1 層から土師器（坏・甕）、須恵器（甕）が出土した。

#### 第 2 号棟（桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟・第 17 図）

【**位置・確認面**】 中央南区の B B～B E - 91～94 区に位置し、第 1 層上面で確認された。

【**重複**】 第 1 号棟を切り、第 1 号住居跡（竪穴住居跡）に切られている（第 1 号棟参照）。

【**規模**】 桁行は西側柱列で総長 7.2m、柱間は北より 2.4・2.4・2.4m、また東側柱列で総長 7.2m で、柱間は北より 2.5・2.3・2.4m である。梁行は北側柱列、南側柱列ともに総長 4.8m、柱間は西より 2.4・2.4m である。以上から柱間はほぼ等間隔であることがわかる。

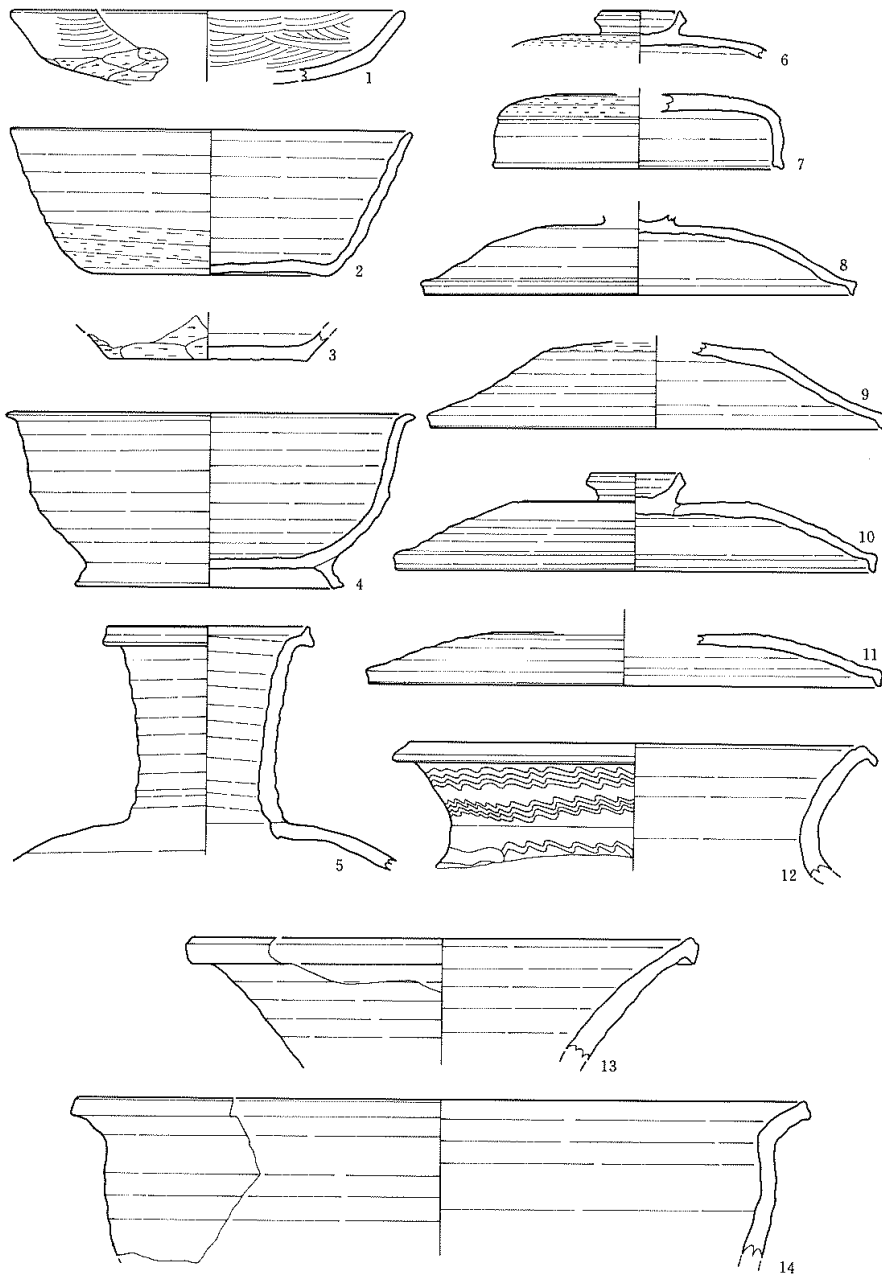
【**柱穴**】 柱穴は一辺 60～80cm の方形ないし長方形を呈する。ほぼすべての柱穴で柱痕跡が確認されており径 16cm 前後の円形のものが多い。確認面からの深さは北列で 36～68cm である。柱穴には最下部に黄褐色粘土あるいは混土礫層が敷かれ、その上に柱が据えられているものがある。

【**周溝**】 建物跡外の東側から北側にかけて柱列に平行するコの字状に残る周溝（溝 2）があり、建物に伴う可能性があるが、雨落ち溝になるかどうかは不明である。周溝の規模は幅 60～80cm、深さ 10～20cm である。

【**出土遺物**】 ピット 5・6 の柱痕跡からヘラ削りされた須恵器坏が出土した。また、ピット 8 の埋土から丸底の有段の土師器坏が出土している。

#### 第 4 号棟（桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟・第 20 図）

【**位置・確認面**】 中央南区の A P～A R - 89～90 区の地山面で確認した。重複はない。



第18図 第1号棟出土遺物

№	出土遺物	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴 (外面・内面・底部)
1	1号棟 P8	土師器・坏	AII	17.8				内外面：ミガキ+黒色烏理? 外面下部：ヘラケズリ
2	1号棟 P2、5	須恵器・甕?	III C②	18.2	10.5	6.6		外面：ロクロナデ+回転ヘラケズリ 内面：ナデ 底部：回転ヘラケズリ
3	1号棟 P3	須恵器・坏	IIa		9.0			外面：ヘラケズリ 内面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
4	1号棟 P3	須恵器・高台付甕		18.2	12.0	7.8		外面：ロクロナデ+回転ヘラケズリ 内面・底部：ロクロナデ
5	1号棟 P5	須恵器・長頸甕			9.0			外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
6	1号棟 P3	須恵器・蓋	B					外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
7	1号棟 P2、3	須恵器・蓋	A	12.8				外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
8	1号棟 P2、3	須恵器・蓋		19.0				外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
9	1号棟 P2、3	須恵器・蓋		20.0				外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
10	1号棟 P2、3	須恵器・蓋	B	21.4		4.4		外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
11	1号棟 P2、3	須恵器・蓋		22.6				外面：回転ヘラケズリ+ロクロナデ 内面：ロクロナデ
12	1号棟 P1	須恵器・甕	B	21.8				外面：ロクロナデ+縦推波状文 内面：ロクロナデ
13	1号棟 P1	須恵器・甕	B	23.2				外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ
14	1号棟 P2	須恵器・鉢?		33.5				外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ

第18図 第1号棟出土遺物

【柱穴】 柱穴はほぼ正方形で一辺約50cmで、深さは40~50cmである。柱痕跡はすべてにあり、円形で径18~20cmである。

【出土遺物】 ピット3の埋土から須恵器(甕)が出土している。

第5号棟(桁行2間以上×梁間2間の南北棟・第20図)

【位置・確認面】 中央南区AT~BB-87区の第層上面で確認した。6号棟と重複しているが、切り合いがないので、新旧は不明である。

【柱穴】 柱穴は方形ないし長方形で、一辺50~60cmである。1個を除き柱痕跡が認められた。柱痕跡は円形(径16cm)のものと同方形(一辺16~20cm)のものがある。確認面からの深さは北列で19~66cmである。

【出土遺物】 なし。

第6号棟(規模、棟方向不明・第20図)

【位置・確認面】 南区のAT~BB-86・87区の第層上面で確認した。第5号棟と重複しているが、切り合いがないので、新旧は不明である。遺構は北側の道路までのびおり調査できなかったため北側については不明である。

【柱穴】 柱穴は方形ないし長方形で、一辺が30~50cmである。確認面からの深さは5~20cmである。柱痕跡は二個に認められ、円形で、径16cmである。

【出土遺物】 なし。

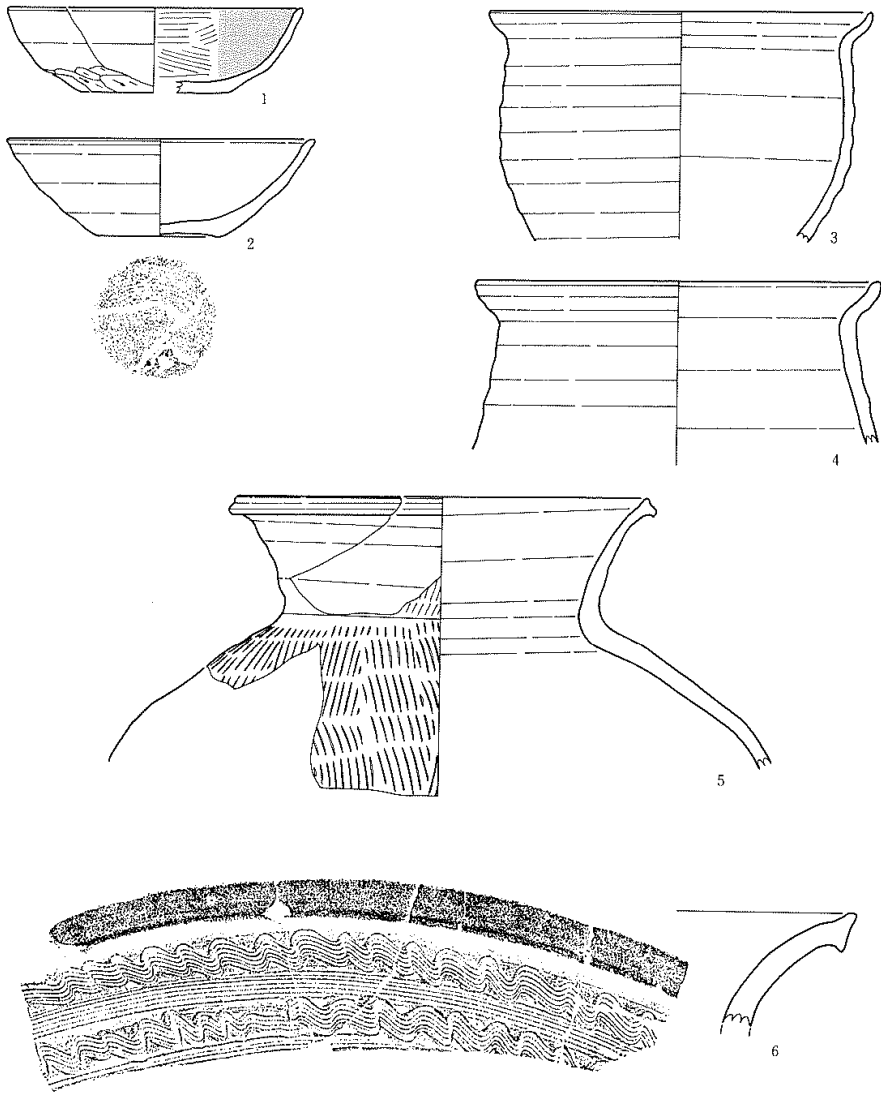
第7号棟(桁行4間×梁間2間の東西棟・第22図)

【位置・確認面】 南区のAI~AL117~119区にあり、第6・7号住居と第14号棟を切っている。

【柱穴】 柱穴は大きく一辺が65~120cmのほぼ正方形である。確認面からの深さは北列で50~80cmである。2個の柱穴を除き柱痕跡が確認されたが、円形で、径は20cm~30cmある。ピット1の柱痕跡に灰白色の火山灰らしきものが混じっていた。

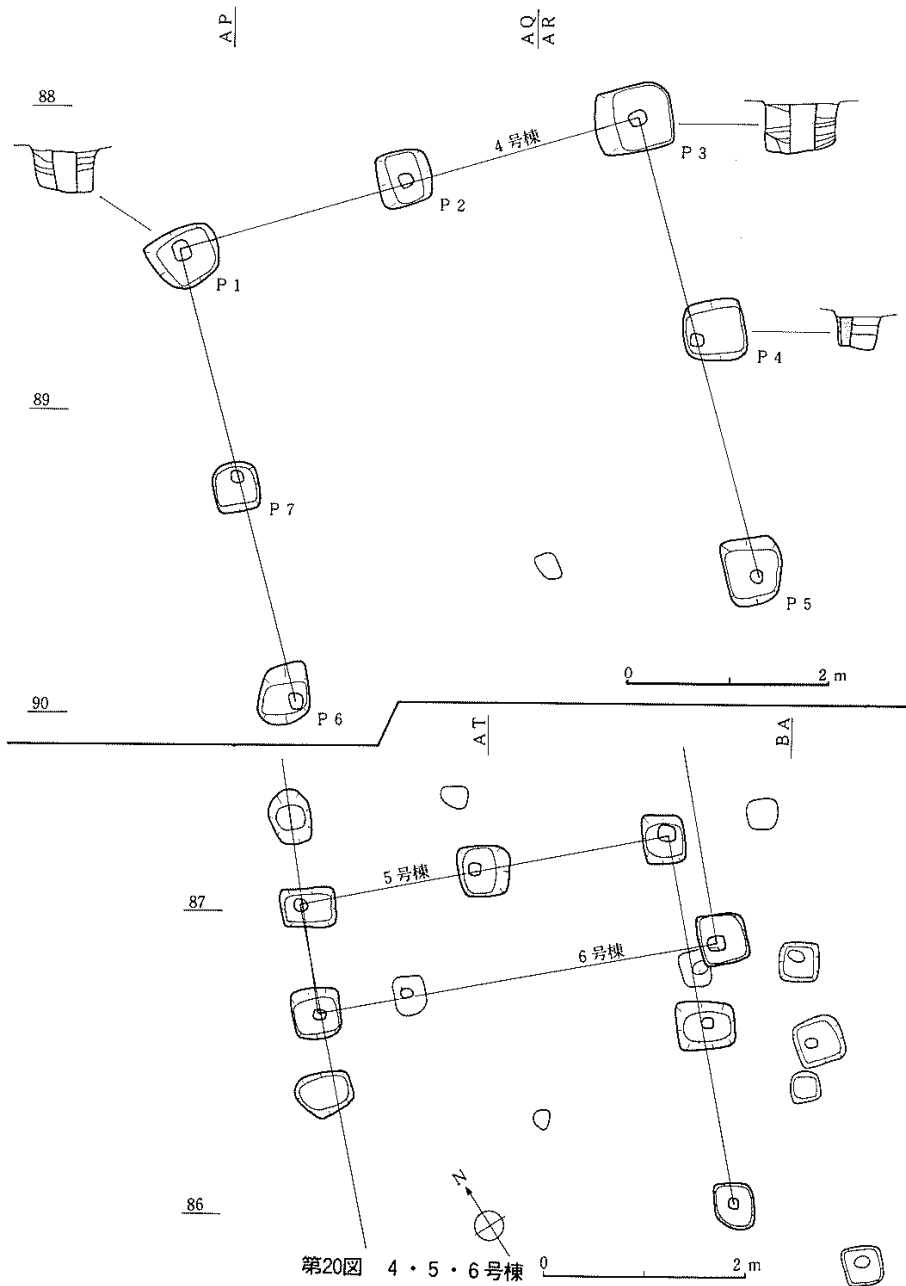
【遺物】 ピット1の埋土から土師器坏、須恵器坏が出土した。

第8号棟(桁行3間×梁間2間の東西棟・第21図)



No.	出土地区・遺構	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴 (外面・内面・底部)
1	BE95-96区	土師器・杯	BIIIbD	13.0	6.6	3.8	51	外面：ロクロナデ ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色高埋 底面：回転糸切り
2	BE95-96区	土師器・杯	BIIIa	13.4	5.6	4.4	42	外面：ロクロナデ 内面：摩滅 底部：回転糸切り 再調整なし
3	BE95-96区	土師器・壺	BII	16.8				内外面ロクロナデ
4	BE95-96区	土師器・壺	BI	17.8				内外面ロクロナデ
5	ピット63(1号棟北)	須恵器・壺	B	18.0				外面：ロクロナデ+平行叩き目 内面：ロクロナデ
6	ピット13(掘り方)	須恵器・壺	A					内外面ロクロナデ 外面：平行及び縞線状文

第19図 第1、2号棟周辺出土遺物



〔位置・確認面〕 南区のAG・AJ - 113~155区に位置し、地山面で確認された。この付近 (AI~AL - 117~119区) では第8・9・10・11・12号棟が重複し、柱穴の切り合い関係から新旧関係は次のようになる (旧 新)。



【柱 穴】 柱穴は長方形で、大きさは 35×44cm～45×60cm である。確認面からの深さは北列で 35～40cm である。2 個を除き柱穴には柱痕跡が確認されたが、円形で径は約 16cm である。

【遺 物】 柱穴の埋土から須恵器坏が出土した。

第9号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第21図）

【位置・確認面】 南区AG～AI - 115・116 区に位置し、地山面で確認された。第8号棟を切り、第10・12号棟に切られている（第8号棟参照）。

【柱 穴】 柱穴は長方形で大きさは 44×48cm～84×80cm である。確認面からの深さは北列で 30～50cm である。大部分の柱穴には柱痕跡が確認されたが、円形で径は約 16cm である。

【出土遺物】 柱穴の埋土から須恵器坏の破片が出土した。

第10号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第21図）

【位置・確認面】 南区AH～AJ - 115～117 区に位置し、地山面で確認された。柱穴（P6・P7）が第6号竪穴住居跡に切られている、さらに第11号棟にも切られている（第8号棟参照）。

【柱 穴】 柱穴は長方形とほぼ正方形のものがある。大きさは 52×56cm～56～80cm で、確認面からの深さは北列で 20～30cm である。大部分のものに柱痕跡があり、円形で径 20cm である。

【出土遺物】 なし。

第11号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第21図）

【位置・確認面】 南区AH～AJ - 114～116 区の地山面で確認された。第10号棟を切っている（第8号棟参照）。

【柱 穴】 柱穴は方形のものと円形のものとがある。大きさは方形のものが 40×48cm～60×80cm、円形のものが径 50cm で、確認面からの深さは北列で 70～75cm である。全てに柱痕跡があり、円形で大きさは径 20～30cm である。

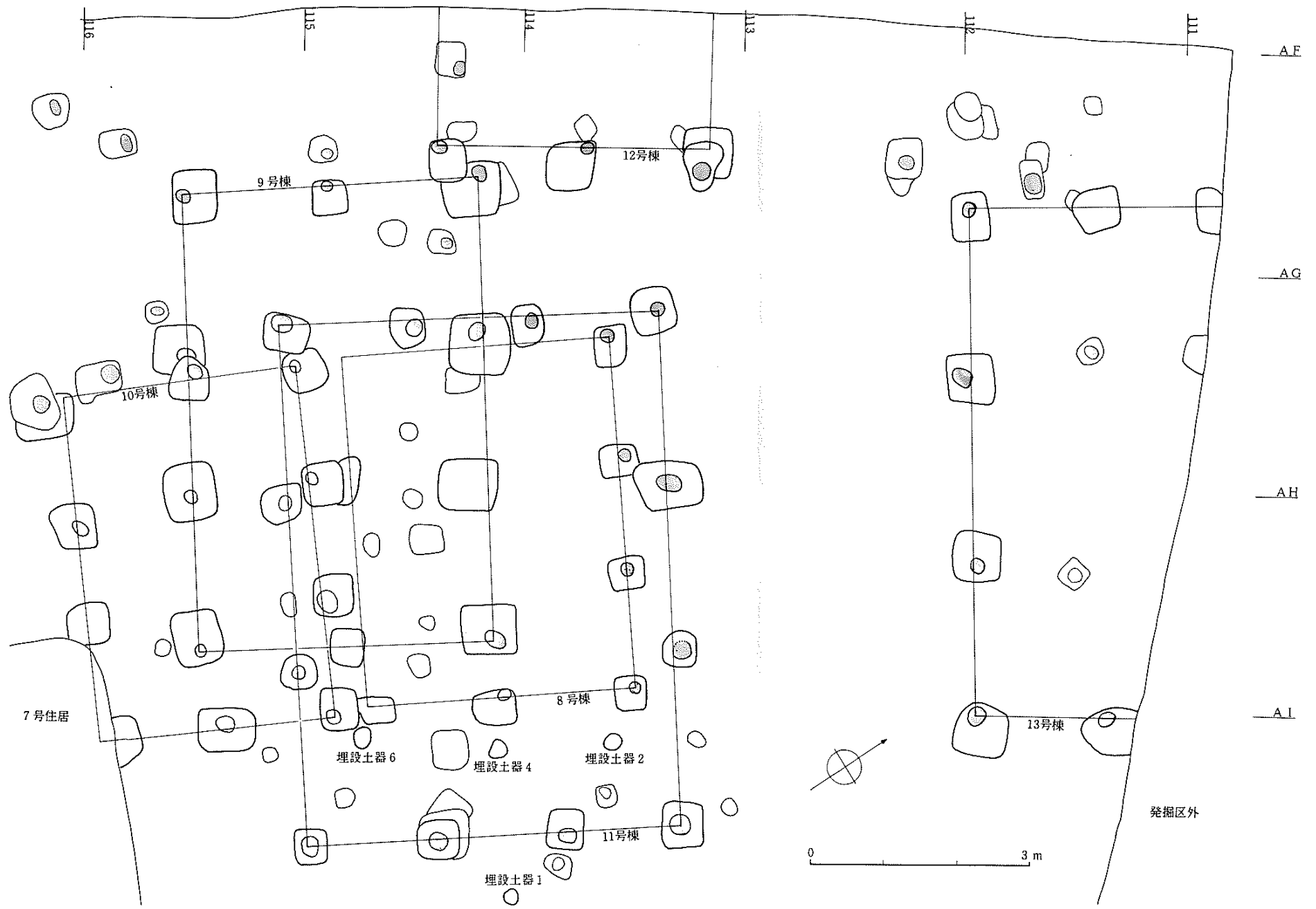
【出土遺物】 柱穴の埋土から須恵器坏が出土した。

第12号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第21図）

【位置・確認面】 南区AF・AG - 114・115 区に位置し、地山面で確認された。第9号棟を切っている（第8号棟参照）が、西側は道路のため調査できなかった。

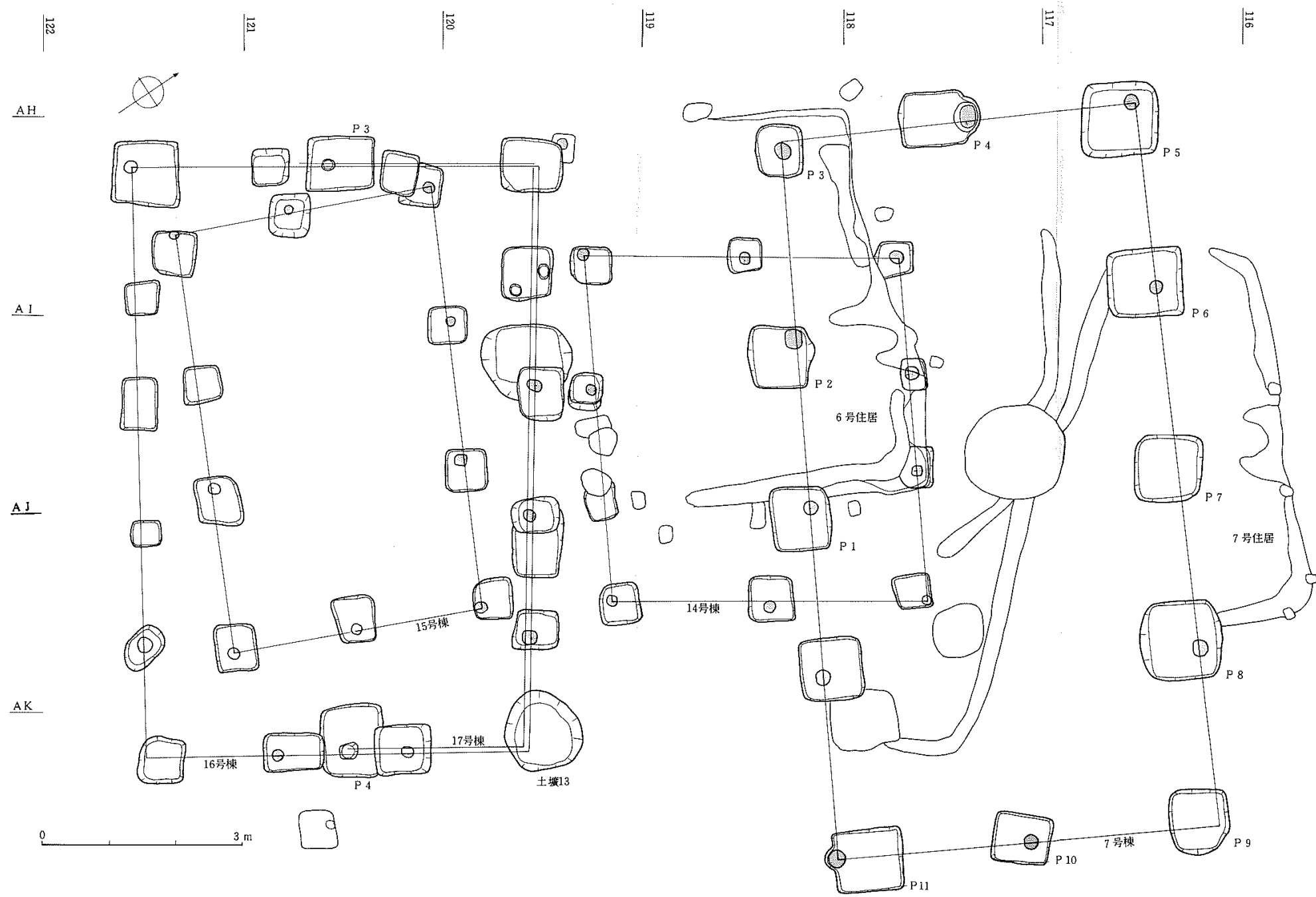
【柱 穴】 柱穴は方形で一辺 70cm で、確認面からの深さは東列で 30～50cm である。3 個とも柱痕跡があり、円形で径 14cm である。

【出土遺物】 なし。



第21図 第9・10・11・12・13号棟1・2・4・6号埋設土器遺構





第22図 第7・14・15・16・17号棟、土坑13

**第13号棟**（桁行3間×梁間2間以上の東西棟・第21図）

【位置・確認面】 南区A G～A I - 112・113 区の地山面で、道路のため調査できなかった北東隅の2個の柱穴をのぞいて確認できた。重複はない。

【柱 穴】 柱穴は方形で、一辺50～70cmであり、深さは底まで掘り下げなかったため不明である。柱痕跡は大部分のものにあり、円形で径15～30cmである。

【出土遺物】 なし。

**第14号棟**（桁行3間×梁間2間の東西棟・第22図）

【位置・確認面】 南区A I～A K - 118～120 区の地山面で確認した。第6号住居跡に切られている。

【柱 穴】 柱穴はほぼ正方形で、一辺60cmあり、確認面からの深さは北列で35cmである。柱痕跡は大部分のものに確認され、円形で径約20cmある。

【出土遺物】 柱穴の埋土から須恵器坏が出土している。

**第15号棟**（桁行3間×梁間2間の東西棟・第22図）

【位置・確認面】 南区A I～A L - 120～122 区に位置し、地山面で確認された。第16号棟に切られている。

【柱 穴】 柱穴はほぼ正方形で、一辺60～70cmあり、確認面からの深さは北列で37～55cmである。柱痕跡は大部分のもので確認され、円形で径約20cmある。

【出土遺物】 柱穴の埋土から須恵器坏・土師器坏が出土している。

**第15号棟**（桁行5間×梁間3間の東西棟・第22図）

【位置・確認面】 南区A I～A L - 120～122 区に位置し、地山面で確認された。第15号棟を切っている。

【柱 穴】 柱穴は正方形で、一辺50～90cmである。確認面からの深さは北列で23～70cmである。柱痕跡は約半数のもので確認され、円形で径約20cmある。

【出土遺物】 柱穴の埋土から土師器坏、須恵器（坏・蓋）が出土している。

**第17号棟**（桁行3間×梁間1間以上の東西棟・第22図）

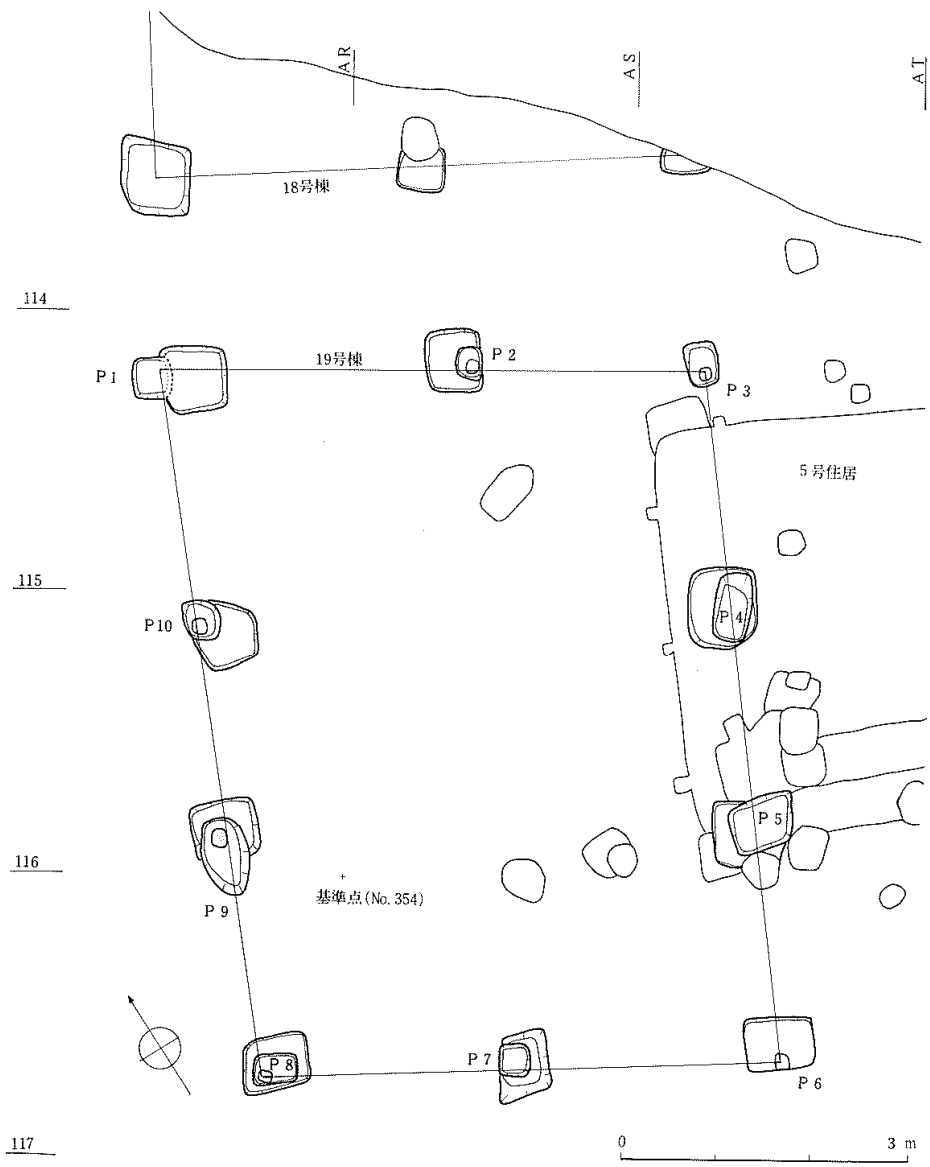
【位置・確認面】 南区A I～A L - 120～122 区に位置し、地山面で確認された。

【重 複】 北西隅と北東隅の柱穴が第16号棟と第3号土壌に破壊されていた。

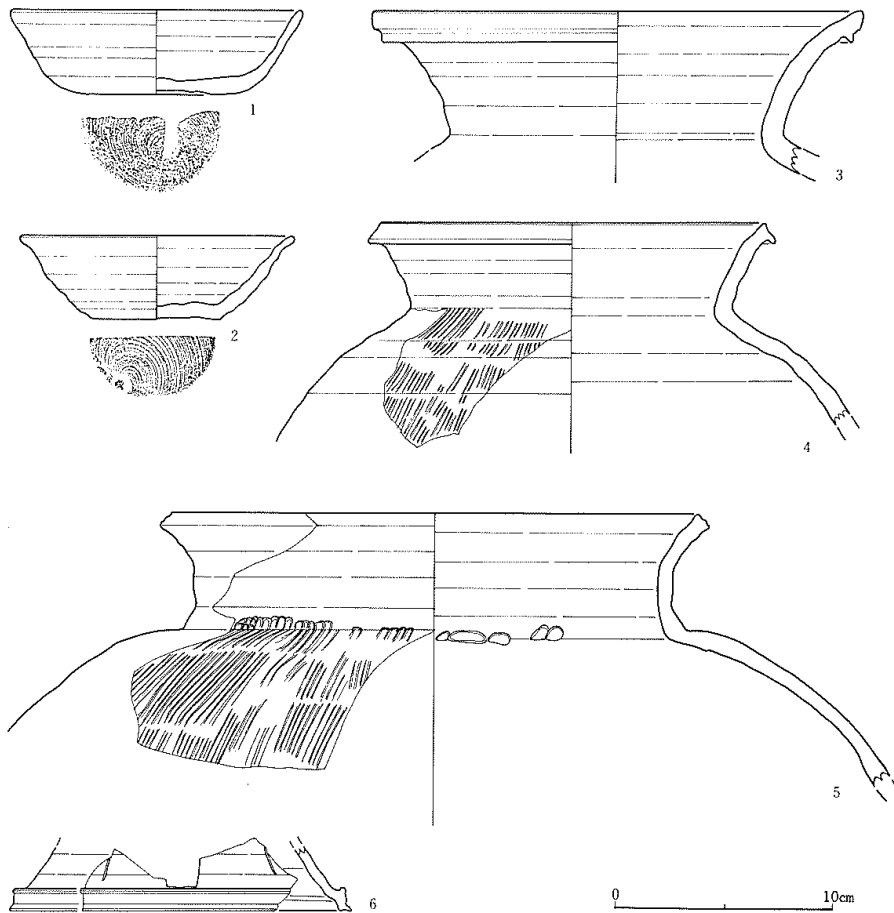
【柱 穴】 柱穴は長方形で80×100～90×110cm、確認面からの深さは北列で45～70cmである。柱痕跡は確認されなかったが、柱穴の底面に径20数cmの窪みをもつもの（P3、4）があり、柱を据えた部分と思われた。

【出土遺物】 柱穴の埋土から土師器（坏・甕）、須恵器坏が出土している。

**第18号棟**（桁行不明×梁間2間の南北棟・第23図）



第23図 第18・19号棟

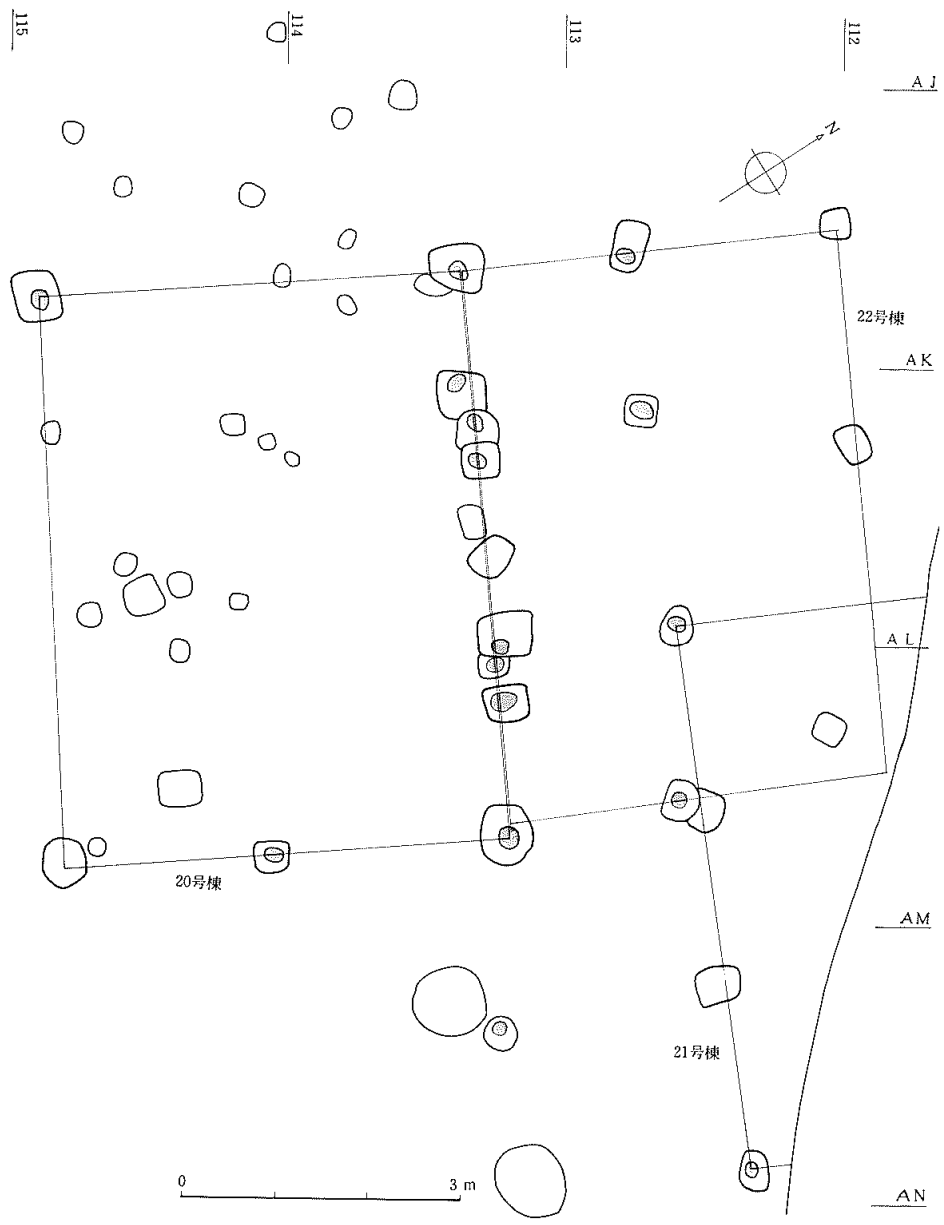


No.	出土地区・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴〈外面・内面・底部〉
1	AS-117 II層	須恵器・杯	IbD	13.6	7.4	3.9	54	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り周縁手持ちケズリ
2	AS-117 II層	須恵器・杯	VbD	12.8	5.8	3.9	45	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
3	AR-118	須恵器・壺	B	22.8				内外面：ロクロナデ
4	AS-117, 118	須恵器・壺	B	19.0				外面：ロクロナデ+平行喫き目 内面：ロクロナデ
5	AS-117, 118	須恵器・壺	B	25.0				外面：ロクロナデ+平行喫き目 内面：ロクロナデ、おさえ痕跡あり
6	AS-118, BA-118	須恵器・円面硯			15.9			内外面：ロクロナデ

第24図 第18・19号棟周辺出土遺物

【位置・確認面】 南区AR～AT-114区に位置し、地山面で確認された。北側が調査区外に延びている。第4号住居跡に接近するが、切り合いはないので新旧は不明である。

【柱穴】 柱穴は方形で、大きさは一辺50～70cmである。確認面からの深さは南列で6～23cmである。柱痕跡の確認されたものはない。



第25図 第20・21・22号棟

【出土遺物】 柱穴の埋土から須恵器・土師器の破片が出土した。

第19号棟（桁行3間×梁間2間の南北棟・第23図）

【位置・確認面】 南区AR～AT-115～117区に位置し、地山面で確認された。第5号竪穴住居跡を切っている。また、柱穴は同位置で切り合いがあるものがあり、同じ位置で同規模の立替えがあった可能性がよい。

【柱穴】 柱穴は方形で、規模は70×60cm～30×50cmである。確認面からの深さは北列で15～35cmである。柱痕跡は約半数のもので確認され、平面形は方形に近い円形で、大きさは径12～24cmである。ピット9の埋土に灰白色の火山灰らしきものが入っていた。

【出土遺物】 柱痕跡から須恵器・土師器の破片が出土している。また、第19号棟と基本層位・層から須恵器（坏・甕）、円面硯が出土した。

第21号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第25図）

【位置・確認面】 南区のAK～AM-114・115区に位置し、地山面で確認された。第21、22号棟と重複し、柱穴の切り合いから新旧関係は第20号 第22号 第21号棟となる。

【柱穴】 柱穴は方形と楕円形のものがあり、規模は方形のものが40×40cm～50×60cm、楕円形のものは50×50cmほどである。うち4個に柱痕跡が確認できた。柱痕跡は円形で径16～20cmある。

【出土遺物】 遺物はなし。

第21号棟（桁行3間×梁間不明の東西棟・第25図）

【位置・確認面】 南区のAL～AN-111・112区に位置し、地山面で確認された。第22号棟を切っている。

【柱穴】 柱穴は方形と楕円形のものがあり、規模は方形のものが一辺40～50cm、楕円形のものが30×40cmほどである。柱痕跡は円形で径16cmある。

【出土遺物】 柱穴の埋土から土師器と須恵器の破片が出土した。

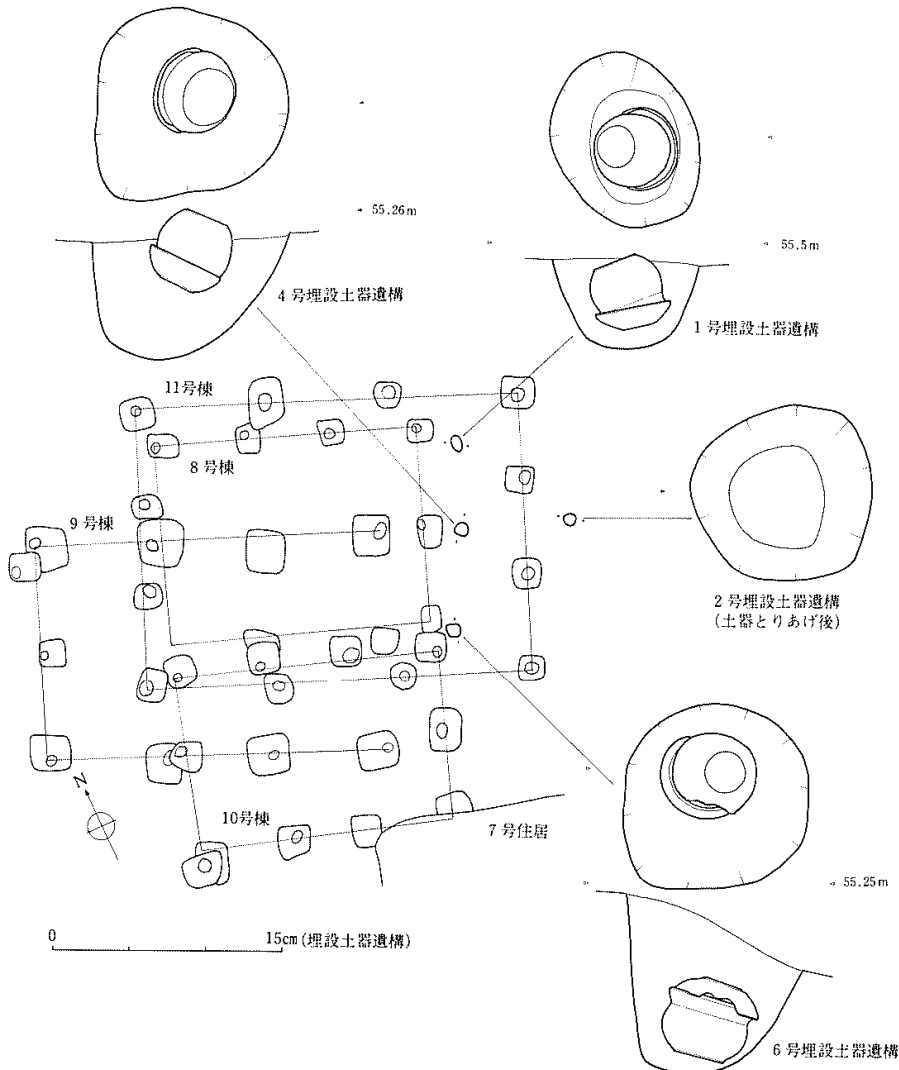
第22号棟（桁行3間×梁間2間の東西棟・第25図）

【位置・確認面】 南区のAL～AN-111・112区に位置し、地山面で確認された。北東側が調査区外にのびる。第20号棟を切り第21号棟に切られている。

【柱穴】 方形と楕円形のものがあり、規模は方形のものが40×40cm～50×60cm、楕円形のものが50×60cmである。6個に柱痕跡が認められた。

### c 埋設土器遺構

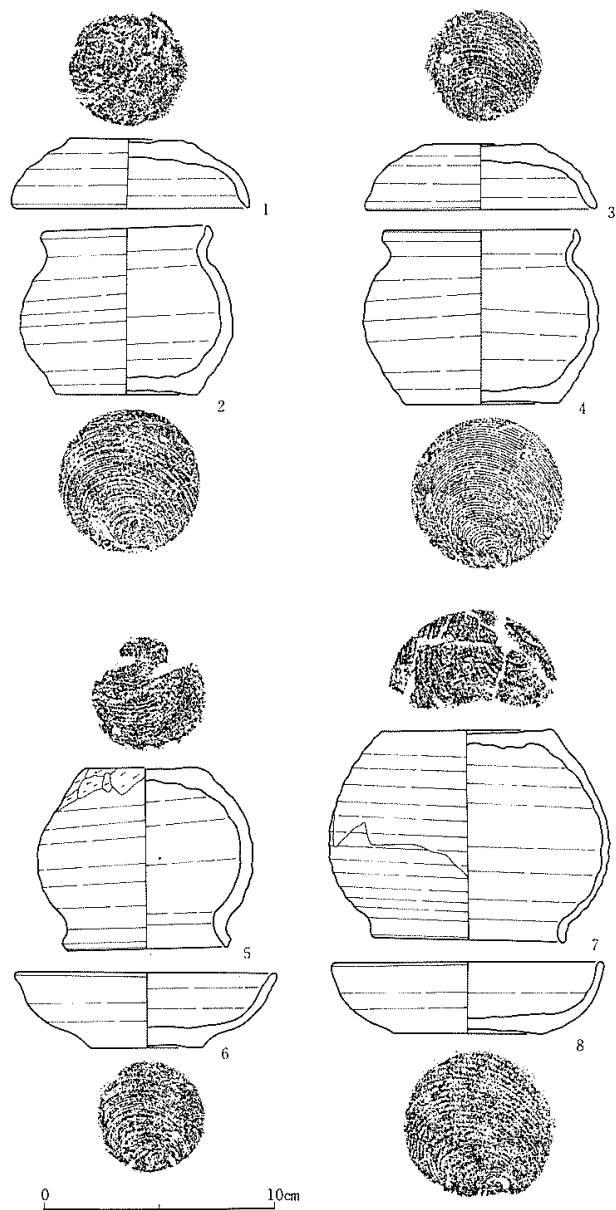
調査区の南地区で赤焼土器の甕に坏で蓋をしたものを埋設した小土壇が6基検出された。第3、5号遺構はそれぞれ単独で第3号、5号竪穴住居内にあり、第1・2・4・6号遺構はまとまって掘立柱建物跡の第8・11号棟の東側にある。第5号遺構は第5号住居跡の床面をはず



番号	土器埋設の土壌					出土土器		他の遺構との関係	
	出土地区	平面形	規模(直径)cm	深さcm	断面形	埋土の特徴	出土状況		土器の内容物
1	AJ-115	円形	約24	約12	逆台形	7.5YR4/4, 粘質シルト	正立	目視ではなし	第8・11号独立柱建物跡の東側
2	AJ-114	楕円形	約23×18	約12	逆台形	7.5YR4/4, 粘質シルト	倒立	目視ではなし	第8号独立柱建物跡の東側
3	AO-115	円形	約20	約20	逆三角形	10YR3/4, シルト	倒立	目視ではなし	第3号竪穴住居跡の床面下
4	AJ-115	円形	約24	約16	逆台形	7.5YR4/4, 粘質シルト	倒立	(分析予定)	第8号独立柱建物跡の東側
5	AT-116	隅丸方形	約24×20	約15	逆台形	7.5YR4/4, 粘質シルト	正立	(分析予定)	第5号竪穴住居跡の床面下
6	AJ-115	円形	約24	約23	逆台形	7.5YR6/4, シルト	正立	目視ではなし	第8号独立柱建物跡の東側

第26図・表2 埋設土器遺構（土器は坪を蓋に利用した赤焼土器の壺）

した段階で確認された。第1、2、3、4、6号遺構については遺構検出面はいずれも削平の進んだ地山面であり、周囲の建物跡との関連は十分考えられるのだが、出土状況からは遺構間の共伴関係は明らかでない。



No	出土遺構	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴
1	1号埋設土器遺構	赤焼土器・蓋(杯)	B	10.3	5.0	3.1	49	内外面：ロクロナデ
2	1号埋設土器遺構	赤焼土器・壺		7.4	6.2	7.3		
3	6号埋設土器遺構	赤焼土器・蓋(杯)	B	10.0	5.0	2.8	50	底部：回転糸切り 再調整なし
4	6号埋設土器遺構	赤焼土器・壺		8.4	6.6	7.6		
5	2号埋設土器遺構	赤焼土器・壺		7.3	5.4	7.9		
6	2号埋設土器遺構	赤焼土器・蓋(杯)	Ba	11.3	4.8	3.4	42	
7	3号埋設土器遺構	赤焼土器・壺		8.5	7.4	9.3		
8	3号埋設土器遺構	赤焼土器・蓋(杯)	B	11.8	6.4	3.1	54	

第27図 埋設土器遺構出土遺物



各遺構の形態・規模については第2表に示したとおりである。土器を埋設した穴は、5号が隅丸方形を呈するほかは円形ないし楕円形で、大きさは約20cmと小さい。底面は第5号が明瞭な平坦面をつくっているが他は尖底(3号)ないし丸底(1・2・3号)である。深さは12~23cmといういろいろだが、削平の進んでいて上部がかなり失われている遺構もあることを考えると、大きさが小さい割に深さのある土壌という印象を受ける。埋設土器は甕の口を坏をさかさまにして覆うように蓋をしたもので、土壌の中位あるいは底部近くに埋設されていた。この組み合わせは甕が正位(1・5・6号)で埋設される場合と倒位(2・3・4号)で置かれる場合がある。土器の内容物は、第2号遺構の甕にはなにもはいいなかった。(3・6号の甕こは土が詰まっていたが、土器が破損した部分や蓋がずれた隙間から流入したものと見られる。いずれにせよ内容を点検したものでは目視では土以外の遺物を発見することが出来なかった。なお、4・5号遺構出土の土器については自然科学的方法によって内容物の調べるため、周囲の土と一緒に取り上げており、今回は実測図をのせることが出来なかった(次回の報告書に分析結果とともに掲載する予定)。

#### **d 土 壌**

土壌は13基が確認されている。5基が縄文時代、8基が奈良・平安時代のものであり、中央南区に多く分布する。

##### **第1号土壌(第28図)**

【位 置】 中央南区のBH-101区にあり、地山面で確認された。

【平面形・規模】 楕円形で、長軸70cm、短軸55cm、深さ20cmである。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は皿状に窪む。

【堆積土・遺物】 2枚あり、ロク口使用の土師器片(坏・甕)が出土した。

##### **第2号土壌(第28図)**

【位 置】 中央地区のAQ-56区にあり、第 層で確認された。

【平面形・規模】 東側が道路のため調査できないが、残存部分から平面形は楕円形と思われる。規模は長軸2.0m、短軸は1.5m以上、深さ約20cmである。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。

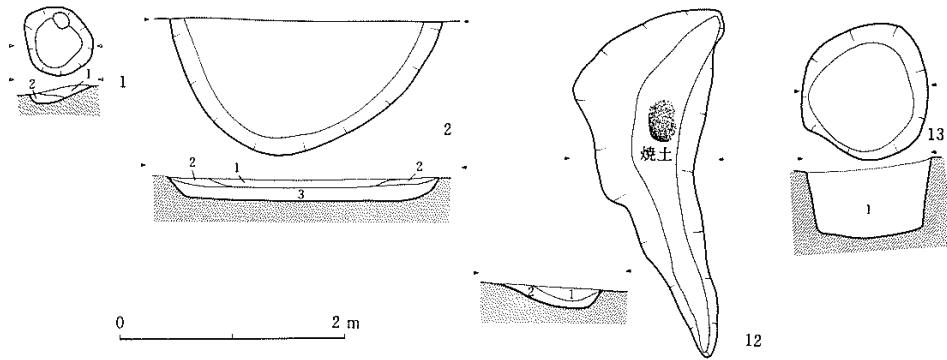
【堆積土・遺物】 3枚認められる。第2層から須恵器の甕の破片が出土した。

##### **第8号土壌(第30図)**

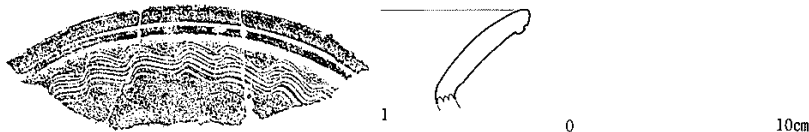
【位 置】 中央南区のBE-98区にあり、地山面で確認された。第1号竪穴遺構を切っている。

【平面形・規模】 楕円形で、規模は長軸1.6m、短軸は1.2m、深さ約40cmである。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は皿状である。



層名	層No	土色	土性	特徴
1号土壌堆積土	1	10YR4/4 褐色	シルト	軟かい、焼土・炭・土器片を含む。
	2	2.5YR3/6 暗赤褐色	粘土質シルト	焼土。とりわけ上面が硬く焼ける。
2号土壌堆積土	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	
	2	7.5YR8/4 浅黄褐色	シルト	須恵器片を含む。
	3	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	
12号土壌堆積土	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	しまりあり、焼土・炭化物を含む。
	2	5YR4/3 にぶい赤褐色	シルト	1より炭化粒が多い。
13号土壌堆積土	1			



No	出土遺構	遺物	特徴
1	2号土壌 (AQ-59)	須恵器・壁	頸部外面：楕円状文

第28図 その他の土壌と出土遺物

【堆積土・遺物】 3枚認められる。遺物はない。

### 第9号土壌 (第30図)

【位置】 中央南区のB O ~ B E - 100区にあり、地山面で確認された。第1号竪穴遺構を切っている。

【平面形・規模】 削平のため西辺は不明である。平面形は長方形で、規模は長軸 4m 以上、短軸 1.45m、深さ 10cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は皿状に窪む。

【堆積土・遺物】 1枚で、土師器 (坏・甕)、須恵器 (甕) が出土している。

### 第10号土壌 (第30図)

【位置】 中央南区のB E - 100区にあり、地山面で確認された。第9号土壌を切っている。

【平面形・規模】 長方形で、規模は長軸 45cm、短軸 40cm、深さ 15cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。

【堆積土・遺物】 1枚で、土師器坏が出土した。

### 第11号土壌 (第30図)

〔位置〕 中央南区のB O - 99 区にあり、地山面で確認された。

〔平面形・規模〕 長方形で、規模は長軸 50cm、短軸 45cm、深さ 30cm である。

〔壁・その他〕 壁は斜めに立ち上がり、上半でゆるやかに広がる。底面は平坦だが狭い。

〔堆積土・遺物〕 2 枚ある。第 2 層から土師器甕が出土した。

#### 第 12 号土壇 (第 28 図)

〔位置〕 南区のA S - 18 区に位置し、第 層で確認した。

〔平面形・規模〕 南北に長く溝状であり、北側がやや膨らむ。規模は長軸 3m、短軸 1.4m、深さ 20cm である。

〔壁・その他〕 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦であるがやや北側が高い。また、30×30cm の範囲が焼けて固くなっている。

〔堆積土・遺物〕 2 枚あり、いずれも炭化物を少量含む。第 2 層から土師器 (甕・坏) が出土した。

#### 第 13 号土壇 (第 22 図)

〔位置〕 南区のA K・A L ~120 区に位置する。第 16、17 号棟の東隅の柱穴と重複しこれを切っている。

〔平面形・規模〕 円形で径 1.2m あり、深さは 68cm ある。

〔壁・その他〕 壁は急で底面は平坦である。

〔堆積土・遺物〕 1 枚ある。遺物はない。

### e 焼土遺構

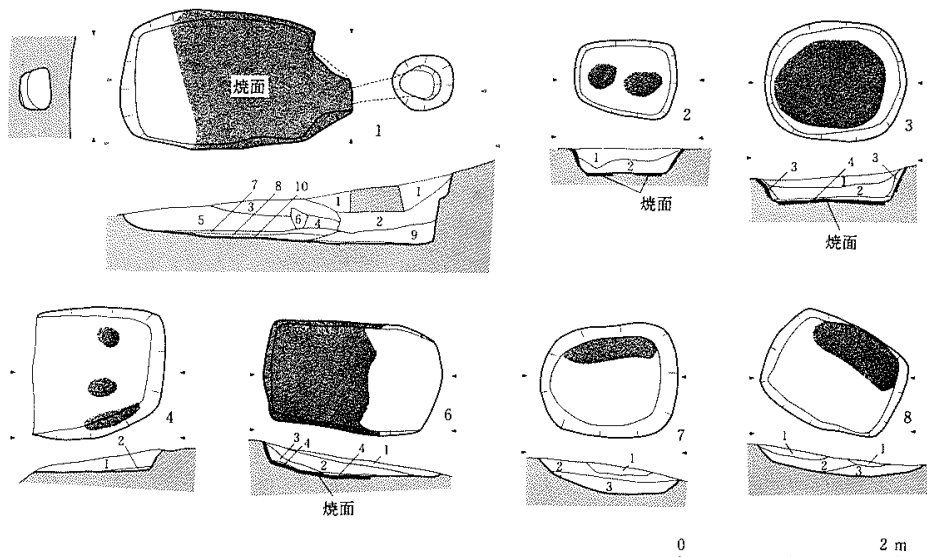
土壇のうち壁や底面に強い火熱を受けた痕跡をもつものを焼土遺構とした。第 1 焼土遺構は明らかに近世の炭窯跡であるが、他の遺構は古代に属すると思われるが性格は不明である。

#### 第 1 焼土遺構 (近世の炭窯跡)

〔位置〕 中央南区のA S - 83 区に位置する。南側に下がる緩斜面に沿って立地する。

〔平面形・規模・形態〕 炭化室と煙道部からなり、燃烧部の平面形はやや長方形で、規模は長軸 (南北) 1.7m、短軸 (東西) 約 1.3m である。底面は平坦である。煙道はトンネル状で底面は炭化室の床面と同じ高さである。燃烧部奥壁 (北壁) の東寄りの部分から外方に約 0.8m のび、そこから直角に煙出し穴につらなる。煙道は縦 18×横 14cm であるが、天井部分は一部剥落している。煙出し穴は径 0.3m、深さ約 0.4m である。焚口部は削平が著しくはっきりしない。なお、煙道部と燃烧部の奥 3 分 2 は壁・床とも焼けて赤変し、とくに煙道の付近が赤色化が著しく、固くなっている。

〔堆積層・遺物〕 9 枚あり、下部において灰を含む炭化物層と焼土層が互層になって全面に堆積している。第 7 層から須恵器の甕の破片が 1 点出土している。



遺構	層No	土色	土性	特徴	遺構	層No	土色	土性	特徴
1号焼土遺構	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	地山土・炭土・炭を含む。	3号焼土遺構	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	
	2	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山土・炭若干を含む。		2	5YR3/1 黒褐色	シルト	炭土・炭を含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	土器片・チップが出た。	4号焼土遺構	1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
	4	7.5YR4/3 褐色	シルト	5よりも地山土が少ない。		2	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	木炭の細片を含む。
	5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	上部は地山土(粘土)を多く含む。	6号焼土遺構	1	7.5R2/3 極暗赤褐色	シルト	
	6	7.5YR5/6 暗褐色	粘土			2	7.5R3/2 暗赤褐色	シルト	炭土・木炭を含む。
	7	10YR1.7/1 黒褐色	炭化物	炭を含む、須臾器片を出土。		3	10R3/6 暗赤色	シルト	
	8	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト		7号焼土遺構	4	10R2/1 赤黒色	シルト	木炭粒・須臾器片を含む。
	9	5YR4/6 赤褐色	焼土?			1	10R3/6 暗赤色	シルト	焼土ブロック
	10	2.5YR4/6 炭化物	赤褐色	炭化物 焼付面(底面)の上になる。		2	10R2/1 赤黒色	シルト	木炭粒を含む。
				3		7.5R3/2 暗赤褐色	シルト	炭土・木炭を含む。	
2号焼土遺構	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト		8号焼土遺構	1	10R3/6 暗赤色	シルト	焼土ブロック
	2	10YR5/4 赤褐色	シルト	焼土ブロック		2	10R2/1 赤黒色	シルト	木炭粒を含む。
	3	5YR3/1 黒褐色	シルト	炭		3	7.5R3/2 暗赤褐色	シルト	
	4	10R5/8 赤色	シルト	細かい炭を含む。					

第29図 焼土遺構 堆積土

## 第2 焼土遺構

【位置】 北区のAK - 10区に位置し、第 層で確認された。

【平面形・規模】 楕円形で、規模は長軸 1.3m、短軸 1.1m、深さ 20cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。側壁と底面が焼けて固く、底面に赤褐色の焼土がある。

【堆積土・遺物】 水平に 4 枚堆積し、第 2 層以下は焼土や木炭を含む。遺物なし。

## 第3 焼土遺構

【位置】 北区のAN - 15区に位置し、第 層で確認された。

【平面形・規模】 平面形は台形状である。規模は長軸 0.95m、短軸 0.7m、深さ 20cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。壁の上半が焼けて固く締まって

いる。また、底面にも2ヶ所焼けているところがある。

【堆積土】 水平に2枚認められる。遺物なし。

#### 第4 焼土遺構

【位置】 中央北区のAR - 82 区に位置し、第 層で確認した。

【平面形・規模】 南側が削平されて全体形は不明であるが、残存状況から考えて平面形は方形と推定される。規模は長軸 1.2m 以上、短軸 1.2m、深さ 20cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。底面の上に暗赤褐色土に炭化物の粒が入っている。東壁の一部と底面の一部が焼けている。

【堆積土・遺物】 3枚認められる。第2層から土師器甕が出土した。

#### 第6 焼土遺構

【位置】 南区のAS - 120 区に位置し、第 層で確認された。南側が削平されているが南壁は僅かに残っている。

【平面形・規模】 長方形である。規模は長軸 1.6m、短軸 1.0m、深さ 20cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は北側にやや傾斜がある。壁と底面の北半部が焼けて固く締まっている。

【堆積層・遺物】 3枚あり、第3層から土師器甕、須恵器甕が出土した。

#### 第7 焼土遺構

【位置】 南区のAS - 122 区に位置し、第 層で確認された。

【平面形・規模】 楕円形である。規模は長軸 1.3m、短軸 1.1m、深さ 30cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は皿状に窪む。

【堆積土・遺物】 3枚認められる。第1層は焼土ブロックを含む。第2層から土師器（坏・甕）が出土した。

#### 第8 焼土遺構

【位置】 南区のAS - 122 区に位置し、第 層で確認された。

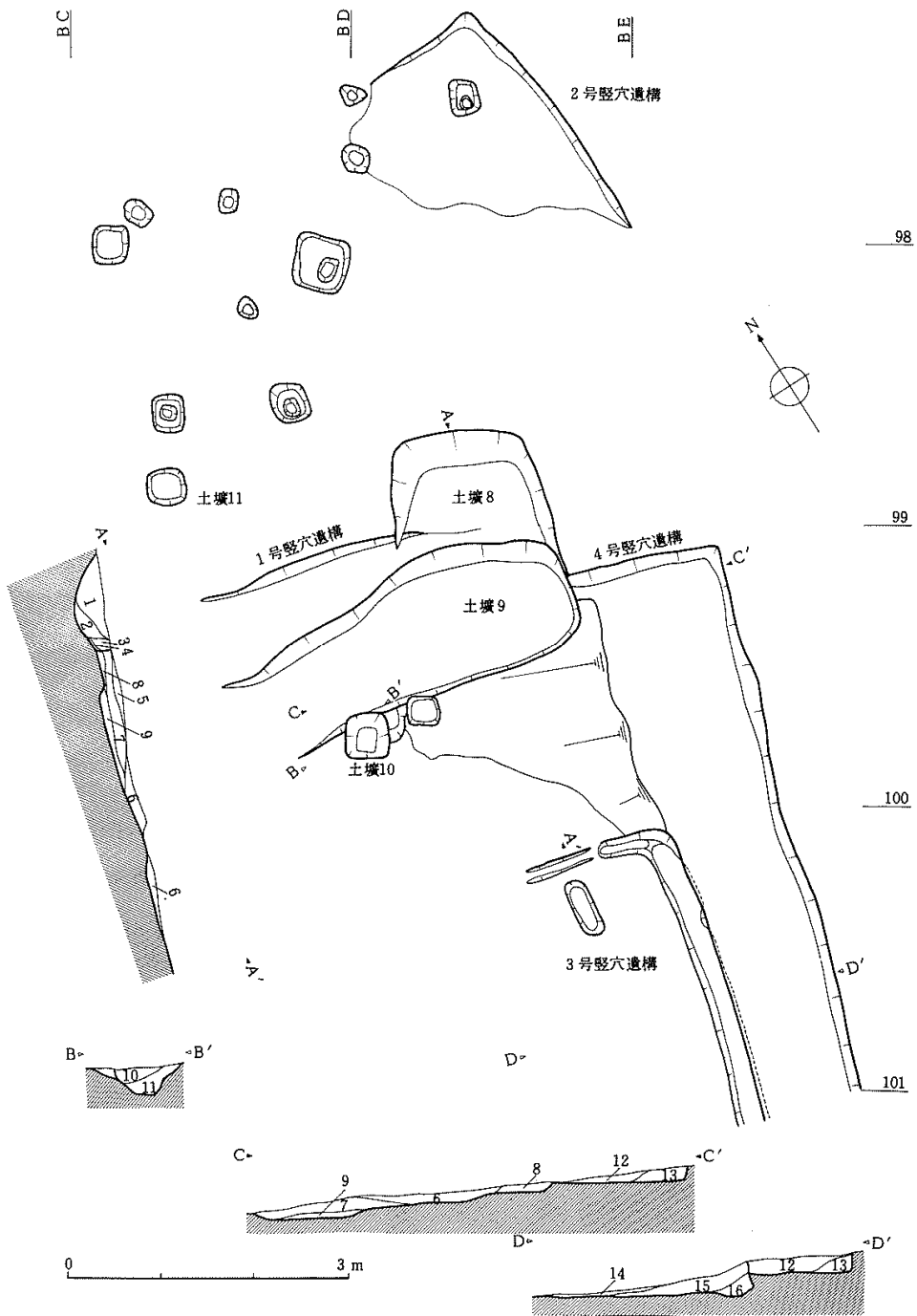
【平面形・規模】 長方形で、規模は長軸 1.3m、短軸 1.0m、深さ 20cm である。

【壁・その他】 壁は斜めに立ち上がり、底面は皿状に窪む。壁の東側が焼けている。

【堆積土】 3枚あり、焼土ブロックや木炭粒を含む。第2層から土師器（坏・甕）の破片が出土した。

#### f 竪穴遺構

竪穴遺構は調査区の中央南区に集中し、計5基発見された。いずれも保存が悪く、形態や規模は不明であるが、平面形は方形または長方形を基調とするようである。竪穴住居跡の一部が残存したものである可能性があるが、証拠がないので性格は不明である。



第30図 第1・3・4・5号竖穴遺構と第8・9・10・11号土塚

層No	層名	土色	土性	特徴
1	8号土壌内堆積土	7.5YR4/4 褐色	シルト	
2	8号土壌内堆積土	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	礫を含む
3	8号土壌内堆積土	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
4	8号土壌内堆積土	7.5YR4/4 褐色	シルト	
5	1号竪穴状遺構	7.5YR4/4 褐色	シルト	礫を含む
6	1号竪穴状遺構	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	礫を含む
7	1号竪穴状遺構	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	
8	1号竪穴状遺構	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	焼土を含む
9	9号土壌内堆積土	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	炭化物を含む
10	10号土壌内堆積土	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	極暗褐色
11	10号土壌内堆積土	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土
12	4号竪穴状遺構	7.5YR6/8 明褐色	シルト	
13	4号竪穴状遺構	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	
14	3号竪穴状遺構	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	
15	3号竪穴状遺構	7.5YR4/4 褐色	シルト	礫を含む
16	3号竪穴状遺構	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	

第30図 第1・3・4・5号竪穴遺構と第8・9・10・11号土壌

### 第1号竪穴遺構

BE-100区に位置する。第8号土壌や第9号土壌などに切られている。

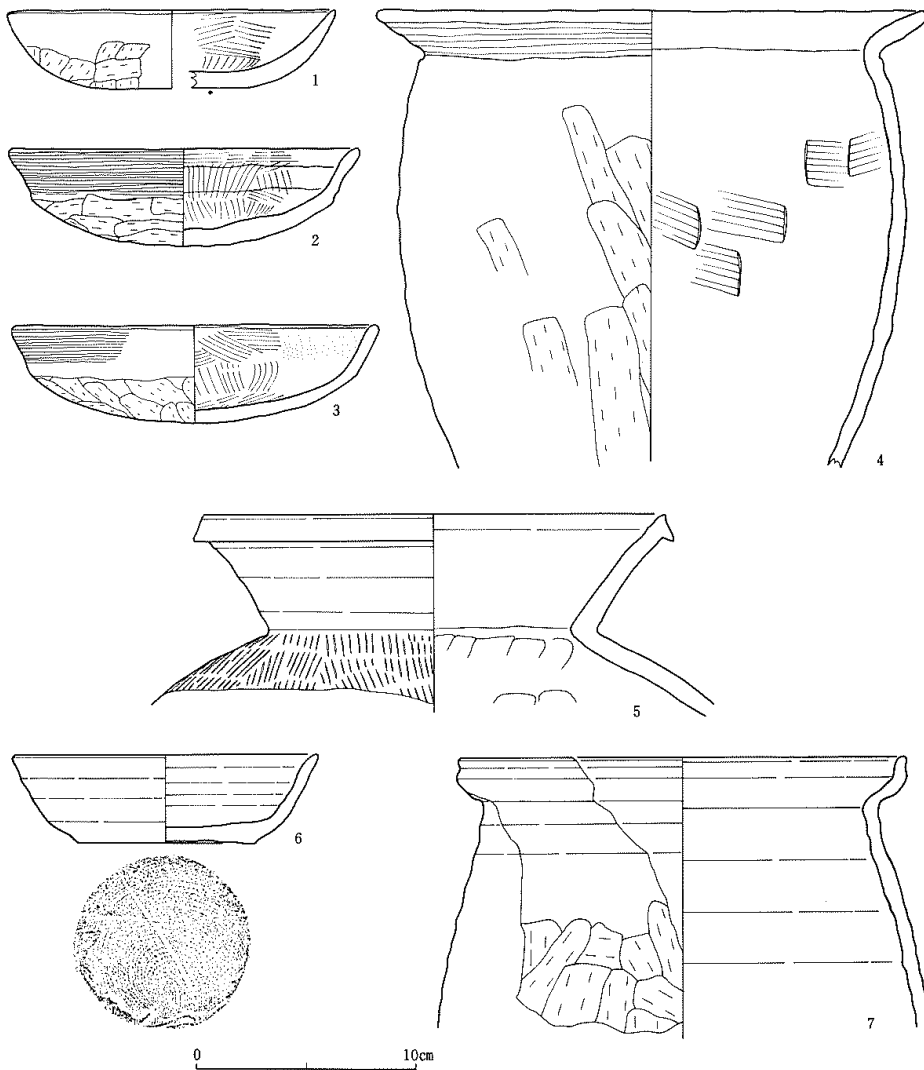
北壁が約3.2mほど段状に残っているに過ぎず、全体形や規模は不明である。床は北壁に近い部分が残っているだけであるが、床面は地山（岩盤）で平坦であるが、やや南に傾斜している。壁は地山を利用し、高さは約25cmある。堆積土は3枚あり、壁際にある第3層には焼土が混じっている。遺物はない。

### 第3号竪穴遺構

BE-101区に位置し、第4号竪穴遺構を切っている。北東隅が残存するのみで、平面は方形または長方形と推定される。規模は不明であるが、壁の残存状況から北辺が1.6m以上、東辺が2.2m以上である。床も北東隅に近い部分が残存するのみ、床面は平坦であるが、やや西に傾斜している。壁は地山（岩盤）で、やや斜めにたちあがり、残存高は15cmである。周溝は壁に食い込んでおり底辺の幅のほうが広い。幅は東辺で30cm、北辺で20cmである。遺構の堆積土は2枚ある。遺物は床面から須恵器の坏・土師器の甕などの破片が出土しているが、図示できるのは須恵器の坏のみである（第31図）。

### 第4号竪穴遺構

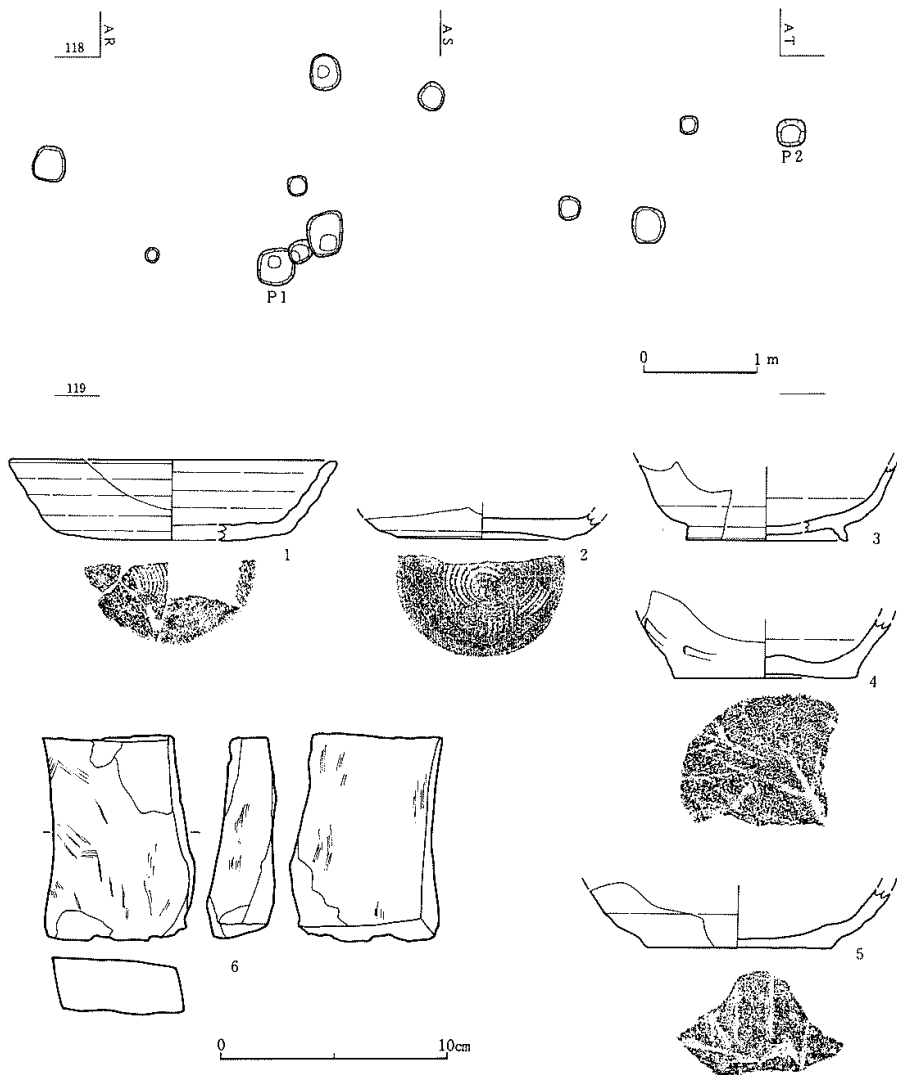
DF-100・101区に位置し、第3号竪穴遺構にきられている。北東隅から東辺に沿って残っている。平面形は方形または長方形と推定される。規模は不明であるが、壁の残存状況から北辺が1.8m以上、東辺が6.0m以上である。床も東壁に近い部分約1.2m幅で残っているにすぎない。床面は平坦である。壁は地山（岩盤）で、垂直に立ち上がり、残存高は東壁で25cmである。堆積土は2枚認められる。遺物はない。



No	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	9号土壇2層	土師器・杯	AIII	15.0		3.6		外面・底部：ヘラナズリ 内面：ミガキ+黒色処理
2	9号土壇	土師器・杯	AI	16.0		4.5		外面：ヨコナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：手持ちヘラナズリ
3	9号土壇2層	土師器・杯	AII	16.6		4.5		外面：ヨコナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：手持ちヘラナズリ
4	9号土壇底部	土師器・甕	A	15.2				外面：ヨコナデ+ヘラナズリ 内面：ヘラナデ (非ロクロ整形)
5	9号土壇	須恵器・甕	B	21.9				外面：ロクロナデ+平行叩き目 内面：ロクロナデ
6	3号竪穴	須恵器・杯	VIBD	14.0	8.0	4.2	S7	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
7	11号土壇1層	土師器・甕	B1	20.5				外面：ロクロナデ+ナズリ 内面：ロクロナデ

第31図 第3号竪穴遺構、第9・11号土壇出土遺物

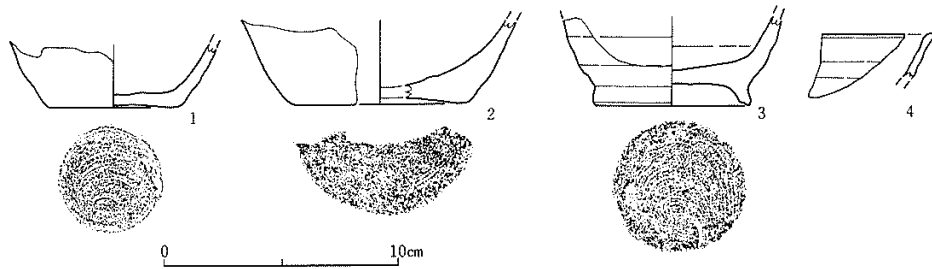




AP-119A7119Pt

No.	出土遺構	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特	意(外面・内面・底部)
1	P1 (AR119)	須恵器・杯	1bD	14.3	5.7	3.5	40	内外面:ロクロナデ	底部:回転糸切り後周縁ロクロナデ
2	P1 (AR119)	須恵器・杯	Wb		7.5			内外面:ロクロナデ	底部:回転糸切り・再調整なし
3	P1 (AR119)	須恵器・高台付碗			7.1			内外面:ロクロナデ	底部:回転糸切り
4	P1 (AR119)	土師器・碗			8.0			内外面:ロクロナデ	底部:木葉痕
5	P1 (AR119)	須恵器・杯			8.0			外面:ロクロナデ	内面:不明 底部:木葉痕
6	P2 (AT119)	砥石						6.2×3.2cm	

第32図 AR-119, AS-119区のピット出土遺物



No	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	溝 4-2、3層	土師器・甕			5.4			摩滅著しく不明
2	溝 4-2、3層	土師器・甕			7.0			摩滅著しく不明
3	溝 7	土師質土器・高台付碗			6.5			内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り後周縁ロクロナデ
4	溝 7	灰釉陶器・皿?						内外面：ロクロナデ、灰釉

第34図 第4・7号溝出土遺物

## 第5号竪穴遺構

B E - 98 区に位置する。北東隅が残存するのみで、平面は方形または長方形と推定される。規模は不明であるが、壁の残存状況から北辺が 1.5m 以上、東辺が 2.8m 以上である。床も北東隅に近い部分が残存するのみであるが、床面は平坦であるが、やや南に傾斜している。床面の残存部分に 3 個のピット ( P1~3 ) があるが、床面に伴うかどうかは不明である。壁は地山 ( 岩盤 ) で、やや斜めに立ち上がり、残存高は東壁で 20cm である。堆積土は 1 枚認められる。遺物はない。

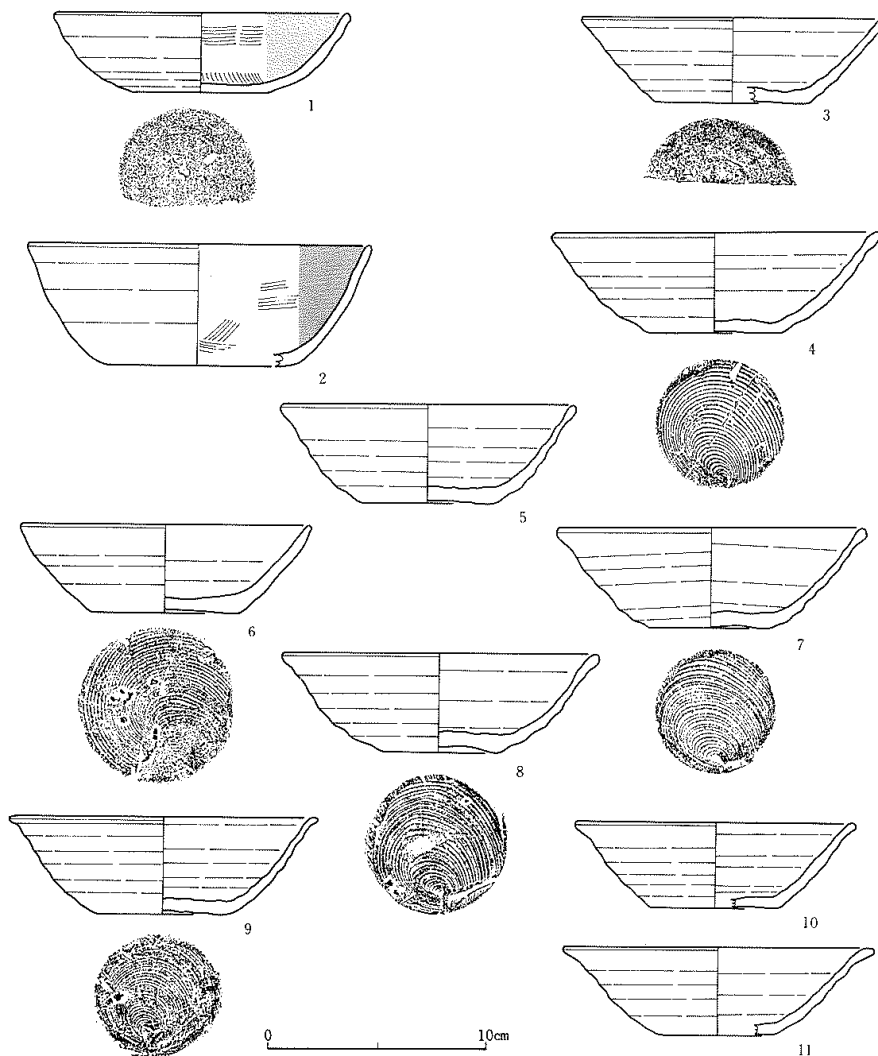
## g 溝

掘立柱建物跡や竪穴住居跡など他の遺構に伴うと考えられる溝 ( 1~3、6 ) を除く溝は 11 条である。これらの溝は南区で検出されたものであるが、部分的に残存しているものや調査区以外に延びているものばかりで全体の様子がわかるものはない。

方向は南西に向かうもの ( 溝 4、5、7、11、12 ) と南東に向かうもの ( 溝 8、13、14 ) がある。このうち出土遺物から古代に属すると考えられるものは溝 4 と 7 で、他のものは遺物が少なく時期は不明である。

溝 4 は第 5 号住居を切って南西に向かって延びており、規模は上幅が約 6m、下幅が約 5m、深さ約 50cm で、断面形は逆台形である。土師器甕などが出土している。

溝 7 は基本層位 - A 層を掘り込んでいる。規模は上幅が約 1.5~2.0m、下幅が約 1.0m、深さ 40cm で、断面形は U 字形である。土師器環・須恵器環・灰釉陶器碗などが出土している。



No.	出土遺構・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴 (外面・内面・底部)
1	溝7	土師器・杯	BHC	13.4	6.0	3.6	45	外面：ロクロナデ+回転ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色結理 底部：不明
2	溝7 - 1層	土師器・杯	BHC	15.6	4.4	5.5		外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色結理
3	溝7 (AS-119)	須恵器・杯	Va④	13.8	7.0	3.8	51	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切りナデ
4	溝7 (AS-119)	須恵器・杯	Vb④	14.8	5.8	4.5	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
5	溝7 (AS-119)	須恵器・杯	Vb④	13.6	6.2	4.5	46	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
6	溝7	須恵器・杯	Vb④	13.2	6.6	4.0	50	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
7	溝7 - 3層	須恵器・杯	Vb④	14.0	5.4	4.5	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
8	溝7 - 1層	須恵器・杯	Vb④	14.4	5.0	4.5	35	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
9	溝7 - 1層	須恵器・杯	Vb④	14.0	6.0	4.4	43	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
10	溝7 (AS-119)	須恵器・杯	Vb④	12.8	5.8	3.8	45	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
11	溝7 - 1層	須恵器・杯	Vb④	14.0	5.0	4.0	36	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし

第33図 第7号溝出土遺物

#### 4. 遺物包含層とその出土遺物

南区の南半分に分布する堆積層は4枚(第～層)あり、基本層位の項で概略を説明したが、補足すると第層はAR-121区の部分で木炭粒子や土器などが多く含まれ、三枚(A、B、C)に細分できた。遺物は各層から出土しているが、とくに第A、B層に多い。

- A層の遺物は比較的大きく、- Bの遺物は破片が多かった。いずれも面をなすものでなく層中で直立したり斜めだったりしている。遺物については、すでに掘立柱建物跡周辺の遺物で示してあるので、ここでは第A、B層出土のものに限って取り上げることにする。

第A、B層出土の遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・緑釉陶器・刀子・鏃・鉄製紡錘車・環状鉄製品・釘・砥石などである。

1. **土師器**： 坏・高台付坏・高坏・蓋・耳皿・甕などがある。出土量のもっとも多い坏をみると、ロク口使用のものが大部分であるが、ロク口不使用のものも若干含まれる。ロク口使用のものは、すべて内面がヘラミガキ・黒色処理されているが、全体の器形や底部の再調整などに差異がみられる。

2. **須恵器**： 坏・高台付坏・高坏・蓋・壺・甕などがある。出土量の多い坏は、底部の切り離し技法をみると、回転系切りによるものが大部分でヘラ切りもみとめられる。口径に対する底径の比などに違いがみられる。

3. **赤焼土器**： 坏の破片が少量出土している。全体の形がわかるものはないが、破片でみると底部の切り離しは回転系切りによっている。

4. **灰釉陶器・緑釉陶器**： 小破片のものが少量出土している。全体の形がわかるものはない。

5. **土 錘**： 2点ある。円盤の中央に貫通孔があげられている。1は土器片を利用したものである。

6. **円面硯**： 1点ある。脚の裾部にあたる破片である。方形の透かしがあり、その両側に縦方向の沈線が並ぶのが観察される。

7. **刀 子**： 1点ある。平棟・平造りで、両関である。茎部の端部が欠損している。

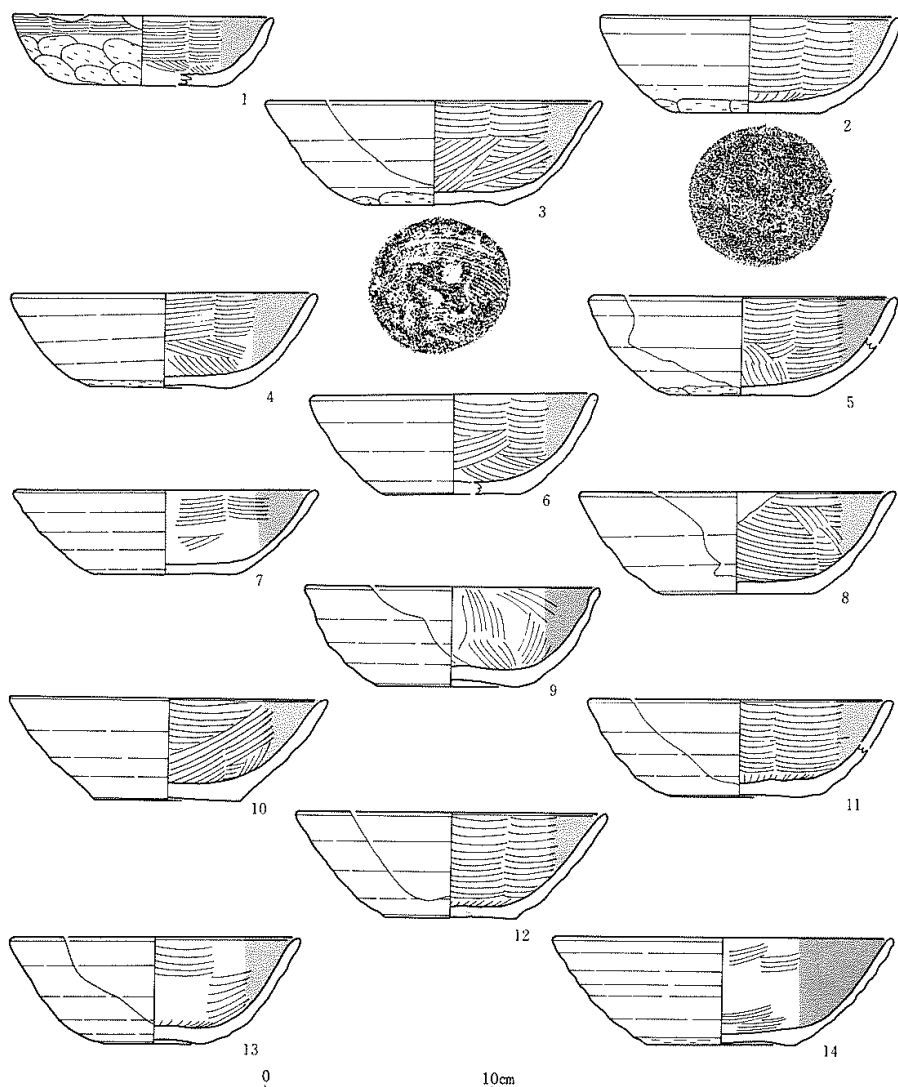
8. **鉄 鏃**： 1点ある。雁又の先端部分の破片である。

9. **鉄製紡錘車**： 1点ある。弾み車の部分で軸は欠損している。径5cm、厚さ3mmある。

10. **環状鉄製品**： 1点ある。全体の形は不明であるが、環状部に棒状の部分が接続していることから紋見の一部と思われる。

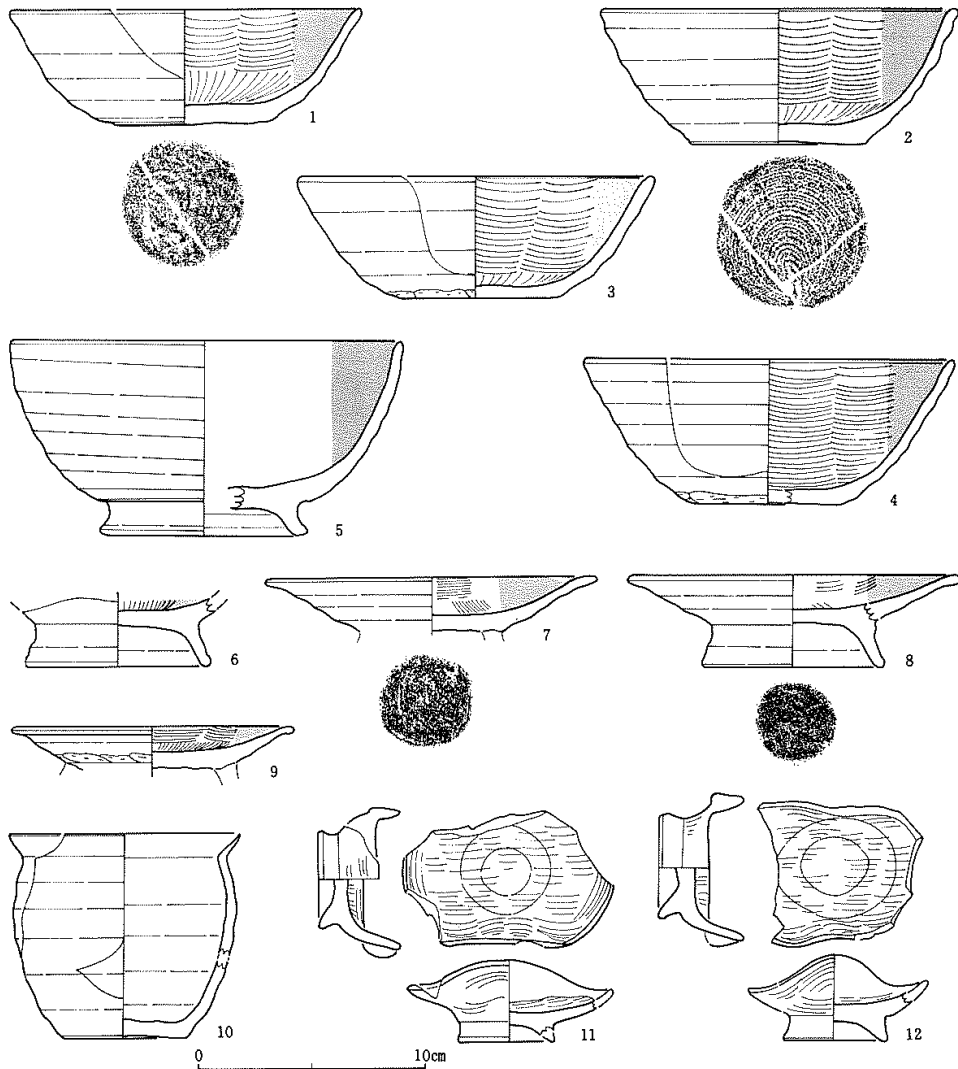
11. **釘**： 1点ある。断面長方形で、頭が折れ曲がり、先端が尖っている。

12. **砥石**： 長方形の砥石の1/2が残る。4面が使用されている。



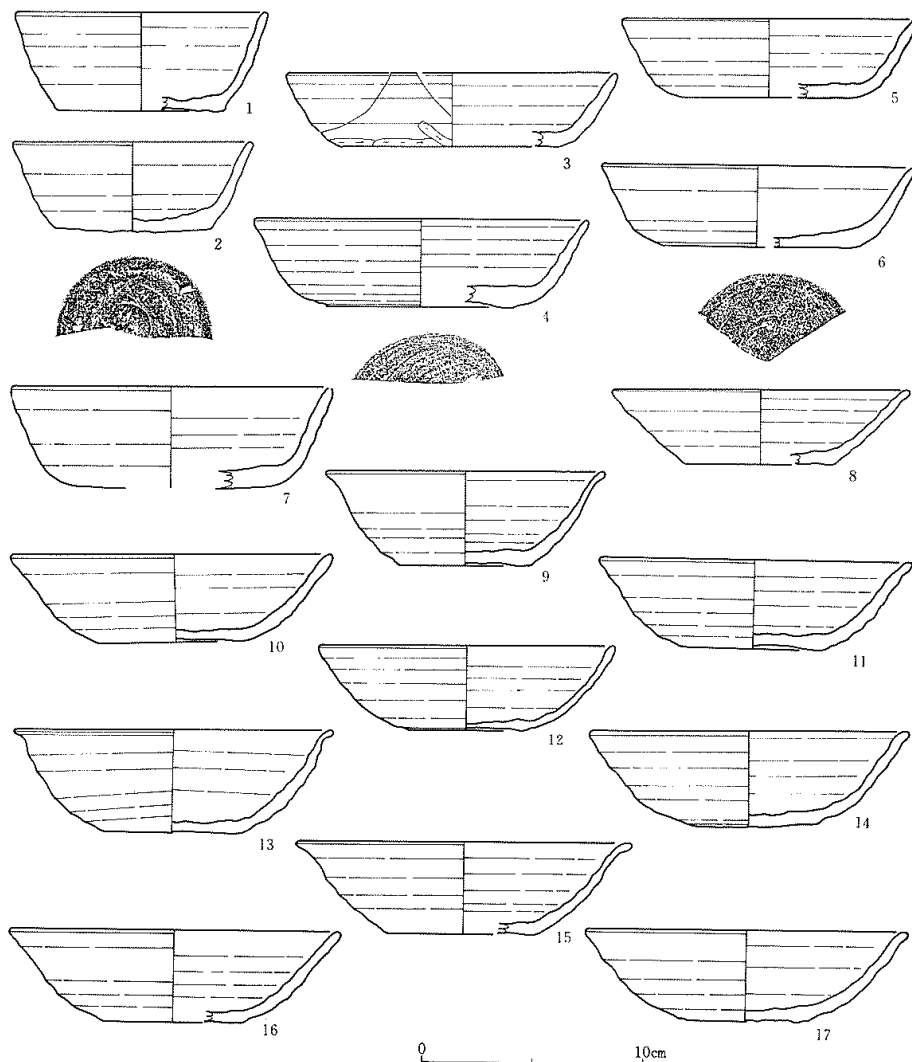
No	出土地区・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特徴(外面・内面・底部)
1	AR-121 II A層	土師器・杯	AⅡ	11.6	6.6	3.1	57	外面底部：ミガキ+手持ちヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理
2	AS-120 II A層	土師器・杯	BⅡb②	13.2	6.4	4.3	48	外面：ロクロナゲ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：手持ちヘラケズリ
3	AS-120 II層	土師器・杯	BⅡb④	14.9	6.2	4.6	42	外面：ロクロナゲ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
4	AR-120 II A層	土師器・杯	BⅡb④	13.4	6.0	4.2	45	外面：ロクロナゲ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転ヘラケズリ
5	AS-120 II層	土師器・杯	BⅡb④	13.6	6.2	4.4	46	外面：ナゲ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明
6	AR-120 II B層	土師器・杯	BⅡc	12.7	6.0	4.4	47	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明
7	AR-120 II B層	土師器・杯	BⅡb②	13.4	6.2	3.7	46	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転ヘラケズリ
8	AS-120 II B層	土師器・杯	BⅡc	14.0	6.7	4.5	48	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明
9	AS-120 II層	土師器・杯	BⅡa	13.2	5.3	4.4	40	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
10	AS-120 II A層	土師器・杯	BⅡa	14.0	6.4	4.5	46	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
11	AS-120 II A層	土師器・杯	BⅡa	13.4	5.8	4.3	43	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
12	AS-120 II層	土師器・杯	BⅡc	13.8	5.8	4.6	42	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明
13	AS-120 II層	土師器・杯	BⅡa	12.8	4.6	4.7	36	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り
14	AS-120 II A, B層	土師器・杯	BⅡb③	15.0	6.2	4.7	41	外面：ロクロナゲ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転ヘラケズリ

第35図 遺物包含層出土の土師器 (1)



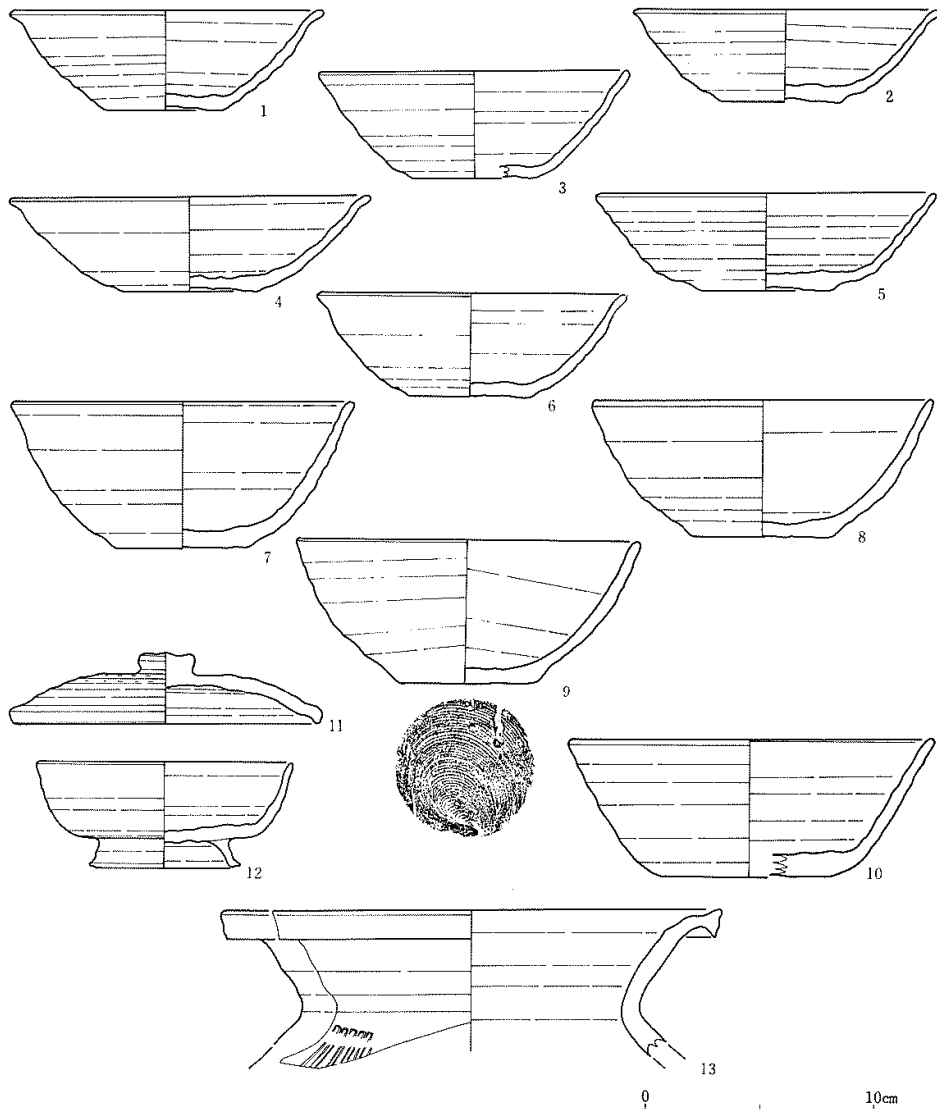
No	出土地区・層位	器種・器形	分類	口径	口径	器高	底径指数	特 徴 (外面・内面・底部)	
								口径	器高
1	AS-120 II A層	土師器・杯	BIIIbc	15.8	6.0	5.2	38	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り？	
2	AS-120 II B層	土師器・杯	B I a	15.8	7.0	6.0	44	外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り	
3	AS-120 II A層	土師器・杯	BIIIbD	15.8	6.4	5.4	41	外面：ロクロナデ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り？	
4	AS-120 II A層	土師器・杯	B I b②	16.3	6.4	6.4	39	外面：ロクロナデ+ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：ヘラケズリ？	
5	AQ-119 II A, B層	土師器・高台付鉢		17.4	9.5	8.6		外面：ロクロナデ+回転ヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：一部ナゲ	
6	AS-120 II層	土師器・高台付皿			7.5			外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：ナゲ	
7	AS-120 II B層	土師器・高台付皿		14.6	6.4			外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：回転糸切り	
8	AS-120 II層	土師器・高台付皿		14.6	7.8	4.1		外面：ロクロナデ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明	
9	AS-120 II A層	土師器・高台付杯		12.6	7.6		60	外面：ロクロナデ+手持ちヘラケズリ 内面：ミガキ+黒色処理 底部：ヘラ切り	
10	AS-120 II層	土師器・甕	B II	10.4	5.4	9.2		内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし	
11	AR-121 II A層	土師器・耳皿		4.2	3.7			内外面：ロクロナデ+ミガキ+黒色処理 底部：摩滅して不明	
12	AQ-121 II 1層	土師器・耳皿		4.5	3.8			内外面：ミガキ+黒色処理 底部：ヘラナゲ	

第36図 遺物包含層出土の土師器 (2)



No	出土地区・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	AR-120 II B層	須恵器・杯	Vla②	11.6	7.6	4.5	66	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り
2	AS-120 II B層	須恵器・杯	Vc②	11.0	7.2	4.1	65	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
3	AQ-120 II B層	須恵器・杯	IIc①	15.2	10.0	3.4	66	内外面：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ
4	AR-120 II層	須恵器・杯	IVc①	15.4	8.2	4.0	53	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
5	AQ-120 II A層	須恵器・杯	Ic①	13.2	8.2	3.5	62	内外面：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ
6	AS-120 II A層	須恵器・杯	IVc①	14.4	8.4	3.7	58	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
7	AS-121 II A層	須恵器・杯	Va②	14.6	8.4	4.6	58	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り+ナデ
8	BA-118 II層	須恵器・杯	IVc①	13.6	7.0	3.4	51	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
9	AS-119 II B層	須恵器・杯	Vlb③	12.8	6.0	4.4	47	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
10	AS-119, 120 II A層	須恵器・杯	Vlb③	14.8	6.5	4.2	45	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
11	AS-120 II A層	須恵器・杯	Vlb③	14.0	6.4	4.0	46	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
12	AS-120 II A層	須恵器・杯	Vlb④	13.5	5.4	3.9	40	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
13	AS-120 II A層	須恵器・杯	Vlb④	14.7	6.2	4.9	42	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
14	AR-120, 121 II A層	須恵器・杯	Vlb④	14.6	6.0	4.4	41	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
15	AR-120 II B層	須恵器・杯	Vlb④	15.2	6.6	4.2	43	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
16	AS-120 II A, B層	須恵器・杯	Vlb④	15.0	6.2	4.2	41	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし
17	AS-121 II A, B層	須恵器・杯	Vlb④	14.6	5.6	4.1	38	内外面：ロクロナデ 底部：回転系切り・再調整なし

第37図 遺物包含層出土の須恵器 (1)



No.	出土地区・層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	底径指数	特 徴 (外 面・内 面・底 部)
1	AS-120 II B層	須恵器・杯	Vb④	13.0	5.0	4.4	38	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
2	AR-120 II A, B層	須恵器・杯	Vb④	13.6	5.2	4.2	38	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
3	AS-120 II B層	須恵器・杯	Vb④	13.8	5.4	4.8	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
4	AS-120 II B層	須恵器・杯	Vb④	15.8	5.8	4.2	37	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
5	AQ-120 II B層	須恵器・杯	Vb④	14.8	5.8	4.3	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
6	AS-119, 120 II B層	須恵器・杯	Vb④	13.8	5.4	4.6	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
7	AS-120 II A層	須恵器・杯	Vb③	15.0	6.0	6.4	40	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
8	AR, AQ-120 II B層	須恵器・杯	Vb③	14.8	6.0	6.0	41	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
9	AS-120 II A層	須恵器・杯	Vb③	15.3	6.0	6.4	39	内外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り・再調整なし
10	AR-120 II B層	須恵器・杯	Va②	16.0	7.4	6.0	46	内外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切りナデ
11	AR-119 II B層	須恵器・蓋	C	13.8		3.1		内外面：ロクロナデ 外面肩：ヘラケズリ
12	AR-120 II A, B層	須恵器・高台付杯	B	11.2	6.6	4.6	59	内外面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ
13	AS-120 II A層	須恵器・椀	B	22.3				外面：ロクロナデ+平行叩き目 内面：ロクロナデ

第38図 遺物包含層出土の須恵器 (2)



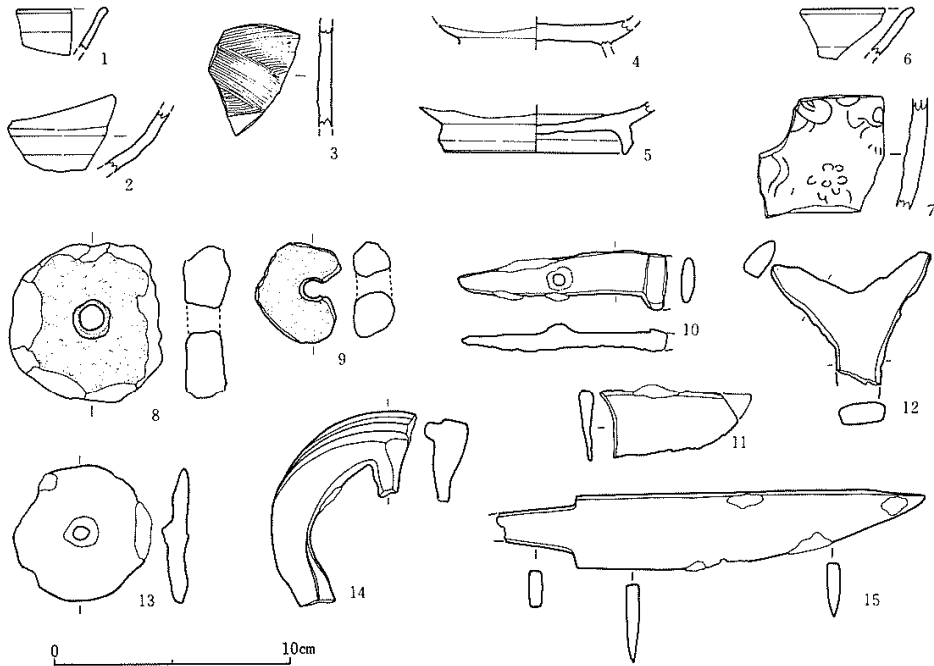
## 5. 郷楽遺跡のまとめ

### 1. 出土土器の特徴について

遺構および遺物包含層出土土器には土師器、須恵器、赤焼土器等がある。これらの器形、製作技術の特徴についてみる。

【土師器】土師器には坏、高台付皿、碗、耳皿、甕等がある。

坏には製作にロクロ不使用のもの（A）とロクロ使用のもの（B）がある。



No	出土地区・層位	器種・器形	底径	特徴（外面・内面・底部）
1	AP-121 II B層	灰釉陶器・皿？		内外面；ロクロナデ、灰釉
2	AO-121 III層	灰釉陶器・皿？		内外面；ロクロナデ、灰釉
3	AO-121 III層	灰釉陶器・長頸壺？		外面；ヘラナデ、灰釉
4	AP, AQ-121 III層	灰釉陶器・高台付碗？		内外面；ロクロナデ
5	AR-121 II B層	灰釉陶器・高台付碗？	7.8	内外面・底部；ロクロナデ
6	AQ-120 II A層	緑釉陶器・皿？		外面；ミガキ？、緑釉
7	AO-121 III層	緑釉陶器・短頸壺？		外面；ミガキ、緑釉
8	AQ-121 III層	土 鏝		土器片の再利用
9	不明	土 鏝		
10	AT-119 I層	鉄製品・刀子（茎）		6.2×1.2×0.6 cm
11	AT-119 I層	鉄製品・刀子		(3.8)×2.0×0.5 cm
12	AR-120 II A層	鉄製品・かりまた鍬		
13	AT-119 I層	鉄製品・紡錘車		φ4.1×0.7 cm
14	AQ-58	鉄製品・鉄具？		
15	AP-116 I層	鉄製品・刀子		(12.8)×2.2×0.4 cm

第39図 灰釉・緑釉陶器、土製品、鉄製品

A類はロクロ不使用で外面に横ナデ・ヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理がみとめられる。器形は丸底で外面に段のあるもの(A)、丸底で稜のあるもの(A)、平底で外面がナデ+ケズリのもの(A)、平底で外面がミガキ+ケズリのもの(A)の4種類である。

B類はロクロ使用で内面にヘラミガキ・黒色処理がみとめられる。切り離しのわかるものに

第3表 土師器坏・須恵器坏分類表

土師器坏	器形	外面調整		切り離し	分類記号
		器形	調整		
A. ロクロ不使用	I 体部外面に段	横ナデ・ケズリ			A I
	II 体部外面に稜	横ナデ・ケズリ			A II
	III 段・稜なし	横ナデ・ケズリ			A III
	IV 段・稜なし	ミガキ+ケズリ			A IV
B. ロクロ使用	I 器高が高く、底径が小さいもの	a 調整無		回転糸切り	B I a
		b 調整有	② 底面全体～体部下端手持ちヘラケズリ	不明	B I b②
		a 調整無		回転糸切り	B II a
		b 調整有	① 体部下端手持ちヘラケズリ	不明	B II b①
			② 底面全体～体部下端手持ちヘラケズリ	不明	B II b②
			③ 底面全体～体部下端回転ケズリ	不明	B II b③
	④ 底面全体回転ケズリ		不明	B II b④	
	c 不明		不明	B II c	
	II 器高が低く、底径が大きいもの	a 調整無		回転糸切り	B III a
		b 調整有	① 体部下端手持ちヘラケズリ	回転糸切り	B III b①
			② 底面全体～体部下端手持ちヘラケズリ	不明	B III b②
		c 不明		不明	B III c
III 器高が低く、底径が小さいもの		a 調整無		回転糸切り	B III a
		b 調整有	① 体部下端手持ちヘラケズリ	回転糸切り	B III b①
	② 底面全体～体部下端手持ちヘラケズリ		不明	B III b②	
c 不明		不明	B III c		

須恵器坏	外面調整	切り離し	器形		分類記号
			器形	調整	
I	底部周縁手持ちヘラケズリ	b 回転糸切り	① 器高が低く、底径が大きいもの		I b①
		c 不明	② 器高が低く、底径が大きいもの		I c①
	II 底部全体～体部下端手持ちヘラケズリ	c 不明	① 器高が低く、底径が大きいもの		II c①
		c 不明	② 器高が高く、底径が大きいもの 体部外傾		II c②
	III 底部全体～体部下端回転ケズリ	c 不明	① 器高が低く、底径が大きいもの		III c①
		c 不明	② 器高が高く、底径が大きいもの 体部外傾		III c②
IV	底部全体ケズリ	c 不明	① 器高が低く、底径が大きいもの		IV c①
		c 不明	② 器高が高く、底径が大きいもの 体部外傾		IV c②
	V 体部下端ケズリ+ナデ	a ヘラ切り	② 器高が高く、底径が大きいもの 体部外傾		V a②
		a ヘラ切り	② 器高が高く、底径が大きいもの 体部外傾		VI a②
	VI 調整なし	a ヘラ切り	④ 器高が低く、底径が大きいもの 体部外傾		VI a④
		b 回転糸切り	① 器高が低く、底径が大きいもの		VI b①
b 回転糸切り	③ 器高が高く、底径が小さいもの		VI b③		
b 回転糸切り	④ 器高が低く、底径が小さいもの		VI b④		

第4表 土器出土状況

住	土師器坏				須恵器坏				未熟土器	陶胎陶器	
	環	環	環	環	環	環	環	環			
1 住	B I a		B III a		B	高台付環	b		A		
2 住	B				B I B II		b			A	
3 住						高台付皿		VI b④			○
4 住						高台付皿	a	b			
5 A 住							a		VI b①		
5 B 住							a		VI a④		
6 住		B II c									
7 住	B				B I						
1号棟		A II				a		VI c②		B	高台付環 A・高台付環 B・裏・鉢・飛脚鉢
2号棟	A I										
土塚9	A I	A II	A III		A				B		
土塚11					B				VI b①	A	
3号竪穴									VI b①		
溝 7		B II c							VI b④		
A R-10P1						1 b①			VI a④	VI b④	○
埋設土器										高台付環 B	
炊茶甕 (H A 類)	B I b④	B II a	B II b②	B II b③	B II c	高台付環 其皿	1 b①	II c④	VI c④	VI b④	○
炊茶甕 (H B 類)	B I a	B II a	B II b②	B II b③	B II c	高台付皿		II c④	VI a④	VI a④	○
炊茶甕 (H C 類)	A II	B II a	B II c			高台付皿			VI c②	VI b④	○

は回転系切りがある。B類は器形と外面調整技法から次のようなものがみられる。

**B 類** 器高が高く、底径の小さいもので体部が外傾してゆくもの。

**B 類** 器高が低く、底径が大きいもので体部が外傾してゆくもの。

**B 類** 器高が低く、底径が小さいもので体部が内弯するものと外傾してゆくものがある。

B 類土器の細部器形には変異があり、底径/口径比も 0.36~0.51 と幅がある。

外面の再調整をみると無調整のもの(a)、再調整のあるもの(b)、不明のもの(c)がある。b類の調整には、体部下端に手持ちヘラケズリ、底部全体~体部下端に手持ちヘラケズリ、底部全体~体部下端に回転ヘラケズリ、底部全体に回転ケズリの3種類がある。

土師器環はこれらの特徴から第3表のように分類できる。

高台付皿はロク口使用のもので底部から開きぎみに外傾してゆき口縁部でやや外反する。切り離しは回転系切りである。内面にはヘラミガキ・黒色処理がみとめられる。

碗はロク口使用のもので内弯しながら立ち上がる。高台部は低く外側に開く。

耳皿は坏部の両側を折りまげたもので、高台部は外側に開く。坏部内面にはヘラミガキが行なわれ、外面高台部にはロク口痕がみられる。

甕には製作にロク口不使用のもの(A)とロク口使用のもの(B)がある。B類には長胴形のもの(B類)と小形のもの(B類)がある。B類の口縁端部は上方につまみだされる。A、B類の中には体部外面にヘラケズリがみとめられるものがある。

**【須恵器】** 須恵器には坏、高台付坏、蓋、甕がある。

坏には再調整の有無で、底部周辺手持ちヘラケズリ( )、底部全体~体部下端に手持ちヘラケズリ( )、底部全体~体部下端に回転ケズリ( )、底部全体回転ケズリ( )、調整なし( )のものにわかれる。これらの底部切り離しにはヘラ切り(a)、回転系切り(b)、調整等により不明のもの(c)がある。これらの器形には、器高が低く底部の大きいもので、体部が外傾するもの、器高が高く底部の大きいもので、体部が外傾するもの、器高が高く底部の小さいもので、体部が内弯するもの、器高が低く底部の小さいもので、体部が内弯するもの、がある。これらの特徴から須恵器坏は第3表のように分類される。

高台付坏は底部から直線的に外傾し高台が長く外側にはりだすものである。深い碗形のもので稜がみられるもの(A)と浅いもの(B)がある。

蓋は、口縁が長く直角に折れるもの(A)と天井がハの字状で端部がわずかに折れるもの(B)がある。B類のつまみはリング状のつまみをもつものと擬宝珠状のつまみをもつものがある。

甕は肩部から口縁部が残っているだけで全体の形は不明である。口縁部は縁帯が上方につまみだされるもの(A)と下方に折れ曲がるもの(B)等がある。

**【赤焼土器】** 坏と甕がある。坏はすべてロク口調整され、内外面に再調整はない。切り離し

は回転系切りである。器形には体部が外傾しながら立ち上がる法量の大きいもの（A）と内湾して立ち上がる法量の小さいもの（B）がある。甕は頸部の短い小形のもので最大径が肩部にある。口縁端部がわずかにつまみだされる。ロク口調整で底部切り離しは回転系切りである。

## 2. 土器の年代

前節では、器形、調整、切り離し等の主な特徴を述べた。これらの土器は第4表のような出土状況となっている。各遺構からの土器の出土量は少ないので個々の遺構出土の土師器坏と須恵器坏の特徴を他の遺跡の調査成果と比較してその時期を考えてみたい。

東北地方南部の土師器編年は氏家によって示されている（氏家 1957）。その後、坏類の製作技法、形態により編年の細分が試みられてきている（白鳥 1980、丹羽・小野寺・阿部 1981、森 1983）。この中でA類のような特徴をもつ土器は国分寺下層式に、B類のようなロク口使用の坏を表杉ノ入式とした。この中で国分寺下層式は表杉ノ入式に先行するもので8世紀という年代が示された。表杉ノ入式については土師器坏を中心に編年が試みられており、県南の遺跡で、宮前遺跡第20号住居 青木遺跡第21号住居 東山遺跡土器溜まり 家老内遺跡第2号住居 安久東遺跡第2号住居という変遷が考えられた。この中で共伴した灰釉陶器から東山遺跡土器溜まりのものが9世紀中頃、安久東遺跡第2号住居出土土器が10世紀との年代が示されている（丹羽 1983、佐々木 1984）。

また県北の色麻古墳群では周辺の住居跡出土の土器で、色麻第1グループ 第2グループ 第3グループの変遷が考えられ、第3グループは灰釉長頸瓶の年代で9世紀後半～10世紀初頭の年代がしめされた（古川 1984）。

本遺跡から出土した土師器の中でまとまりがみられるのは第1号住居跡、第9号土壌であり、他は少ないため、この2つの遺構以外のものは類例から年代を考える。

### 土師器

【坏】 A類には～類がある。この中で、A～A類は第9号土壌から一括して出土している。A～A類の特徴を示す坏は名取市清水遺跡第群土器に類例がある。これらは国分寺下層式に比定され8世紀後半以降に位置づけられている。A類は志波姫町御駒堂遺跡第群土器に類例がみられ、8世紀後半とされている。A類は名取市清水遺跡第群土器や対馬遺跡等に類例があり、8世紀後半とされている。

このことから一括して出土したA～A類は8世紀中頃より後半のものに近いと思われる。土師器坏B類は表杉ノ入式である。遺構に伴って第1号住居跡から土師器坏のB a、B a類が出土している。土師器坏は体部が丸みをもって外傾するもので、底径/口径比は0.36～0.43の範囲にある。底部は糸切りで再調整は施されていない。このような底径/口径の比で無調整の坏

が共伴するものは、泉市竹の内遺跡第1号住居跡や色麻町色麻古墳群の色麻第3グループの住居跡(第14号住居跡等)に例がみられる。泉市竹の内遺跡第1号住居跡は幅をもたせ9世紀中葉～10世紀前葉とし、色麻遺跡第3グループは同グループの第36号住居出土の灰釉長頸瓶高台等で9世紀後半～10世紀初頭の時期が考えられている。器形や底径/口径比が色麻遺跡に類似することからB a類、B a類については9世紀後半～10世紀初と考えられる。

第1号住居跡以外から出土した坏について器形・調整技法等から時期を考えてみる。

B 類は口径と底径/口径比が大きく、体部が直線的に立ち上がるものとやや丸みをもって立ち上がるものがある。B 類は東山遺跡土器溜まりや家老内遺跡第2号住居跡出土の土器に類例がみられる。B 類は東山遺跡土器溜まりが9世紀中頃に位置づけられていることおよび家老内遺跡第2号住居跡がそれに後続するとみられていることからややおおまかではあるが、9世紀中～後半に位置づけられると思われる。B b、B b 類についてはB、B a、B a類に含まれる可能性があり9世紀中頃～10世紀初頭としておきたい。

【甕・その他の遺物】 この他に甕、耳皿、塚高台付皿等が出土している。甕A類は土師器A類と伴うことで8世紀中頃以降に位置づけられる。甕B類、塚耳皿はロク口を使用していることからB類の坏のいずれかに伴うものと思われる。高台付皿は東濃産の9世紀後半とされる灰釉皿(多賀城跡調査研究所白鳥良一氏教示)と同じ第4号住居跡の壁柱穴から出土していることで9世紀後半に近い時期のものと思われる。

### 須恵器

【坏】 坏については土師器坏との共伴が少ないので他の遺跡と比較して年代を考えてみる。

坏の中で ~ 類は底径が大きく、安定感があるもので、浅いものと深いものがある。調整には回転ケズリと手持ちケズリがみられる。このような土器は硯沢遺跡に類例がみられ、8世紀中頃とされていることで ~ 類も8世紀中頃と思われる。

a類はヘラ切り離しのもので底部は ~ 類に比べてやや小さめになる。このような類例としてはふるくは糠塚遺跡、新しくは青木遺跡第21号住居跡、東山遺跡土器溜まりのものがある。糠塚遺跡のものについては国分寺下層式と共伴するとされ、その年代については8世紀後半とされている。一方、青木遺跡第21号住居跡・東山遺跡土器溜まりについては表杉ノ入式でも古い方とされ、9世紀中葉の年代が与えられている。以上のことから本遺跡の a類についてはややおおまかではあるが8世紀後半～9世紀中葉の間に位置づけられる。

b類は回転系切り離しのもので、器形的には底部が ~ 類ほどではないが、底部の大きいもの( )と小さいもの(、 )がある。これらは表杉ノ入式に伴うものである。b

類は底径が小さく体部がやや内弯して立ち上がるものであり、家老内遺跡第2号住居跡と安久東遺跡の間に類例がみられる。これらは共伴する土師器坏から9世紀後半～10世紀中頃に位

置づけられている。このことから、類は9世紀後半～10世紀中頃と考えられる。なお、b類は表杉ノ入式期の古い段階の青木遺跡第21号住居跡等に類例がみられることでほぼ9世紀前半～中頃としておきたい。

【高台付坏】 高台付坏の中で、碗形をして体部下半に稜がみられるA類は硯沢遺跡や色麻町色麻古墳群71号墳に類例がみられ、8世紀中頃のものと考えられており、高台付坏A類は8世紀中頃に位置づけしておきたい。高台付坏B類は特に限定できない。

【蓋】 蓋は体部が直角に折れるもの(A類)と先端が折れるもの(B類)がある。これらは掘立柱建物跡、ピット27から8世紀中頃と考えられる須恵器坏c類、高台付坏A類と出土している。遺構に伴うものではないがほぼ同時期で8世紀中頃に近いものと考えられる。

【甕・鉢・長頸瓶】 甕A類は第1号住居跡の煙道堆積土中から出土していることで9世紀後半から10世紀中頃の間と考えられるが、他の甕、鉢、長頸瓶は土師器坏A、B類のいずれかに伴うものである。

【赤焼土器】 赤焼土器坏A類は体部が外傾してゆくもので、底径/口径比が0.35～0.43の範囲にある。また、回転系切り離し無調整の土師器坏とロク口使用甕が共伴する。このような赤焼土器坏と回転系切り離し無調整の土師器坏、ロク口使用甕が共伴するのは10世紀後半と考えられている安久東遺跡第2号住居があり、赤焼土器坏の器形も類似するものもことから10世紀代と思われる。

埋設土器遺構出土の小形の坏と甕はセットとして出土した例はなくその時期についてははっきりしないが、表杉ノ入式期の中で考えておきたい。

【灰釉陶器・緑釉陶器】 第4号住居跡・溝7・遺物包含層から灰釉陶器片が7点、緑釉陶器片が2点出土している。ここでは器形・技法の観察が可能なものについて年代を考察してみたい。

第4号住居出土の高台付皿(第12図2)はややいびつであるが、体部がゆるく内弯し、口縁部が外にひらくものである。底部に三日月形の高台が付けられる。釉薬は薄く刷毛塗りされているが、内外面の中央部は重ね焼きのため無釉の部分となる。胎土は含有物が少ない灰白色のもので、東濃産のものによく似ているとのことである。

遺物包含層出土の高台付皿(第34図5)も同様な器形であるが、底径がより大きく、三日月高台の特徴がよりはっきりしている。

以上の2点を器形・技法などの特徴から猿投窯編年(愛知県教育委員会1983)に当てはめると、黒笹90号窯式にあたる。黒笹90窯式の年代については、滋賀県鴨遺跡で貞観15年(873)銘の木簡と共伴した例(滋賀県高島町教育委員会1980)などから9世紀後半頃に位置付けされている(前川1984)。本遺跡出土の灰釉陶器も9世紀後半に位置付けされるものであろう。

なお、灰釉陶器については、白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所）・千葉孝弥（多賀城市教育委員会）両氏にご教示をいただいた。

【包含層の土器】 包含層では土師器坏（A、B～類）、須恵器坏（～類）が出土している。土師器坏は8世紀後半の国分寺下層式と9世紀中頃～10世紀の表杉ノ入式がある。須恵器坏は8世紀中頃～後半の国分寺下層式に伴うもの（～a類）と9～10世紀の表杉ノ入式に伴うもの（b類）がある。土師器坏、須恵器ともに8世紀後半9世紀中頃～10世紀前半と考えられるものがある。

遺物包含層の土師器坏、B類～B類は混在しており、これらは層的に分かれぬ。表杉ノ入式期の中でも9世紀後半～10世紀初めのものが多い。

### 3. 遺構の年代

なお、6号住居からは土師器坏B類で体部が直線的に立ち上がり、口径/底径比が0.51を示し、井桁状のミガキを持つものとヘラ切の須恵器坏（a）が伴う5B住居からはヘラ切の須恵器坏と糸切の須恵器坏（b）が伴う。このことで両住居跡は9世紀前半～9世紀中頃に考えられる。

以上のような遺物の検討・遺物の出土状況（第4表）・下記に示した遺構の重複関係から年代が推定できるのは以下の遺構である。

8世紀後半；	第9号土壌
9世紀前半～9世紀中頃；	第5A、5B号住居跡、第6号住居跡
9世紀後半；	第1号住居跡、第4号住居跡
10世紀；	第2号住居跡、7号溝

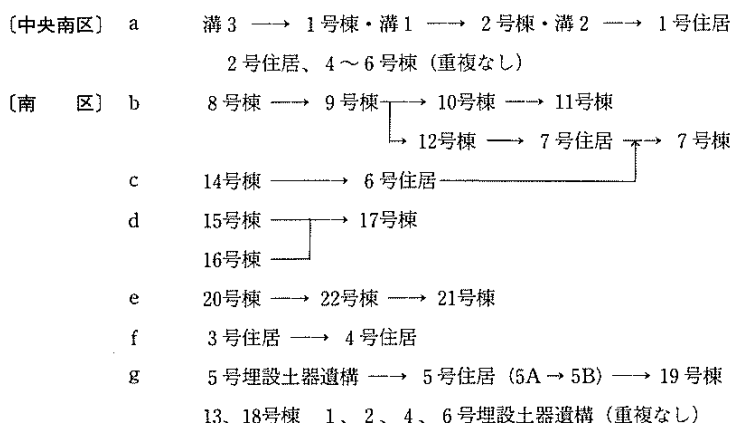
なお、住居跡の中で第3号住居跡は第4号住居跡に切られていることで9世紀後半がそれ以前、第7号住居はロク口使用の甕と回転糸切りの土師器坏底部が出土しているので表杉ノ入式期と考えられる。掘立柱建物跡の第1、2号棟は切り合いから第1号住居より古い、第1号棟の柱穴埋土から8世紀中葉に位置づけられる土師器坏、須恵器（高台付坏A、蓋）等が出土しており、ほぼ8世紀中頃と考えられている。この土器は直接遺構に伴うものではないが、周辺からも同時期の遺物が出土していることからほぼ同時期の8世紀中頃に位置づけられる。他の掘立柱建物跡は柱穴埋土から表杉ノ入式の坏、甕の破片が出土していることで9～10世紀の間に考えられる。また、第9号土壌以外の土壌、焼土遺構、第7号溝以外の溝等は堆積土中から土師器（坏・甕）等の破片が出土しているがいずれも破片であるため年代ははっきりしない。

### 4. 遺構について

今回の調査で検出した主な遺構は竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡21棟、埋設土器遺構6基、焼土遺構8基、竪穴遺構4基、土壌8基である。ここでは相互に関連をもつ竪穴住居跡、掘立

柱建物跡、埋設土器遺構について考察を加える。

まず、これらの遺構について重複関係を整理すると次のようになる。



以下、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、埋設土器遺構の順に検討を加える。

### a . 竪穴住居跡

中央南区から2軒（1、2号住居）、南区から5軒（3～7号住居）、計7軒が検出された。いずれも出土土器等の検討から9～10世紀に年代づけられる。

まず住居の規模について、確認しえた一辺の大きさから規模を推定し比較してみると相互にかなりばらばらしていることがわかる。これは平安時代にみられる共通した傾向であるが、とりわけ3号住居は一辺が8.5m、推定床面積70㎡以上もあり、他の住居とは規模の点で大きく異なっている。なお、この大きさは平安時代の住居跡としても大型に属するものである。

住居の構造については、柱穴の特徴から、主柱穴のみからなる住居跡（1、2号住居）、壁柱穴のみからなる住居跡（6、7号住居跡）、主柱穴と壁柱穴からなる住居跡（3～5号住居）とに分けることができる。またいずれも周溝が確認されているが、削平が著しく、住居構造のその他の点については明らかでない。住居構造が共通する住居跡は重複あるいは近接して分布しており、同時併存あるいは近い時期に存在していたことが考えられる。ただし、本遺跡でみとめられた住居跡の規模・構造上の違いは単純に時間的差異によるものとは考え難い。

### b . 掘立柱建物跡

中央南区から5棟（1、2、4～6号棟）、南区から16棟（7～22号棟）、計21棟が検出された。各建物の規模等については第1表に示したとおりである。以下、各建物跡の特徴および年代について検討を加える。

【中央南区】全体の規模がわかったのは1、2号棟のみである。いずれも3×2間の南北棟で、柱間が5～7尺、柱穴はいずれも方形を基調とする等、共通する特徴を有する。また、共に建物跡の周囲をめぐる溝<sup>（注1）</sup>をもち、しかもほぼ同位置で重複していることから、これらは近



接した時期に建て替えられた可能性が高い。

4、5号棟はいずれも南半が削平されており全容はわからないが、棟方向、柱穴の形等において1、2号棟と近似した特徴をもつ。しかも1、2号棟と同様に第 層によって覆われていることから、これらの建物は近接した時期に構築された可能性が高い。6号棟についても同様であるが確認できた柱穴は3個のみで建物は調査区外に延びるため、建物の棟方向、規模等については不明である。

建物跡の具体的な年代については、1、2号棟の柱痕跡内出土の土器から、国分寺下層式期に位置づけられる。

【南区】 掘立柱建物は建物の規模・構造の違いから大きく2つのグループに分けることができる。1つは3×2間を基調とし、柱間寸法が7~8尺、床面積15~25㎡前後の比較的規模の小さい建物跡のグループ(8~10、12、14、15、20~22号棟)であり、もう1つは間数に変異があるが、柱間寸法が7~10尺、床面積にして35㎡以上の規模の大きい建物跡のグループ(7、11、13、16~19号棟)である。柱穴はいずれも方形を基調としているが概して後者のほうが大きい。

これらの建物跡の年代については、柱穴出土の土器が細片かつ稀少であるため判定が難しいが、建物跡周辺から国分寺下層式の土器の出土がみとめられないことから、表杉ノ入式期(平安時代)ものと考えられる。

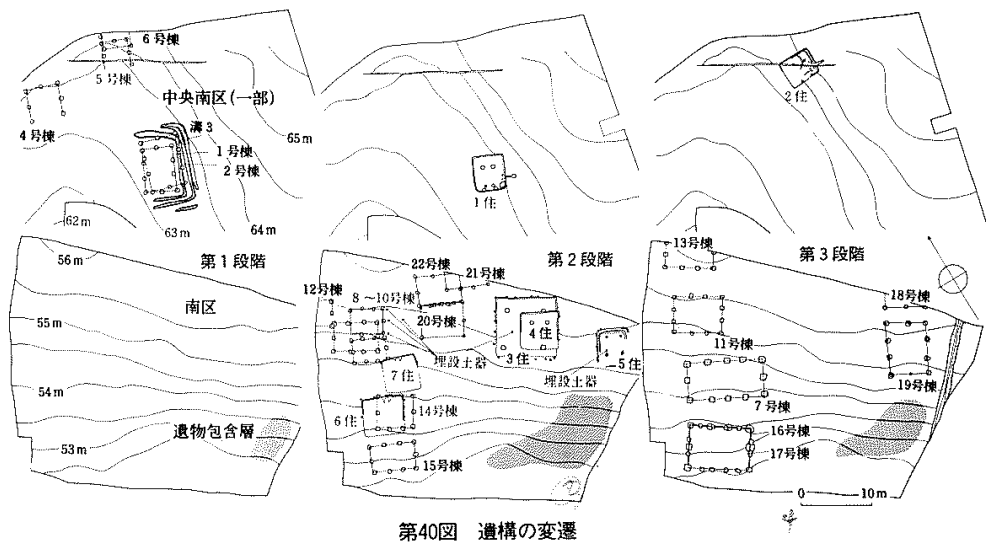
### c. 埋設土器遺構

出土状況、他の遺構と近接する位置関係から、建物・住居に伴って土器が埋設されたものと考えられる。特に5号埋設土器遺構は5号住居の床面下で検出されており、住居構築に際して埋設された可能性がある。その他のものについては削平が著しく、周囲の遺構との重複関係は不明だが、個々の位置関係から3号埋設土器遺構は3号住居に、1、2、4、6号埋設土器遺構は掘立柱建物跡に伴うことが考えられる。

埋設された土器(土師器)は特殊な器形の小型土器であり、明瞭な使用の痕跡、磨滅がみとめられない。また、セットになった土器は胎土、焼成状態が酷似しており、日常雑器とは異なった目的のために、一括して製作されているようである。

こうした特徴から本遺跡の埋設土器遺構の非日常的な性格は明らかであり、なんらかの祭祀、儀礼にかかわって残されたものである可能性が高い。具体的には墓壇、後産の処理といった可能性も考えられるが、この遺構が住居、建物に伴う可能性が高いこと、複数の遺構が同時に設置されているらしいことから地鎮儀礼に伴う土器埋設の可能性を指摘しておきたい。

地鎮とされる遺構は従来、官衙、寺院に限られ、一般遺跡での明確な例は知られていない。類例は仙台中田畑中遺跡にあり、本遺跡と同様な土器が埋設されたピットが検出されている



るが、その性格は不明である（青沼・長島 1983）。

#### d . 遺構群の変遷

今回の調査で検出した遺構の重複関係から遺構群を設定し、その年代、変遷を検討し整理したのが第40図である。

まず、中央南区では遺構間の重複関係、出土土器の年代から1、2、4~6号棟 1号住居 2号住居跡という3段階の変遷が捉えられ、それぞれの遺構は8世紀中頃、9世紀後半、10世紀代に位置づけられた。

一方、南区では遺構の数が多いため、変遷は中央南区ほど明瞭ではないが、先に示した重複関係を個々にみても、8~10号棟 11号棟、14号棟 7棟、15号棟 16、17号棟というように、規模の小さい建物群から規模の大きい建物群へ、という大きな流れがみてとれる。竪穴住居跡は規模の小さい建物群と重複するが、規模の大きい建物を切るものではなく、出土土器からみると9世紀代（第2段階）のものである。これらは相互の重複が多く更に細分の余地があるが、これ以上同時併存の遺構を抽出することは難しい。また、各遺構の年代についてもまとまった遺物の出土がないため厳密な時期を判定できない。ただし、建物の規模、構造が変化してゆく10世紀代（第3段階）への移行期については、第2段階の中でも比較的新しく位置づけられる、4、7号住居が9世紀後半と考えられることから、この頃が集落の様相が変わってゆく時期にあっていたとみることもできよう。

#### e . 集落の立地と構成

遺跡は開析の進んだ丘陵上にあり、遺構群はこの起伏に富んだ地形の中でも南向きの斜面を

選んで占地している(第3、4図)。調査区内の旧地形をみていると、現地表面では埋没してしまっているが、当時は浅い沢が幾つもはいりこんでいたことがわかる。

とりわけ南区では、調査区南側の沢状の窪地に多量の遺物・炭を含む極暗褐色土の厚い堆積がみられ、窪地が廃棄の場になっていたものと思われる。南区の場合、遺構の変遷は複数期にわたっており一概に扱えないが、今回検出された遺構はいずれも沢地の上側の斜面にあり、しかも遺構群と遺物包含層の間には、竪穴住居や掘立柱建物に囲まれるように、遺構の存在しない半円形の空間がある。また、掘立柱建物をみると同一地点で2~4回の重複がみとめられ、棟方向は多少のズレはあるものの東西ないし南北に揃えられている(第4図)。

こうした厳密な遺構の配置や空間の使い分けは、県内の9世紀の集落が一般的に遺構の重複はあってもその空間構成に明瞭な構造をもたない自由な構成をとっているのと対照的である。

また、特殊な儀礼に関わる埋設土器遺構や豊富な須恵器、施釉陶器さらには円面硯、鉄製品、瓦等が出土していることも注目される。

おそらく、こうした集落の出現は平安時代(9世紀)における社会の変化の一端を示すものであり、それは当時の政治、文化の中心である多賀城に近接する立地と無関係ではない。

本年度の調査は調査範囲が限られたため全容を明らかにすることができなかったが、遺構の立地条件から考えて、中央南区と南区の間および両発掘区の西側にさらに遺構の分布がのびる可能性がある。次年度以降の調査では集落の全体像が更に解明されると思われるので、集落の構成、社会的性格についてはこれをもって詳述する予定である。

注1) この溝については、建物跡からの距離がばらつくこと、また梁行からの距離よりも桁行のほうが短いことから「雨落ち溝」とは考えられず、性格は不明である。なお周溝を伴う掘立柱建物は多賀城市新田遺跡(多賀城市教育委員会1991年調査)においても検出されている。

## 引用・参考文献

- 愛知県教育委員会（1983）：『愛知県古窯跡分布調査報告 尾北地区・三河地区』
- 青沼一民・長島栄一（1983）：「中田畑中遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第53集 仙台市教育委員会
- 氏家和則（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14号 東北史学会
- 小井川和夫・小川淳一（1982）：「御崎堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会
- 佐々木和博（1984）：「鹿島遺跡・竹ノ内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集 宮城県教育委員会
- 白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』
- 志間泰治・小井川和夫・加藤道男（1972）：『糠塚遺跡』『宮城県文化財調査報告書』第53集 宮城県教育委員会
- 高島町教育委員会（1980）：『嶋遺跡』
- 多賀城市教育委員会（1981）：『新田遺跡現地説明会資料』
- 土岐山武（1980）：「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会
- 丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
- 丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志（1981）：「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会
- 古川一明（1983）：「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』 宮城県教育委員会
- 古川一明（1984）：「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』 宮城県教育委員会
- 前川要（1984）：「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」 瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要
- 真山悟（1981）：「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会
- 真山悟（1981）：「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会
- 水沢市教育委員会（1981）：「胆沢城跡昭和55年度発掘調査概報』
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1981）：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』
- 森貢喜（1982）：「多賀城市高崎水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集 宮城県教委
- 森貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会

## ・天神台遺跡の調査

### 1. 調査の経過・地区設定

天神台遺跡は利府町加瀬字天神台・十三塚に所在する。郷楽遺跡と同じ丘陵にあるが、西から入り込む沢（県道吉岡塩釜線の通じているところ）の南側に位置する。調査は用地の関係から用地買収済みの地点を選び、昭和61年11月に行った。遺物が濃厚に分布する地域（道路敷の中心杭No.346～351）は用地の関係で調査することができなかった。

今回調査した地区は道路敷中心杭No.330～336付近である。地区設定は、道路敷の中心杭No.332とNo.333を結ぶ線をX軸、No.333でX軸に直交する線をY軸とし、さらにX・Y軸を3m単位に区分し、遺跡に3m単位のグリッドを設定した。Y軸は60mを単位としてB・Cに大区区分し、その中を3m単位にアルファベット（BB～BT・CA～CT）で、X軸は算用数字で示した。No.333の南側は60ライン、西側はBTラインとなる。調査は前面の表土除表を基本としたが、遺物の少ない尾根付近は3mおきに幅3mのトレンチを設定し、必要に応じて拡張を行なった。遺構の実測図作成法は郷楽遺跡の場合に準じた。

### 2. 調査の内容

今回の調査区は尾根から南に緩やかに傾斜する地形である。基本層位は第1層が表土、第2層が地山崩壊土、第3層が地山の粘土層で、大部分が表土を取り去ると地山が露出するような状況であった。発見された遺構は土壇18基、溝7条などで、すべて地山面で確認された。

#### 1. 遺構と遺物

##### 土壇

18基あるが第1号土壇を除くと出土品は少なく、時代や性格を特定できるものはない。

##### 第1土壇

〔位置〕 BA-96区にある。

〔平面形・規模〕 楕円形で、長軸2.4m、短軸1.5m、深さ16cmある。

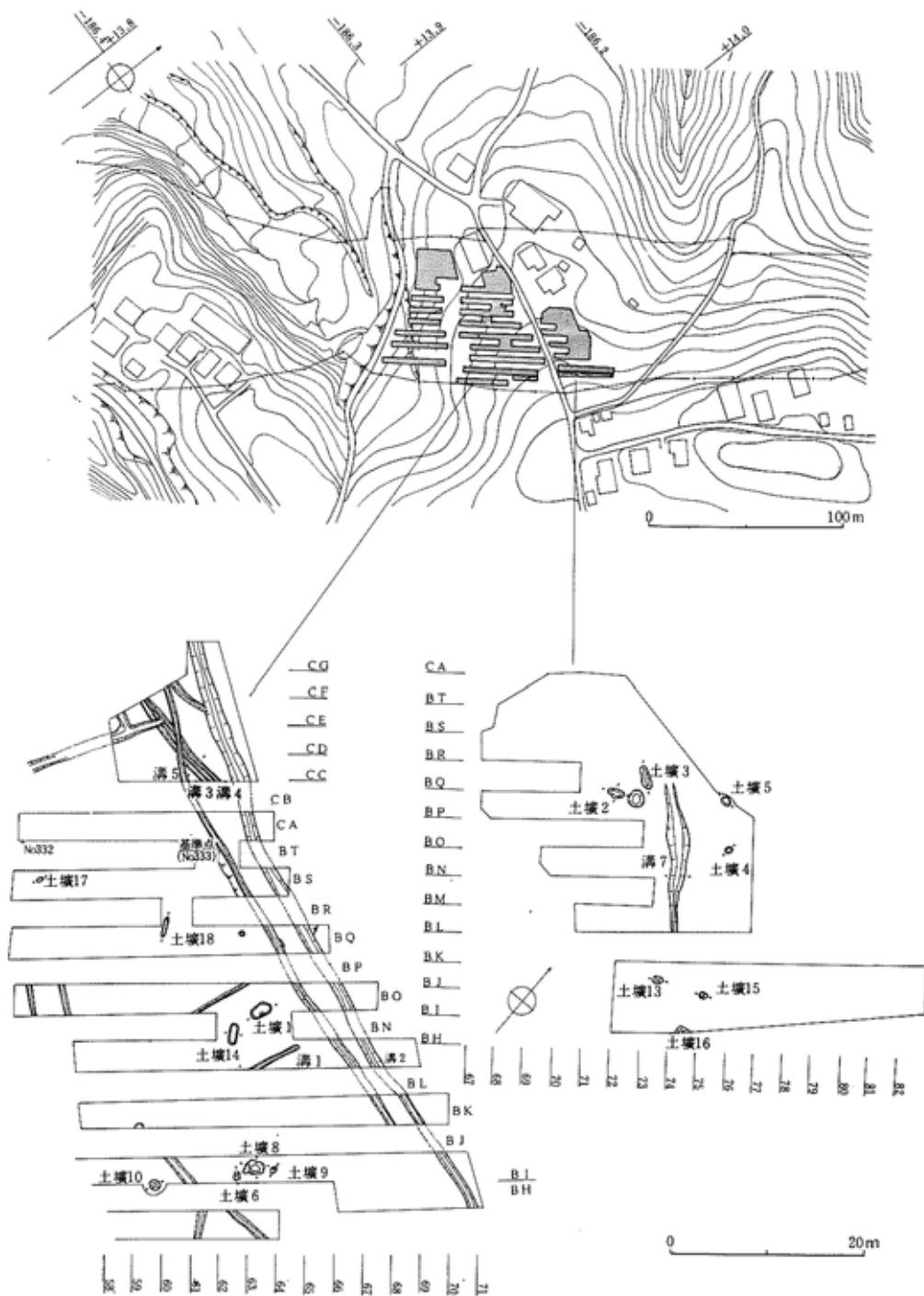
〔壁・その他〕 壁の立ち上がりは緩やかである。底面の南側に楕円形の窪み（長軸1.0×短軸0.5m、深さ10cm）が、東側にピット（径30cm、深さ15cm）がある。

〔堆積層・遺物〕 2枚ある。第2層から土師器（坏・甕）、赤焼土器（坏・高台付坏）などが出土した。

〔性格〕 遺物の出土状況からゴミ捨て穴の可能性はある。

##### 溝

3条あるが、出土品はなく、時代や性格を特定できるものはない。



第1図 発掘区と遺構

# 写 真 图 版

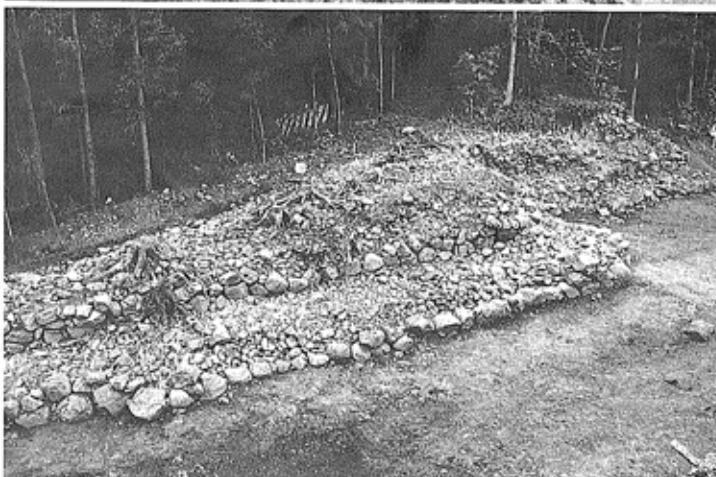
写真図版1  
西館跡  
石垣全景（北東より）



石垣全景（東より）



石垣中央部（北より）



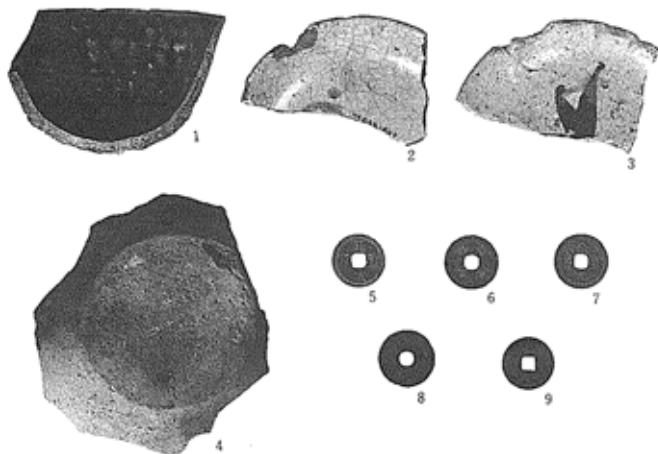




写真図版2  
西館跡  
西石垣（北より）



石垣中央部（北より）



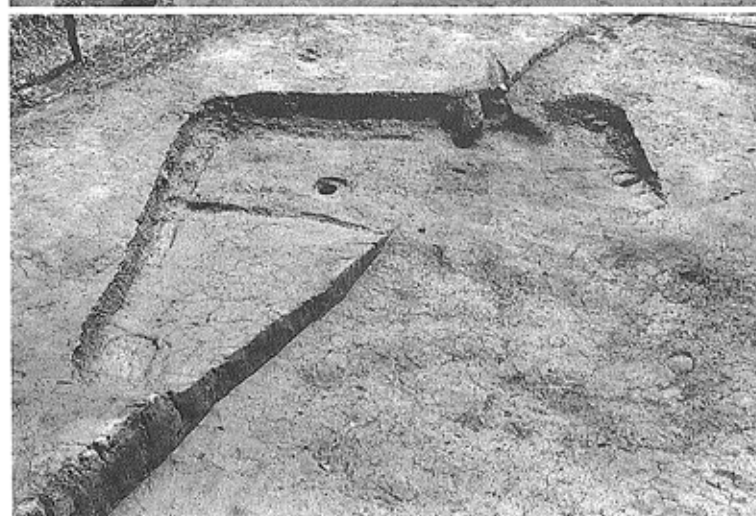
出土遺物

1. 総持部碗
2. 美濃丸皿
3. 志野織部皿（草文）
4. 土師質土器（灯明皿）
5. 紹永元宝
6. 景徳元宝
7. 至道元宝
8. 祥符通宝
9. 寛永通宝

写真図版3  
郷来遺跡  
第1号住居跡  
(西より)



第2号住居跡  
(西より)



第3・4号住居跡  
(南より)

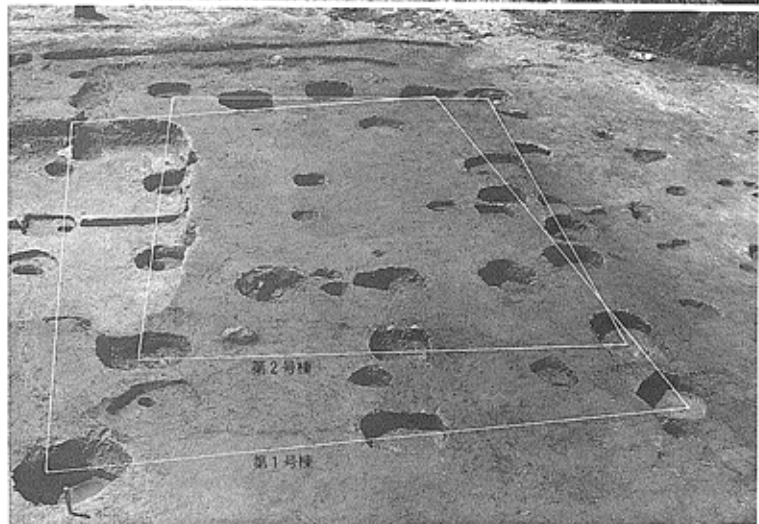




写真図版4  
 縄染遺跡  
 第5A・5B号住居跡  
 (南より)



第6・7号住居跡  
 (西より)



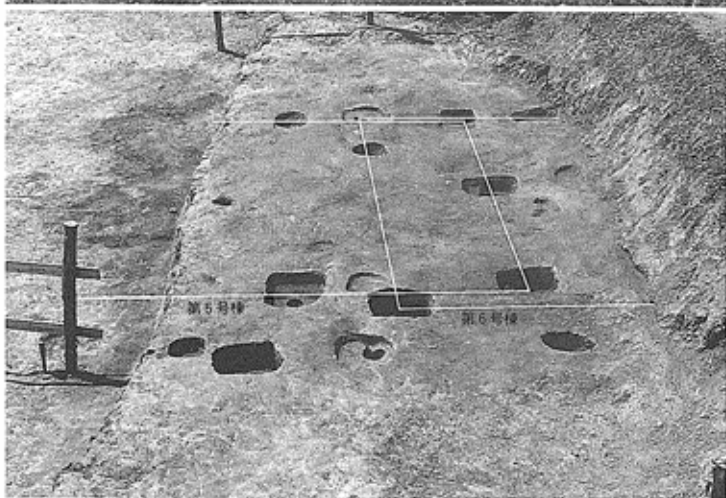
第1・2号棟 (北より)

写真図版 5  
郷来遺跡

第4号跡 (北より)

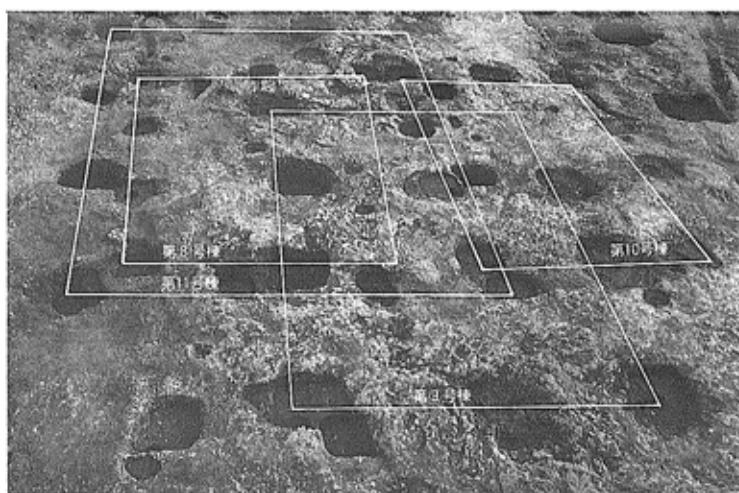


第5・6号棟 (東より)

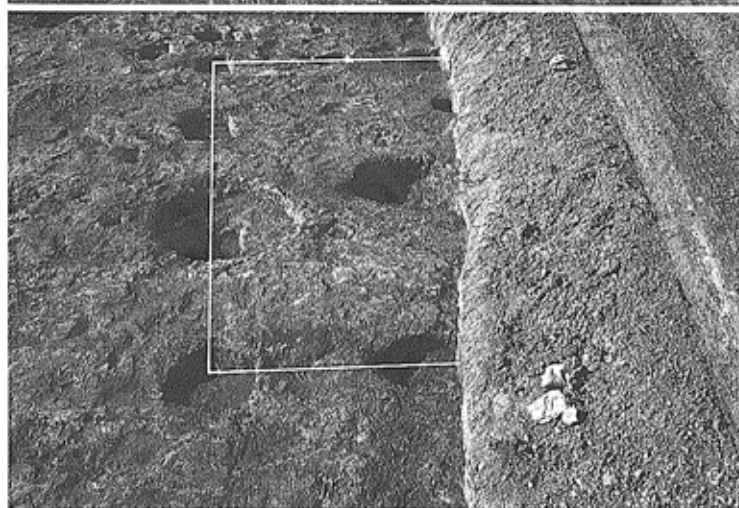


第7号棟 (西より)

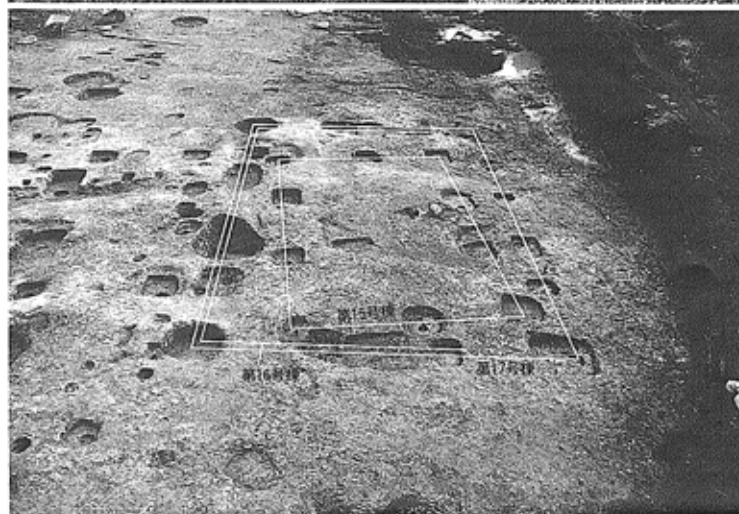




写真図版 6  
 掘築遺跡  
 第8・9・10・11号棟  
 (西より)



第13号棟 (東より)



第15・16・17号棟  
 (西より)

写真図版 7

郷楽遺跡

- (左) 第2号埋設土器  
遺構 (東より)
- (右) 第3号埋設土器  
遺構 (西より)

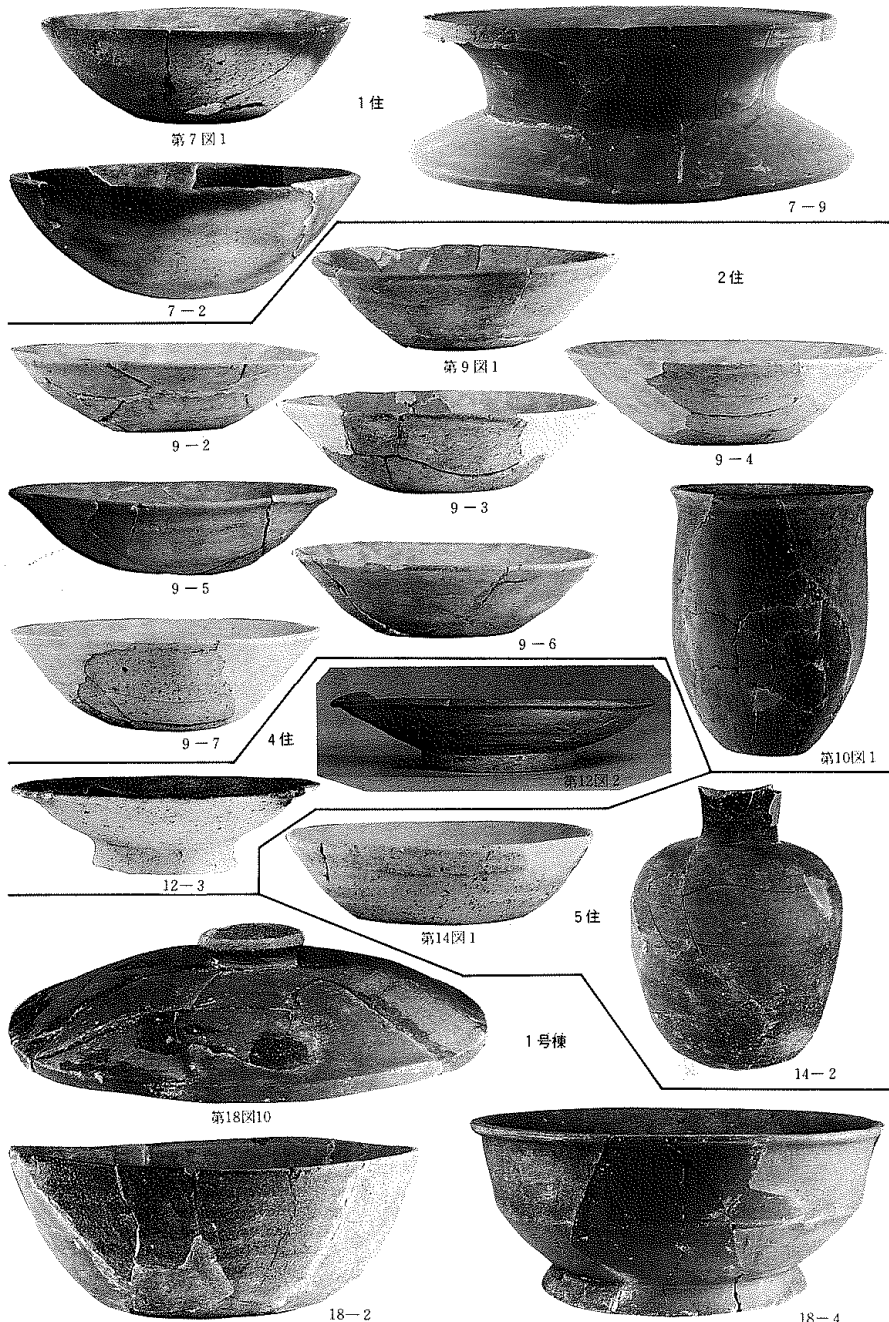


第4号埋設土器  
遺構 (北より)

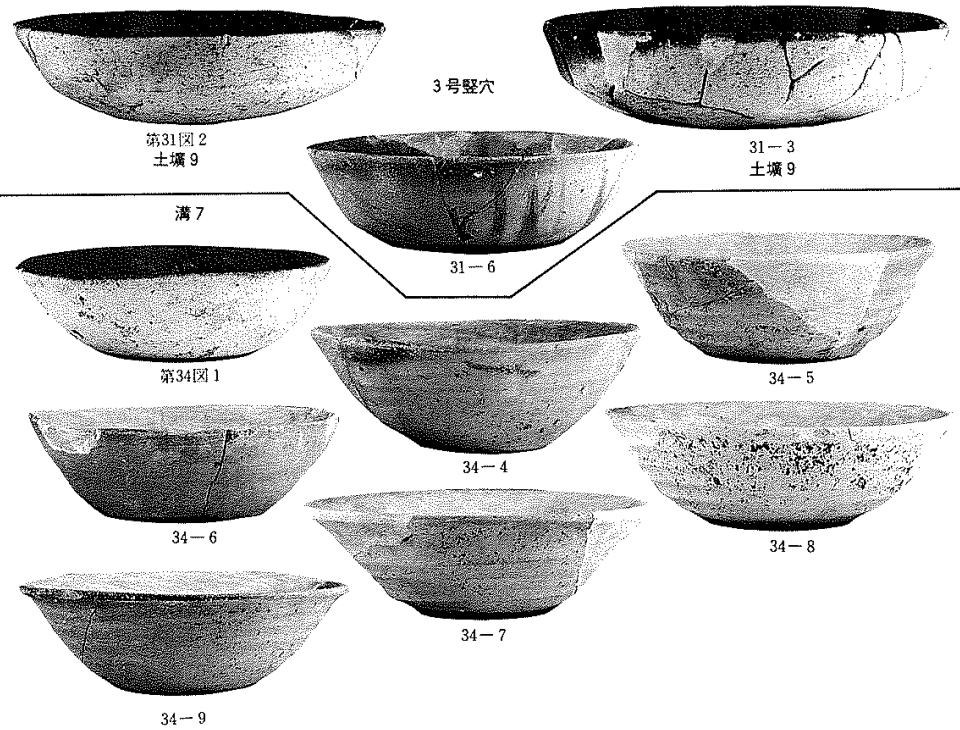


- (左) 第5号埋設土器  
遺構 (南より)
- (右) 第6号埋設土器  
遺構 (西より)



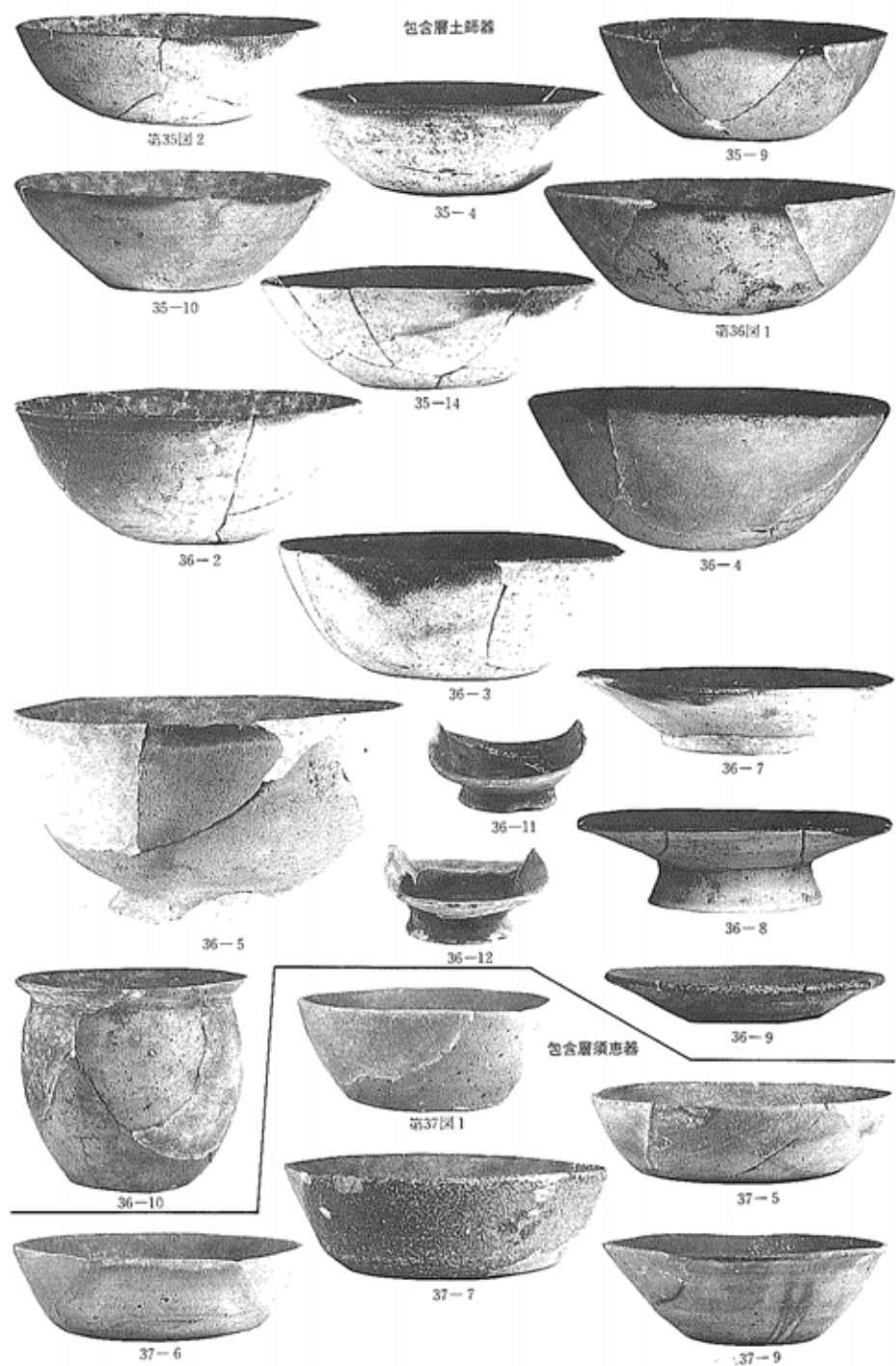


写真図版8 郷楽遺跡 遺構出土遺物

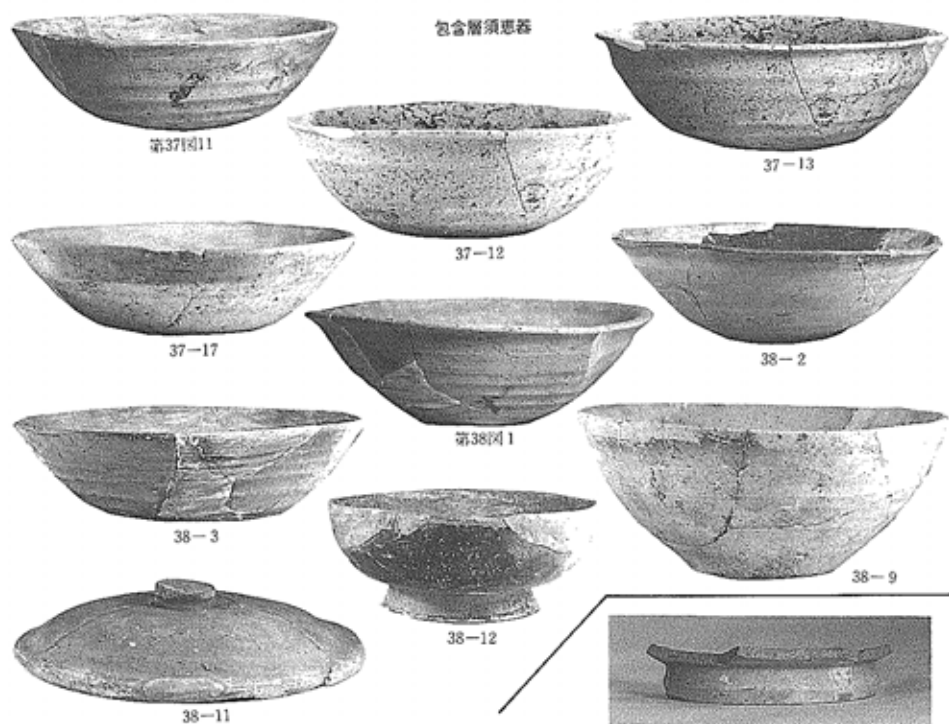


写真図版9 郷楽遺跡 遺構出土遺物





写真図版10 郷来遺跡 包含層出土遺物



包含層須恵器

第37図11

37-13

37-12

37-17

38-2

第38図1

38-3

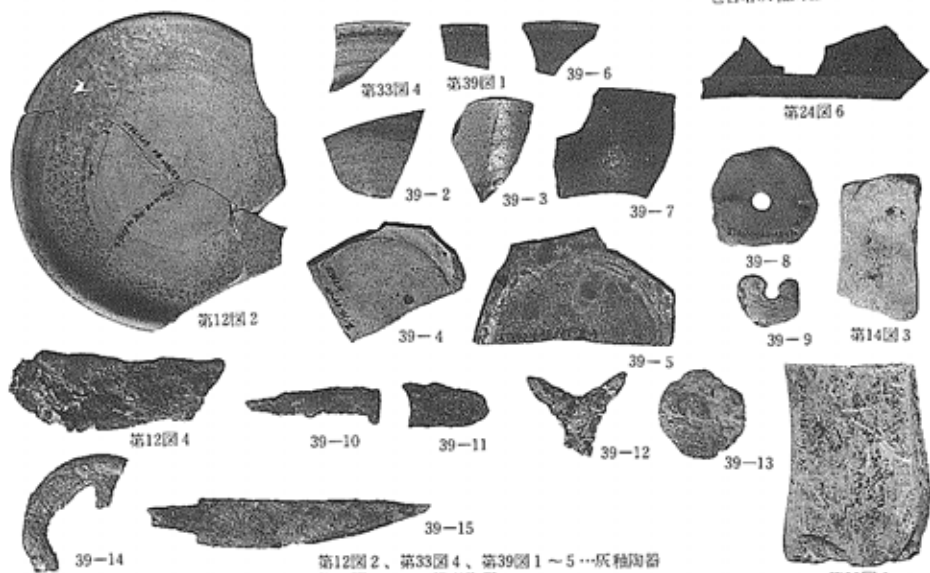
38-9

38-12

38-11

第39図5

包含層灰釉陶器



第33図4

第39図1

39-6

第24図6

39-2

39-3

39-7

39-8

第14図3

第12図2

39-4

39-5

39-9

第32図6

第12図4

39-10

39-11

39-12

39-13

39-14

39-15

第12図2、第33図4、第39図1～5…灰釉陶器

第39図6・7…緑釉陶器

第12図4、第39図10～14…鉄製品

第24図6…内面硯

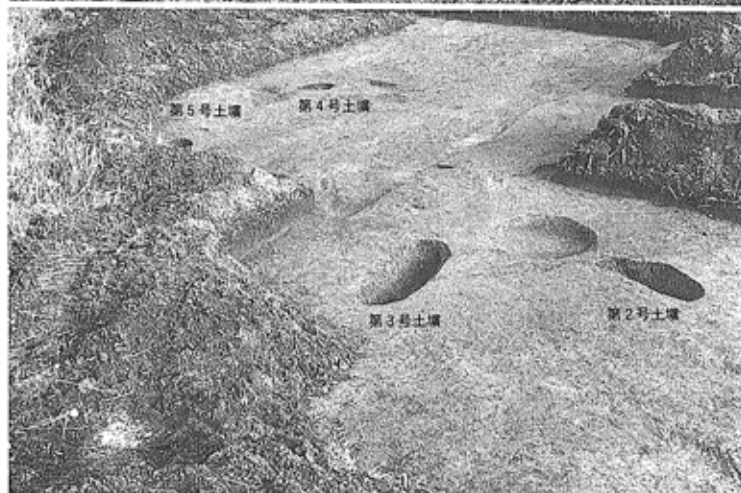
第39図8・9…紡錘車

第14図3、第32図6…砥石

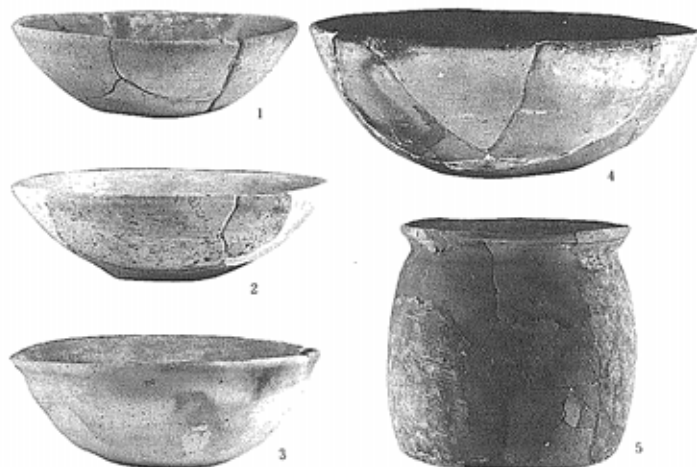
写真図版11 郷楽遺跡 包含層出土遺物灰釉・緑釉陶器、鉄製品ほか



写真図版12  
天神台遺跡  
第1号土壇（北より）



第2・3・4・5号土壇  
（南西より）



出土遺物

- 1・2. 赤焼土器杯
- 3・4. 土師器杯
- 5. 土師器甕